北辰會雜誌

第拾參號

明治二十九年十二月二十一日發行

（非賣品）

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第拾參號目次

論說

ヒュームの因果法　講師　西田幾太郎
大化の革新に就て（前々號續）　曾我部俊雄

雜錄

希臘神話集（前々號續）　教授　浦井恒堂
女郎花訓考　教授　高橋富兄
那谷の旅つと　教授　垂綸東涯
御嶽立山紀行（承前）　義山養愚

文苑

落葉混雨　草野時雨
送士官候補生歌併反歌　松下雅雄
和歌七首　教授　村上函峯
今樣十二首
發句十四句
呂蒙論　講師　浦井信
尾張敬公世家跋　蜂嶺生
題鐘馗捉鬼圖
詩三十三首

批評

本誌第十二號梗概評　藤馬卿

雜報

天長佳節。野球部員に檄す。弓術部競射略記。演說部大會記事。有志大競漕會記事。秋季陸上大運動會記事。其他數件

北辰會雜誌第拾參號

論說

ヒューム以前の哲學發達

西田幾太郎

有名なる Hume の懷疑哲學は其起れる偶然にあらず、全く Locke, Berkeley の影響に由て起れる者なり、故に余は今ヒュームを論するに當て、先つ其歷史的發達を述へんと欲す

ベーコンとデカート

近世の始め哲學か宗教の羈絆を脫して獨立の研究をなすに當て歐洲よ二大偉人を生せり一は英の Lord Bacon にして一は佛の Ren'e Descartes 是なり此の二人の爲せる所相同き者ありと雖とも又大よ異なる者あり

此の二人共に天縱の英才を以て不羈獨立の精神を負ひデカート若年にして已よ群書を讀むに足らすとなしベーコン亦其書中よ Idols of mind を去ることを說けり二人共に中世の Scholastic 哲學を攻擊して其迷夢を攪破し哲學の一新研究法を創見して近世哲學の基を開けり

然れとも此の二人の擇へる方向に至つては大に異なりベーコンは感官（Sense）を尙ひデカートは理解力（Reason）を重んしベーコンは其方法（Method）を萬有科學よ取りデカートはそを數學よ取りベーコンは經驗（Experience）を以て眞理の標準となしデカートは Logical necessity を

以て之か標準となせりベーコンは特殊（particular）より一般（general）に上りデカートは一般より特殊に下れり

斯の如く二人其研究の法を異にせるより又自ら其研究の目的を異よしベーコンは力を自然(nature)の講究よ盡しデカートは專ら思想(thought)を研究せり故にベーコンの哲學は始終實地的（Practical）にしてデカートの哲學は全く思辨的（Speculative）なり是又實に二人か性質の然らしむる所なり

ベーコンの流に從ふ者之を稱して經驗學派（Empiricism）と云ひデカートの派に屬する者之を呼て唯理學派（Rationalism）となす是實に近世哲學の二大學派なり前者は試驗觀察に由て吾人の經驗以内の事實を知らんと欲し後者は覃思冥想を以て宇宙の大元を究め所謂 Metaphysics を創立せんとせり而して經驗學派は英國に行はれ之に屬する者 Hobbes, Locke, Berkeley, Hume, 等あり唯理學派は大陸に傳播し（Tenlincx, Malebranche, Spinoza, Leibniz）等デカートの後を繼けり

ロック

John Locke はベーコンホッブスの後を受けて卓然經驗學派の泰斗となる經驗學派の說にては吾人の智識を經驗以内に限れり然るに吾人は經驗以外の事物を知ると思ふこと亦鮮からす是に於て詳に智識の根本を探り明に之か範圍を定めさるへからすロック夙に此に見るあり乃ち其有名なる An Essay concerning Human Understanding を著して大に智識の Source, certainty, extent を論し一は以てデカートの學派を攻擊し一へ以て大よ經驗學派の根據を固うせり經驗學派の說へ遠く以太利の物理學者よ發したる者よして英國よ於ても中世已よロージャア、ベーコンの如き人ありフランシス、ベーコンの如きへ單よ其後を襲ひたるよ過きすと雖ともロックよ至りて始て深く此の學派の根底よ入り其卓見よ由て一新面目を開けり余かロックを以て此の學派の泰斗となす者正よ之か爲めなり

ロックの知識論へ全く經驗學派の立脚地よ由る者なり余今之を略述せんとするよ當り先つ氏の所謂觀念（Idea）なる語を明よせさるへからず此語氏よありてへ頗る廣き義を有し獨逸にて Vorstellung と云ふよ同しロック之を以て Object of Understanding を顯はすと云へり

ロック以爲らく吾人の觀念を有するへ確實なる事實よして誰も疑を入れさるへし然れとも此の觀念へ生れなからよして吾人よ存する者よあらす氏大よ innate idea の說よ反し暗よデカートを駁擊せり氏曰く心は固 tabula rasa の如く empty Cabinet の如しと

然らへ則ち吾人那邊よりして觀念を得たる乎ロック曰く是經驗より來れり經驗よ二あり一へ sensation よして一へ Reflexion なり前者は以て外界の事物を知り後者は以て精神の作用を知る而して觀念を分て簡單と複雜との二類となし簡單的觀念へ一或へ二以上の sensation 又へ reflexion 或へ二者の結合より生し其中よ就て Sensual idea へ即ち外界より來れる者よして外物か之を起す力を Quality と稱しQuality よ Primary 及ひ Secondary の別あり前者は外物か獨立よ有する所よして後者へ外物と吾人の感官との關係より生する者なり複雜的觀念とへ簡單的觀念の結合よ由

て成れる者よりして分て Mode, Substance, relation の三となせり故よロックの所謂 Substance とは簡單的觀念を結合せる一の Unknown essence なり而して因果法は關係の中よ之を說けり

向よ觀念は object of understanding なることを說けり故よ吾人決して觀念以外を知る能はず而して觀念は經驗より來る者なれは吾人の知識は一歩も經驗以上よ出るを得すロック曰く知識(knowledge)とは觀念の agreement or disagreement よ過きすと氏は知識を分て intuitive, demonstrative, sensitive の三類となせり

以上ロック知識論の綱要なり然れとも氏ハ決して自家の說を徹頭徹尾貫通せしめたるよあらす氏は其 phenomenalism を主張せると共に又 naive realism の傾きあり

ロック曰く "We have the knowledge of our own existence by intuition ; of the existence of God by demonstration, and of other things by sensation" と是氏自ら觀念以外の者を知り得ると を許したる者よして即ち自家撞着たるを免れさるなり且つ氏か primary quality と Secondary と を區別するよ至てハ撞着も亦甚しと云ふへし

ロック知識論已よ斯の如き撞着あるを以て此の瑕釁よ乘して起れる者バークレーヒュームは是なり

バークレー

Berkeley の學說ハロックよりヒュームよ移る橋梁をなす者なり氏の觀念論(Idealism)ハロックの Phenomenalism よ本きて其矛盾を除きたる者なり

バークレーハロックの Primary and Secondary qualities の區別を以て不合理となして之を廢し外物の存在ハ之を假定するの必要なしとして之を去れり是よ於て氏ハ觀念論に入らさるを得さる也然れとも氏ハヒュームの如く大胆なる能ハす氏は感覺に原因と順序とあるとを信し其本を神に歸せり氏ハロックと同しく神と自個との存在を許せり

バークレーの神を以て感覺の源を說明したるは畢竟これXを以てXを解せる者よしてヒュームの地位を去ると間髪を容れさる者と云ふへし

結　論

以上已よヒューム以前哲學の發達を叙し畢れりヒュームの懷疑哲學ハ實よ其必然の結果なるとは苟もロックバークレーを一讀去る者の皆知る所なりヒュームハ固よりバークレーの影響を受くること大なりと雖とも又直よロックよ接し其云ふ所ハ單よロックの phenomenalism を最も合理的よ論究せるよ過きさる也然れとも元來近世哲學ハ希臘哲學よ比して大よ主觀的性質を有せり故よリードの如きハロックヒュームを以て直よデカート學派となすよ至れり其當否ハ余之を疑ふと雖ともデカートロック共よ個人的覺識(Individual Consciousness)を本とせるハ確實なり唯大陸派の懷疑哲學よ陷らさりし所以は其理由を信せるよ由るなり

ヒュームの因果法

序　論

ヒュームの因果法(Theory of Causation)ハ氏の哲學よありてハ最重要なる者よして殆んと其學說の中心となり氏の懷疑說(Scepticism)ハ之よ由て起り又氏の前人よ一歩を進めたる所以實よ

此よあり

ヒュームハベーコン以來の經驗學派と同く經驗（Experience）を以て眞理の標準となせり Treatise の序よ凡て學問の確固なる基礎ハ經驗よ在りと云へり又氏ハロックと同しく簡單的觀念の說よ反し知識ハ凡て感覺（Sensation）より來るを信せり唯ロックハ其撞着と曖昧の間よ感覺的分子論（Sensational atomism）を避けたりと雖とも氏ハ大胆よ之を自白せり

ヒュームの因果法ハ其感覺的分子論より來る者なり氏ハ彼此關係なし極簡單なる印象（Impressions）を以て唯一なる知識の根源となせるか故よ遂よ氏の如き說を生するよ至れるなり然れとも

ロック已よ感覺的分子論の傾向あり彼何故よヒュームの地位よ陷らさりしやロックハ Naive よ System of material Substances を許せり然らハベークレー已よ外物の存在を拒めり彼何故よヒュームの地位よ陷らさりしやベークレーは奇怪よも神の存在を許せりヒュームよ至りてハ然らす短刀直入直よ因果法の本營よ入り直よベークレーの假說を斬去せるより遂よ氏の如き說を生するよ至れり

余ハ因果法よ入る前よ先つ觀念及ひ觀念の關係よ就て一言せさるへからす

觀念の起因及ひ其聯合

ヒュームハロックの觀念よ代ふるよ perception なる語を以てせり而して氏ハ之を分て印象（impression）と觀念との二となせり印象とハヒュームの語を借れハ不可知的原因よ由て起れる者よしてロックの sensation と reflection とを含めり觀念とハ印象か記憶力又想像力の力よ由て心中よ再現せる者よして即ち印象の Copy なり故よ觀念と印象との差ハ degree の差よして後者ハ前者よ比すれハ大よ Vivacity と force とを有せり觀念とハ單よ faint impression なり而して又氏ハ觀念を分て簡單と複雜との二となし印象を分て又簡單と複雜との二となせり氏の簡單的印象と吾人の知識を構造する大元よして皆各個獨立の分つへからさる元子なり

斯の如くヒュームハ印象を以て吾人知識の唯一なる根本となせるか故よ若し觀念よ疑はしき者あれハ其由て起る印象よ反りて之を正すへしと云へり Inquiry の第二章よ "When we entertain any suspicion, that a philosophical term is employed without any meaning or idea, we need but inquire, from what impression is that supposed idea derived.?" と云へり

以上觀念の起因を說明せり然り而して此等の觀念か前後相踵て心中よ再現するや決して亂出する者よあらすして其間自ら一定の法則あり之の法を名けて觀念連合法（Law of Association）と云ふ觀念連合法よ三あり即ち Resemblance, Contiquity in time or space, and Cause or Effect 是なりヒュームハ Treatise よ於て之を觀念の自然的關係と名け以て其哲學的關係と區別せり

觀念の關係に就て

關係（Relation）とハ複雜的觀念の一なりヒュームハ觀念の間よ存する哲學的關係を分て七となせり Resemblance, Identity, Relation of time or Space, proportion in quantity, Degree in any quality, Contrariety, Cansation, 是なり而して此等の關係ハ皆又經驗より來れる者よして決して abstract reasoning or reflection より來る者よあらす

ヒュームは更に此七個の關係を分て二類となせり第一類は觀念自身に屬せる者にして觀念を變せされは關係を變する能はさる者を云ふ即ち Resemblance Contrariety, proportion in quantity, Degree in any quality 是なり第二類は觀念自身に屬せさる者にして觀念を變せすして關係を變し得へき者を云ふ即ち Identity, Relation of time and space 及ひ Causation 是なり

余は已に觀念及ひ觀念の關係を說明せるを以て此より因果法に就て述ふる所あらんとす

因果法

前章に說ける第一類の關係は直覺 (intuition) 又は說明 (demonstration) に由て之を知ること容易なり然らは第二類は如何して之を知るやヒュームは曰く因果法は他の二者の基礎なり之を知れは他の二者を知り得へしと何となれは Indentity 及ひ relation of time and space：目前の事物に限れるを以て目前にあらさる事を推知する能はす唯之を能するは因果法あるのみ故に Identity も因果法に由て確なるを得るなり

然らは因果法とは如何なることなるやヒュームは曰く之を知らんと欲せは其根本たる印象に反らさるへからす

則ち因果法の觀念に必要なるは次の三件なり

第一に原因 (Cause) と結果 (Effect) とは時間又は空間の上にて Contigouous ならさるへからす

第二に原因は時間の上にて結果の前になかるへからす

第三に原因と結果との間に Necessary Connexion なかるへからす

此より將に因果法の性質及ひ根源に就て討究する所あらんとす

何故に原因は必要なるか

ヒュームは曰く物あれは必ず之か原因あることは吾人の信して疑はさる所なり然れとも是何に由て証し得る乎若し直覺に由て知るとなさんか吾人は決して結果より直覺的に原因を知る能はす二者相分て想像し得るなり然らは說明に由て知るとなさんか是決して說明的に立証する能はす吾人は物に原因なしと云ふも矛盾せさるなり

或は曰く他に原因なくして物生すと云はゝ物自身か其原因たらさるへからす然れは物存在する以前に存在すと云ふか如し又或は曰く原因なくして物生すと云はゝ是無より物を生すと云ふなりとヒュームの答て凡て此等の論は已に因果法を假定せる循環的論なりと云へり

吾人は何處より因果法の觀念を得たるか

前章に於て已に因果法は直覺又は說明に由て說明し得さることを論せり然らは吾人は何處よりして因果法の觀念を得へき乎曰く是經驗より來るの外なきなり

然らは如何して經驗より因果法の觀念を得るかヒュームは曰く凡て經驗の根本は印象に在り然れとも其印象は何に由て起るかは吾人の知る所にあらす唯之あるを知るのみなり而して其印象の中に於て恒に前後相伴ふて起る者あり即ち過去の經驗にありて Constant Connexion を有する者あり是に於て始て因果法の觀念を生するなり

然らは斯の如く經驗より因果法の觀念を得るは推理に由る乎將單に觀念聯合に因る乎換言すれは

因果法ハ客觀的なるか將主觀的なるかヒューム曰ク若し推知に由るとせん乎吾人は先つ Unity of Nature を假定せざるべからず然るに其 Unity of Nature とは說明に由て知る能はず何となれば吾人ハ Uniformity of Nature なしと想像し得れハなり又決して經驗ニ由て知る能ハず何となれば同し物ニ同し性質ありとハ蓋然ニもあらざれハなり然らハ則ち已ニ Uniformity of Nature を知る能ハずして之を知る能ハざれハ因果法ハ推理ニ由て知る能ハざれハなり故ニ因果法の觀念ハ必ず觀念聯合より來らざるべからざるなり即ち單ニ主觀的の Custom or habit なり

Belief と Probability

前章ニ由て原因と結果との間ニ necessary connexion なきこと明なり然れハ吾人か通常或る事件の或結合を信し或結合を疑ふハ何ぞや

ヒューム曰ハ是ニ於て信據 (belief) の何たるを說明せり曰く常ニ互ニ連合する事物ニ於て若し其一今吾人の感官又ハ記憶ニ現出する時ハ想像力ハ直ちニ他の一を喚起するなり此の時ニ當て一種の感情 (feeling) を生ず是之を信據と謂ふなり故ニ信據とハ單ニ目前の印象より之と伴ふ觀念ニ與ふる vivacity and force たるニ過ぎざるなり是故ニ今原因より結果を又結果より原因を信するも單ニ此の vivacity and foree の助ニ由るのみ

夫已ニ因果法ハ一種信據ニ過ぎず而して信據の多少ハ過去の經驗の多少ニ由る故ニ因果法も畢竟一の Probability ニ過ぎざるなり故ニ因果法と Chance との別ハ kind の異なるニあらず Degree の差なり

觀念の必然的結合ニ就きて

已ニ論せる所を以て觀れハヒュームの因果法とハ觀念連合法ニ本き習慣ニ由て養成されたる主觀的の一 propensity ニ過ぎざるなり故ニ氏ハ大ニ彼の客觀的ニ power, energy, force, or necessary connexion ありと云ふを攻擊せり

ヒューム曰く吾人は外界の事物を觀し或二現象の相伴ふを察するニ決して二者間ニ Power 又ハ necessary connexion あるを發見する能ハざれハなり或ハ曰く意志活動ニ於ては吾人其意志の力を覺知し得べしと然れとも身体と精神との關係ハ反て物躰と物躰との關係ニよりも不可思儀なり又心と心との關係も共ニ不可思儀ニして吾人ハ到底物力を覺知する能ハざる也ヒューム曰く "Nature has kept us at a great distance from all her secrets and has afforded us only the knowledge of a few superficial qualities of objects" (Inquiry, sect. IV.) と然るニ或哲學者ハ反て其源を神ニ歸せり是實ニXを以てXを解せる者ニして愚の甚たしき者なり

夫已ニ印象中必然的結合の觀念なきこと明なり然らハ是あるハ何處より來れる乎ヒューム曰く必然的結合の觀念ハ同一なる事件の多く繰返さるゝより生ずるか知し一つ一つの場合ニ於てハ毫も異狀なし唯其 repitition よりして必然の結合を生ずるなり故ニ必然の結合とハ一物より之と伴ふ他物ニ移る想像の習慣ニ過ぎずヒュームハ此結合を以て一の感情となせり

是に於てヒュームは原因を定義して "An object, followed by another, and when all the objects similar both first, are followed by objects similar both second" 又は "An object followed by ano-

ther and when appearence always conveys the thought to the other." と述べり (Inquiry, sect VII. put II)

結　論

前に掲げたる第二類の關係中其本たる因果法は已に主觀的習慣に過ぎざるを以て吾人は印象以外は一瞥も之を知る能はざるなり故にヒュームは卒に有名なる懷疑說となり其極自已の存在をも之を疑ふに至れり氏の說は其自身に取るべき所多きのみならず近世の最大哲學者なるカントの哲學全く氏の影響を受けたる者なれば哲學史上大に貴重すべき者なり

ダヒット、ヒュームの小傳

ヒュームは千七百十一年四月蘇國の「エヂンバロー」に生る其幼時は鈍なる如く父母望を屬せず然るに千七百三十四年より三年間佛國に遊ひ其間は有名なる A Treatise of Human Nature を著せり是實に廿四五歲の時なりき然れとも當時人の注意する所とならす後氏多くは外交に從事し公使に從ふて歐洲大陸の處々に留まれり其間に書せる者は Inquiry concerning Human Understanding を主とし種々の論文なり又一度「エヂンバロー」圖書館長となりたることあり英國史は此時に著したる者なり千七百六十九年より其故鄉に閑居し一生獨身にて千七百七十六年八月に沒しき氏は有名なるルーソーと友とし善くルーソー英國に逃れたる時氏の家に寓せりと云ふ氏の傳は其論文集に簡單なる自傳ある氏の書はグリーンの出版を以て最佳となす

大化の革新に就て（承前）

曾我部俊雄

吾人は、敢て大化の革新を、平和的革新と曰ふ。蓋し革新とは、盤根錯節を剪斷するの謂なり、荆棘亂麻を芟除するの謂なり、根節を斷ち、荆棘を除くには、須らく快刀を用ふべし、苟くも快刀を用ひんとす、滾々たる鮮血を見すんは止まざるなり。然り革命の多血なるは、千例一轍に出づ、彼の佛國の革命は如何、抑亦た我が明治の革新は如何。

世界歷史を通して、古今幾多の革命か、而かく慘憺たる光景を呈せし間に、獨り大化の革新に至りては、其成効の、震天撼地の事實なりしに拘はらす、恰かも革命史に對する、愛嬌なるかの如く、中大兄の握れる釼は、單に一人の入鹿の毒血に洗ひしのみ、而して原動の巨人鎌足の手にせる弓箭は、到頭一人の犧牲を作らずして止みぬき、是れ吾人か、決して他の革命史上に、逢遭し能はざる現象にして、之を平和的革新と呼稱する所因なり。蓋し稀有の現象は、最も探究稽査の精神を喚起するに適す、於此乎大化の革新の如き、亦た識者に依りて諸種の方面より觀察立論され、今や吾人黃口の論究すべき餘地なしとす。唯予輩は、大化の革新は、何故に此くの如く平和なりしかてふ疑問に對し、鄙懷を開陳せんとす、換言せば、平和的革新の原因を探りて以て結論となさんとす。若し夫れ革新後の制度文物は、如何に燦然たりしか、革新前後の人心は、如何に變動をなせしか等の問題に至りては、希くは他日更に研究論述することを得んか。

田口鼎軒翁は、夙とに史眼燃犀の稱ある者、翁曾て藤原鎌足を論し、中に鎌足か當時朝廷を清めんとするに便利なりし事情として、五箇の事實を列擧せり。吾人煩を恐れず、之を左に摘載し以

て吾人の論旨を完からしめん。翁曰く

第壹　皇極帝は、女主にはましませども、蘇我氏には關係なきこと。

第二　先帝舒明は、馬子の女に因り、古人大兄を生まし玉へりと雖、是れ庶出にして、正統は則ち天皇の御腹より出てたる中大兄なること。

第三　天皇の御弟君なる輕皇子も、亦た蘇我氏を忌ませ玉ひしこと。

第四　古人大兄の皇位を繼かせ玉ふことは、皇極輕皇子の望み玉ふ所にあらざりしこと。

第五　中大兄皇子は明敏に御はして、自ら難を排し、權臣を制せんとの勇氣を蓄へ玉ひしこと。

蓋し當時の事情を委悉して、眼光紙背に透徹すと稱すべきか。試みに更に吾人の鄙見を臚列すれは、所謂平和的革新の原因左の如くなるへきか。

第壹　蘇我氏の權威極めて熾盛にして、鎌足等の謀計極めて單純なりしこと。

蘇我氏の專權は、入鹿に至りて其頂に達せり、彼は祖父馬子の如き大逆を行はざりしと雖、甘檮岡の擬宮の如き、眞個に古今其例を見さる、僭上の所爲と云はさるを得す。當時質樸の民人と雖、豈に這般の驕暴を怨望憤視せざるの理あらんや、唯然かれとも、彼れ位人臣を極め、加之數代國家の樞機を握り、門閥地をなし、人民の怨惡も到底其權威に抗する能はざりしなり。一旦其不意に誅戮せらるゝや、人心還た茫乎として、彼れを誅せし者の、如何に大膽なりしかに喫驚せり。蓋し當時權威隆々として、比類なき蘇我氏を仆すに、僅々數人の同志を以てしたるに至りては、吾人と雖亦た其放膽に驚かさるを得す、而かも謀計は徹頭徹尾簡單に、故に飽迄秘密に行はれき、入鹿の大極殿に誅せらるゝや、皇極帝すら、猶ほ且つ其暴臣を誅するに、何故なるかを問はせ玉ひしを見ても明らかなり。要するに若し入鹿をして、數代權勢を弄したる後なるにも拘はらす、當時尙ほ第一流の豪族たらざりし事實ありと假定せんか、彼れか人民の激昂に對する警戒は、何くんそ彼の出入に五十の兵卒を率ゆるのみにて滿足すべけんや、虐心暴戾彼れか如く、加ふるに倒壓し難き警備を以てせんか、其結果如何そや。之れに反し又若し初め中大兄鎌足等をして、蘇我氏は一世の大族なるを以ての故に、誅戮の策を大仕掛けになさしめんか、事必らずや未發に露はれん、果して左ありしならんには、吾人未た這般の革新を、無事に遂行し得たりと信すること能はさるなり、唯夫れ謀計は單純にして、蘇我氏の權威は極めて熾盛なりしか故に、其誅伐は全然人意の表に出て、却て良好の結果を奏せしか如し。

第二　皇太子革新の唱導者たりしこと。

鎌足革新の容易ならさるを知るや、先づ革新の主唱者として、中大兄皇子を戴きゝ、是れ鎌足の深謀遠慮に基く者にして、革新の甚た容易なりし所因なり。抑皇室の尊嚴は、千載千易の大則にして、皇族の神聖なるも亦た然りとす、況んや其人の果敢銳敏にして、而かも正統の皇太子なるに至りては、當時質樸の民人、威敬尊崇せざらんとするも得ざりしなり。故に太子の入鹿を斬るや、民人の之を見る者、一旦其大膽に驚きしに拘はらず、天誅の加はる所となして、戰慄恐懼爲す所言ふ所を知らざりき、若し夫れ入鹿を刺すや、倉山田麿若くは佐伯の子麿なら

しめば、鎌足ありと雖、未た這般の平和的革新を爲し能はざるべし、如何となれば入鹿死すと雖、蘇我の一族猶ほ甲兵を催ふし郎黨を促かして、鎌足一輩を誅するに餘あるへけれはなり。

第三　質樸なる民俗と、佛教の感化。

想ふ當時の人心か如何に質樸なりしかは、吾人理論上証明に難からずと雖、當時の歴史殊とに蘇我一族ゑ關せる歴史ゑ於ても、亦た這般の消息を洩さゝるにあらず。馬子東漢駒をして、崇神帝を弑しまつらしめ、後駒の其女と姦せるを慣り之を射殺せんとするや、其罪を責めて曰く、賊奴、驕愚輙すく天皇を弑す」と、駒大呼して曰く、我當時大臣あるを知りて、天皇あるを知らず」と。想ふに駒の如きは其狂暴無類の徒たるは明白なりと雖、其瀕死の一刹那に於て、少なくとも肺肝を吐露すへき人生最後の一瞬間ゑ於て、如何ゑ其哄唆者の面前なりとは云へ、柄臣馬子を知りて天皇あるを知らざりしてふ答辨の深底を追尋すれは、如何ゑ當時大臣か驕豪なりしかを表はすと同時ゑ、當時の人心か如何ゑ質撲なりしかを知るに足らん、駒の如きは實ゑ當時の兇暴漢と、質樸なる人民とを同時ゑ代表せる者と稱すべきか。蓋し彼等ゝ啻ゑ質樸なりしのみならず、蘇我氏の權威と共ゑ愈益々繁昌せる、當時佛教の感化を被むりしよあらさるか、入鹿の誅せらるゝや、祖先の惡因僧上虐下の惡果なりとして敢て怪まざりしにあらざるか、入鹿の死後其父蝦夷の、漢直、高向國押等の眷屬を聚めて己を助けしめ、軍陣を張り、盛ゑ其外勢ゑ於ても、實力ゑ於ても、睡虎數林を出て、碧潭ゑ嘯ふく底の觀を示したるゑ拘ゝらず、容易ゑ其愛子の頭を斷ちし中大兄か命せる、將軍巨勢德陀の諭告に感して、自から亦た盾よく誅に伏したるゝ、所謂率直質撲の人民か彼等の煽動に趣かざりしに由ること勿論なりと雖、數代崇奉せる佛教因果說の感化亦與りて力ありしにてゝあらさるか、想ふ此等の原因ゝ、頗る抽象的觀察ゑ過くるの傾ありと雖、其第二の理由と密接なる關係を有して、革新の成効に若干の助力を與へたるや必せり。

第四　請安、旻、玄理輩の効績。

革新過半の目的ゝ、蘇我氏覆沒の日になれり、知らず善後の策如何にすべきや、鎌足ゝ制度文物一に之れか組織を當時敏腕の學士に委せり、南淵請安、僧旻、高向玄理の如きゝ蓋し其雄なるものか。夫れ革新最初の革謀ゝ所謂南淵先生の門に於て用意されき、請安か果して其計謀に與みせしや否やゝ知るに由なしと雖、彼は獨り經術に通せるのみならず、兼て文學に精通し、又傍はら武道ゑ熟し、其著書すら百餘卷ゑ達せしといふを以て見れゝ、中大兄、鎌足か彼れより得たる處の知識亦た少なからざりしならん。蓋しこゝ吾人の臆測ゑ過きすと雖、他の玄理、旻の二人ゑ至りてゝ、革新の成効に顯著なる効績ありしゝ、史上明瞭なる事實なりとす。推古帝の十六年、小野妹子隋に使するや、玄理等從ひて學を彼國ゑ受け、留學するもの三十三年、舒明帝の十二年、彼ゝ多年修得せる巨多の新元素を持して唐より歸朝し、大化元年ゑゝ國博士に擧けられ、大德冠に位し、五年僧旻等と詔を受けて、八有百官を議せしてふ、歴史的事實ゑ徵し來れは、玄理旻の二人か如何ゑ重用されしかを知るゑ足るものあり。特ゑ旻の如きゝ、來歸の僧ゑして、其博識なる材能は、偶々以て當時革命の好機に呼はれ、拮据黽勉國政ゑ參す。

蓋し彼等い恰かも今日の秘書官の如く、其能力は主として革新紳大の政綱に投せられ、須臾にして和唐折衷の良制度はなりぬ、中大兄等、採りて以て可となし、出てい實施の方法を講じ、入りては治策を内ゑ修め、茲ゑ革新は事實の上に好良の結果を示せり。要するゑ大化革新を裝飾して絢爛たる錦繡の如くならしめたる者、其効績の全半は吾人之を留學生ゑ頒つゑ吝ならず。

第五　蝦夷の山背大兄王を皇位ゑ進めすして、却て皇極帝を立てしこと。

蘇我氏ゑ對する民心の憤恨は、聖德太子の御子山背大兄王の一族を殲滅したるゑて一段を進めき、推古帝、曾て敏達の皇孫田村皇子に詔して曰く、天下は大任なり統るべからず」と、又山背大兄王ゑ詔して曰く、百歳の後皇位汝ゑ當るゑあらざるか、宜しく自變すべきなり」、と蓋し推古帝の詔旨と云ひ、人心の聖德太子を敬慕するの事情と云ひ、少なくとも山背大兄王は舒明帝（田村皇子）の後を繼くべかりしなり、然るに蝦夷は之を立てずして、却て皇極（舒明の皇后）を奉して帝位に上らしめき、啻に之のみならず、蝦夷の子入鹿は、山背大兄王を族滅せしめき、蓋し蝦夷の精神は、曾て推古帝の詔に由り、田村皇子と山背大兄王との皇位繼承問題の起れし時に、山背大兄王の怨を買ひたれは、よし正當にもせよ之を舒明の後に立つるを快とせず、又皇極帝を立つれは、政權舊に依りて掌中に弄するを得へしとなしたりしならん。此時に當り、彼は皇極の御子に革命の原動力たる、聰明睿智の中大兄皇子あるを知らざりしが如し、若し夫れ蝦夷をして、舒明帝の崩御に臨み、山背大兄王と和し、推古の詔と聖德太子の効績とを唱へて以て之を帝位に即かしめんか、人心或は少しく和するを得ん、又況んや山背大兄王の母は馬子の女にして、之を奉戴するは永遠の策たるに相違なかりしをや。他方に於て中大兄鎌足等は、非常の好果を收めき、勿論謀計は秘密に行なはれしと雖、當代の女帝皇極は中大兄の御生母なる上に、蘇我氏に關係なかりしかは、策略は恰かも無人の野を行く如く、着々として歩を進め得たるなり、是れ吾人か蘇我氏の山背大兄王を立てずして、皇極帝を立てし事實を、平和的革新の一因に數ふる所因なり、

如上五箇の理由は、吾人の認めて以て大化革新の原因となす所なり、蓋し臆斷淺見悉さゝる所あるべきは必然なりと雖、亦た或る部分の理由たるは、吾人の斷信して疑はさる所なり。

今や吾人は一歩を進めて、革新後の結果に論及すへき順序となれり、然かれとも既に初に云へる如く、吾人は之を論究するの用意を缺く、仮令之ありとするも、ろは寧ろ歴史に委するの捷徑たるを信ず、何となれは乾燥冗長なる評論は、吾人の欲せざる所なればなり、否な實は歴史を繰り返すに過ぎざればなり。

（完結）

雜錄

希臘神話集（前々號の續）

（五）Aragonauts の話

蒲井恒堂

Iocius 國王 Aeson の弟 Pelias 亂を起して國を奪ひイーソンは其子 Jason を携へて出奔し難を

避くジヤソン時よ齡甫ゆて十歲父王イーソンの命よ遵ひセンタウル、ケロンの許よ至り數多の貴族の子弟と共に之に師事し勤勉不怠優に儕輩の推す所となり名聲大に揚る父王イーソン大に喜び間に乘して弟ペリアスの亡狀を語る渠センタウルの許に駐ること既に十年文武諸藝に通曉し意滿ち氣壯に故國を恢復せむとの念禁ずる能はず意を決して恩師に訣別し輕裝孤劍を携へ故鄉の空を望みて出立せり

途に一大河あり水勢矢の如く之を亂す單身猶且つ危險を免れず而も一老嫗あり岸端に立てりジヤソンの來るを見て大に喜び援け渡らむことを請ふて止まずジヤソンは其老を憐みて之を許し之を負ひ辛ふして前岸に達す老嫗痛く喜び深く其厚意を感謝せしか卒然として眉目艶しき女神と變じジヤソンに告けて曰く妾は女神 Hera なり深く汝の俠勇を嘉す以後常に汝か身邊に在りて汝を護るべしと言終て其之く所を知らずジヤソンは此神託を受け勇氣十倍感激奮進せんとせしがと見れは流れを亂すの際一方の鞋を失へり渠は之を求むるの無効なるを悟り隻脚跣足の儘にて進み終に渠の故國に達せり會ま父の讎なる叔父ペリアスは市民と共に市場に於てポサイドン神を祀れるを見て大に驚き怪しみ之に代りて此擧に從ふ事成る期して待べし曩者 Phrixus の亡靈夢中に余に代り此業を遂げ給はゝ此王位も此王國も擧けて君か有たるべきなりと

余輩は今ユルキスなる金毛の羊に就きて語らさるべからず先是セサリア國王に Athamas といへる者あり天女 Nephele と通じ男女各一兒を擧たり姉を Helle といひ弟を Phrixus と呼べり然れとも夫は可死人間なり妻は不死の天人なりしかば利害相反し動もすれば風波立ち騷き終に偕老の契を全ふする能はすして斷然離婚し更に Ino と呼へる婦人を迎へて後妻とせりさるに此女は名高き姦婦にして先妻の殘せる二兒を惡み事を設けて之を殺さむことを謀れりチフエンは之を觀破し竊に兩兒を誘ひ出て之に一匹の羊を授け之に乘りて遠く逃れしむ此羊は大神チエウスより賜はりたる世にも稀なる寶にして其毛は盡く細き黃金なりき二兒は慈母の命に遵ひ遠く遁れて亞細亞近傍に達せしか命なる哉ヘルレ孃は過ちて海に陷り溺死せり後世此海を呼ひてヘルレの海 (Hellespont) といふフリクソスは恙なくコルキスの地に達し國王 Aetes の許に寄食し竟に其女を娶りて妻とせり

ヤソンを誘惑せむとすジヤソン動かず六日目に至り渠は進てペリヤスに逼り勵聲渠の來意を告げ速に惡意を飜し讓て其王位及ひ王國を正當なる權利者に返戻すへき事を求めたりペリヤス之を聞き失望と驚怖との爲め一語をも發せさりしか久之て曰く讓んて命を諾す但し余も亦た一事の以て如何せむ君や年壯氣鋭余に代りて此擧に從ふ事成る期して待べし曩者 Phrixus の亡靈夢中に余を見切にユルキス（黑海の東岸）に赴き彼の死屍と金羊の皮とを携へ還らんことを冀へり君若し余に代り此業を遂げ給はゝ此王位も此王國も擧けて君か有たるべきなりと

フリクソス所以らく吾不測の災を免れ安全なるを得たるは一にチエユス大神の恩惠なりと乃ち金羊を屠りて大神を祀り其皮をエーテス王に獻し以て謝恩の意を表せりエーテス王は之を納めて更に軍神アーレスに獻じ之をアーレスの森に藏たり然るに豫言者よりエーテスを戒めて曰く君の運命は懸りて其皮にありとエーテス大に怖れ大なる龍を林中に放ち日夜之を護らしめ以て人の竊み去るを禦くに汲々たりきペリヤス之を知る故に今ジヤソンに說きしなり

却說ジヤソンは叔父の說を聞き好奇心禁する能はず欣然承諾の旨を答ければ叔父も限なく喜び盛に其勇氣を賞歎して措かず目出度凱旋の日を待ちて王位を讓るべき旨を約したれと心ゑは小年の血氣欺き易きを冷笑し渠をして此冒險的遠征に赴かしむる上は必ず途中にて身を殞すへく我王位萬歲なりと自ら祝せしこそ可笑けれ

ジヤソンは叔父の姦策なりとは悟らす日夜遠征の準備に汲々とし檄を飛ばして渠の朋友を促し此愉快なる遠征に加さらしめしかば之に應する者多く終に五十餘人の同勢を得たりき乃ち當時有名なる船匠アルゲスと謀りパラスアテネ神の神助を乞ひて日夜工を督し日ならすして一大快船を得船匠の名をとりて Argo と命名し其上甲板に於てはアテネ神より賜はりたる豫言を發するドゾナの樫板を裝置し以て時々豫言を聽くに具へたり船體極めて堅固にして如何なる風濤にも堪へ得へく其輕きことは必要に應して之を肩にして運搬するを得べし船成りて人々之に乘り組み抽籤を以て其部署を定む此一行を總稱してアラゴナウツといふアルゴ號乘組人の意なり

ジヤソン船將となりチフスは舵を司りリンセウス水先案内となり舳には有名なるヘラクルスありて解纜す舟の走る飛か如く直に茫々たる大海原に乘り出で

數日の間は何等の故障も無くして進みしか一日風波荒れしかはレムノス嶋に寄港することゝなれり此嶋の住人は全く婦人のみにして男子はたゝ女王の父一人あるのみ其所以を尋ぬるに凡そ一年前の事なりき嫉妬の爭よりして嶋中の婦人盡く同盟して凡ゆる男子を殺しゝによるといふされば今アルゴ號の來りしを見て大ゑ驚き全島の女子、武裝して海岸ゑ集り死力を以て之を禦かむとせりアラゴナウツは此有樣を見て喫驚せしか使を送りて他意無きを告げ上陸の許可を請はしむ女王之を聞き必要なる食糧其他を贈りて其上陸を謝絕せむと欲す女王の乳母之を遮り熱心ゑ此機會ゑ乘じ人々良婿を選ひ之ゑ國事を托するの良策なるを說く女王心動き乘組員の上陸を許し迎へて宮中ゑ入りジヤソン以下を遇するに將軍の禮を以てす女王ハジヤソンを一見して其美貌を喜ひ直ゑ父の笏を贈り彼女と共ゑ此國ゑ君臨せむことを請ふジヤソン之を容れ宮中ゑ留り其餘のアラゴナウツハ市中に散し各意中の佳人を求め流連數日樂みて還るを忘るヘラクルス等留りて船を守りし輩は之を見て大に驚き不意ゑ上陸して彼等を求め辛ふじて船中に訪ひ還れり

アラゴナウツは再ひ航海を續けたるか逆風ゑ遭ひドリオネス嶋ゑ寄れり國王シチクスは國民を率ひて唯迎せしかアラゴナウツに告て曰く隣國に大人國あり人各六腕を有す屢々我國に寇して劫奪を擅みし國人甚た苦むアルゴ號の見ゆるや彼等ハ巨人の來寇と誤り甚た恐怖しきと乃ち盛宴を張りてアラゴナウツを招きヘラクル獨り留り守れり既ゑして話に聞ける巨人ハ不意に現れ出て切ゑ

巨巖を積みて港口を封鎖せむとすヘラクル大ゐ驚き直ゐ弓矢を執りて之を射激烈なる鬪爭を生せしか變を聞きて人々歸り來たり力を協せて之を擊退せり於是アルゴ號い解纜せしか同夜暴風吹き起りければ不得止再ひドリオネス嶋に立戻ることゝなれり然るゐ暗夜のことなりしかゞ土人は例の巨人の來襲と誤りて力を盡して攻擊を始めアラゴナウッも亦た巨人の攻擊と誤りて應戰せり戰酣ゐして國王シチクスはジャソンの放てる矢ゐ當りて倒れ土人は其將を失ひて潰亂爭ふて城中ゐ遁る天明に及ひ双方共ゐ始めて昨夜の誤謬を發見して悲み止ますアラゴナウッも意外の變ゐ驚き更ゐ數日碇泊し土人を援け禮を厚くして國王始め戰沒者の葬儀を營めり

アラゴナウッは次にミシア州ゐ達せり此所ゐても大ゐ土人の優遇を受け皆上陸して土人の宴ゐ臨めり獨りヘラクルスは饗宴に列するを好まず轉して市外の森林ゐ散策を試みしが彼の子ヒーラスい父の後を逐ひて同しく林中ゐ入りある泉の邊を過く泉中の天女はヒーラスの美を見恍惚として躍り出て其手を捕へて泉中ゐ引き入れたりアラゴナウッの一人ポリフエムスといへる者亦林中ゐありしかヒーラスの叫聲を聽き應援せむとて馳せ至りしも其所在を詳ゐせす林中を探り巡りてヘラクルスに遭ひ語るゐ其情を以てし二人力を協せ林中を隈なく求むれとも得ず其際アラゴナウッは船ゐ歸りて解纜し去れり既ゐして彼等はヘラクルス等の在らさるを發見して大ゐ驚き或者は直ゐ歸りて渠を求めむことを主張し或者は之を駁し決する所を知らさりしか海神グラクス波濤中ゐ現はれ彼等ゐ告けて曰くヘラクルスは天命を以てある他の事業ゐ從事せしめむかためミシアに引留められたるなりと於是衆論始めて一に歸し進航を續くることゝなりぬヘラクルスは神の命ゐ依りアルゴスゐ歸りポリフエムスはミシアに留り後其國の王となれり

其よりアラゴナウッはビシニアに到れり其國王を Phineus といふ盲目にして豫言を能くす蓋し渠は先見の明を有したれば濫に豫言を發し其ため神の怒に觸れて盲目となりしのみならす食事の際には必ずハーピースと稱する怪物飛び來りて其食を奪ひ食し或は汚物を以て之を穢し食用に堪えさらしめ王は常に饑餓の苦痛に頻せり王はアラゴナウッを見て其苦痛を訴へ怪物ハーピースの退治を依賴すアラゴナウッは快く之を諾し盛宴を設けて王を招く王到り食卓に就くや例のハーピースは現れ出て食品を食ひ始めたりチエラス及ひカライスの兩人は直に劒を拔きて之に逼るハーピースは身を跳らして奔り逃れ兩人之を追ふこと急なり會ま天使イーリス來りて兩人を宥めヒネウスの罪障消滅したるを告げ追躡を止めしめき

ピネユス感激罪を謝し其一端を表せむかため今後アラゴナウッの遭遇すべき危難と之を免るべき方法とを敎へ盛宴を設けて彼等の行を壯にせり

アラゴナウッ此所に留ること二週日復發して前程を急ぎしが暫時にして非常の物音を聞けり是れピネユスの戒めたるシムプレゲーズの海峽にして兩嶋の間にあり舟行極めて困難とすしかも兩嶋常に浮動して瞬時も靜止せず時として兩嶋相激することありて危險言はん方なくアラゴナウッの聞ける物音は兩嶋の衝突したる音なりしなり於是彼等はペネユウの敎に從ひ鳩を放ちて其後に從ひ難なく此關門を過ぎしか彼等の通過し終りたる瞬間に於て兩嶋相合して一嶋となし且つ海底に固着し最早浮遊すること無きに至りしといふ

アラゴナウツはポンツスの南岸を進みアレチアス嶋に到れり此嶋にハ無數の怪鳥棲息し人を見れバ天に飛揚すると同時に羽を飛ハす其鋭き事矢の如くオイレウスハ爲めに負傷す於是アラゴナウツは會議を開きて上陸の方法を議し老練なるアンフヒダームスの意見を用ゐ人々甲冑を蒙り楯を携へ大聲突喊嶋に逼る怪鳥大に狼狽して遁れ去り無事に上陸するを得たり彼等ハ此嶋に於て四人の漂流人を發見せしか自らフリクソスの子なりと稱しアラゴナウツの目的を問ひ奮ふて同行を冀ひ且つ彼等の案内者たらむことを諾せり彼等ハアラゴナウツに語りて曰く所謂金毛羊の皮は軍神アーレス神の森中なる樫樹の頂に懸り樹下にハ猛龍ありて晝夜之を護るのみならず彼等の祖父なる國王エーテスはアポロ神の裔にして神力を有せりと

既にしてコーカザス山頂の白雪を望みつゝ無事フエーセス河口に投錨せり左岸にハコルキスの都チエウタを望み右ハ平野遠く連りてアーレスの森なる金羊皮は日光に映して耀くを見るジヤソンは黄金の杯を擧けて神を祀り天祐に依りて大事業を完ふせむことを禱り終りて衆と共に適當の手段を講究し出來へき限りハ兵力を用ふるを避け平和的手段に依頼するに決し翌朝威儀を整へテラモンアウギアスの兩人と同行し來りたるフリクソスの王子を率ひ王城さして赴けり會ま國王の二女カルシオーペ（フリクソスの妻）及ひメヂア散策を試みて城外にありカルシオーペは目早く己の子を認識し喜極まりて泣きジヤソンを以て再生の恩人となしメデヤはジヤソンの美男なるを見恍惚として痛く感動せる有樣なりき

國王エーテス己の孫の歸れるを聞きて走り來りジヤソン等の一行を訪ひて王宮に歸り心を盡して之を饗し城中の美女盡く來り會す而てジヤソンの眼中獨りメデアの婆の映するのみ宴止みて後ジヤソンは徐に渠の來意を述べ金羊皮を返還せむことを求む國王色を變してジヤソンを罵り彼皮は彼の正當なる所有品にして如何なる事情あるも決して他人に讓與する能はさるを斷言せしがジヤソンは言を盡して王に說き辛ふしてある條件を附したる後讓與せむことを承諾せしめたり王の申出せる條件に曰く

王は銅足を有して火を吹く牛を有す此牛を使役してアーレスの巖地を耕し之に蒔くに龍の毒牙を以てすべし然る時は余の武士發生しジヤソン一人を敵とし攻むべくジヤソンにして之と鬪ひ無難なるを得ば金羊皮を得べきなりと

ジヤソンは急き舟に歸り衆と共に之を議すジヤソンと共に再び船中に來りたるアルグスの子アルグスは熱心に其困難を說きたゝ一の方法は皇女メデアの助を借るにありとして曰く彼女は妖術を能くす必ず此危險に應ずるの途を知らむと衆之に同じければアルグスは宮中に還り母カルシオーペの周旋を請ひ終にジヤソンをしてメデアと會見するを得せしめたりき

ジヤソンメデアの相會するや各其意中を吐露し約して夫妻となる於是メデアは巳の情人の危急を聞きて震慄し授くるに靈藥を以てして曰く此藥を以て身體に塗らば一日の間は水火共に犯すを得ず又毒牙を播きて武士涌き出でなば大石を執りて其群中に投ずへし彼等は爭ふて其石に聚るを以て其隙を窺ひ之を斬殺すべきのみ宜しく機に乘じて進退を愼み決して狼狽すべからずとジヤソンは喜び極まりてメデアを擁し彼女を訪ふにあらざれば決して希臘に歸らさるべきを誓へり

次の日國王エーアス盛儀を具へてアーレスの野に臨みジャソンを召すジャソンは召に應じて悠然として現れ命を待つ既にして天地鳴動して例の怪牛地を捲き焔を吹きジャソン目蒐けて飛び懸れりジャソン騷かす隻手其角を梔し手鎗を振て之を鞭ち難なく鉄衡に縛し之を追ふて走り次に胃に滿載せる龍牙を執りて四方に播き散らし後鎗を以て怪牛を鞭ちしかはさすかの怪獸も辟易して地中に隱れ去れり同時に凡ろ四エークル平方の地中より無數の勇士涌き出て四にジャソンを圍み突喊して逼ること急なり於是ジャソンは敵の如く大石を執りて之に擲ち其動搖するを覘ひて走り寄り盡く之を斬殺し身微傷たも蒙らず勇み進みて國王の面前に至り契約の履行を求む王は己の謀計の敗れたるを見て憤怒し約を破りて羊皮を與へさるのみならす夜に乘してアルゴ號を襲はむと欲するに至れり

皇女メデアは父の姦謀を察し夜に乘してアルゴ號を訪ひジャソンを見て急を告げ直に彼女と共に來らむことを求め相携え馳せてアーレスの森に到り妖術を以て猛龍を昏睡せしめけれは其隙にジャソンは樹梢を攀ぢ難なく羊皮を取下し共にアルゴ號に馳せ歸り直ちに纜を解きて逃れたりアラゴナウトは既に其目的を達したれば頗る歸航を急きたれとも種々の災難に遭遇し多くの年を經たる後始めて本國イオークルスに達するを得たりきジャソンは新婦メデアを携へて王宮に赴き叔父ペリアスを見て詳に遠征の實歴を語り金羊の皮を献じ兼ての契約の履行を請へりされどペリヤスは無論ジャソンの歸り來るべしとは思はさりしことなれば事に托して之を拒めりメデアは己の夫の請求の容れられさるを憤るの餘まり恐るべき復讐を行へり彼女は歡を王女等に求めて其信用を博し一日彼等に語りて曰く余は老者を變して若者となすの秘法を知る請ふ我か爲す所を觀よと乃ち老羊を執りて之を大釜に盛り之を煮ること暫時にして祈禱を爲しいに不思儀なる哉老羊變じて愛らしき小羊となりて歩み出たり王女等大に喜び强ひて其術を傳習せしが彼等一日相議し王を捕へて大釜中に入れ終に之を煮殺せり

ジャソン及メデアは共に奔りてコリンスに到り大に國王の優遇を受け駐る數年三兒を擧けたり然るメデアの花顏柳眉漸くに衰へしかば何等の無情漢そジャソンは次第に之を疎すると同時ゑ國王の女グラウスゑ愛着し國王の許を受けて目出度婚儀を擧くることとなれり然れと渠はメデアを憚り百方之を慰めて曰く余は決してグラウスを愛するにあらされとも國王の命止むを得さるに因る且つ國王を以て我等の姻親となし我兒輩の幸福を冀へはなりとメデアは止むを得す承諾の旨を答へしかとも嫉妬の炎に思を焦し其婚儀を祝するためと稱しグラウスに贈るに黄金を以て製したる帶を以てすグラウスは其美なるを見て深く喜ひ直に之を帶ひしか兼て仕掛ありたる激毒に感し身体燃るか如く引き放さむとすれと放れはこそ狂ひ死に死せしこそ無殘といふも餘ありジャソンは此有樣を見て狂氣の如く走りて己の家に皈れば三兒の死屍狼籍たり愈ゑ憤りてメデアを求れとも得ず既ゑして頭上ゑ人聲あり頭を巡らし見れはメデアは悠然龍車ゑ乘し意氣揚々之を潮笑するが如しジャソンは失望の極己の劒ゑ伏しぬ英雄の末路憐むべし

女郎花訓考

高橋富兄稿

おのれ女郎花につきてわきまへ難きところありつるまゝに高橋先生の許にまゐりて何くれとうけたまはるわひたにかねて大人のものしおかれし左の一篇をえ侍りぬ讀もて行くにいとおもしろきことともおほかれはおのれ一人して見んも斯道の爲よろしかるへき事かはおなしくはおほくの人達にも知らしめてんと其由大人にこひ申せはうへなひ給はさりしを夜の錦となし侍らんも流石なれはと强ひてこひ申しこの誌に載ることゝはなしぬ文の前後なるなどはいまた片成なるものなりと示されたり見ん人其心してよ　長谷川福平識

をみなべしををみなめしといふはひがことなり正しくはをみなべしとよむべし萬葉集には娘部思佳人部爲、美人部師、娘子部四、娘押、姫部志などかけり和名抄には女郎花新撰萬葉集云女郎花倭歌云女倍之乎美那閑之と見に古今集第十物名に

をみなべし　友則

白露を玉にぬくとやさゝかにの花にも葉にも糸をみなへし

糸を花にも葉にも皆綜しとなり

朝露をわけそほちつゝ花見んと今そ野山をみなへしりぬる

野山を皆歴て知りたりとなり

朱雀院のをみなべし合せの時にをみなべしといふ　貫之

五文字を句のかしらに置てよめる

をくら山みねたちならしなく鹿のへにけん秋をしる人そなき

幾年秋を經たるか知人なしとなり

凡河内躬恒家集に

をりつれはみて秋の日はなくさめつへてこの花を知らせすもかな

又

をゝぬきて見る由もかなからへてへぬやと秋のしら露の玉　群本

順家集帥君の歌

玉の緒をみなへし人のたゝさらはぬくへきものを秋のしら露

和名正濫抄云女郎花をみなべし、萬葉に姫押ともかけりこれによりて名の心をおもふに色よき花にて女をもおす心か姫はよき女なり押は俗におすをへすといへり

又萬葉類林云をみなべし名つくるよしは美人を押心なりへすは俗におしつくるといふをへしつくるといふに同しく花のうつくしきをほめていふなるべし物におしをおけは耗なり合耗と云心なりと見ゆれは押といふ心通せり

雅言集覽へす押意なり、散木集下隱題廿七をみなべし

ちる花をみなへしもちて行く秋の戀しき時のかたみとや見ん

これは俗のおし花にしてたくはふる心なるべし

著聞集第十廿二昌山相摸の條に長居をえりあにへしすゑたりオシスエタルナリ、枕草子第二十五ふたあゐえひ染なとのさいてのおしへされて草紙の中にありけるを見つけたる、同第七さてあふ坂の歌はよみへされてかへしもせすなりにたるいとわろし、雅言集覽增補著聞第七廿一いとゝかつにのりてべしふせ

てをるにほそ聲をいたしてきゝとなきけり、同第九十七　其中にへしこめて云云こそよりへしつめられて

富兄云これらによれはへすは俗言にあらす古言の俗語にのこれるなり和名抄に引ける新撰萬葉集は即ち菅家萬葉にて女郎花の歌二十五首のせたるかみな女倍芝（ナミナヘシ）とかけり古今にのれる朝露をの歌は露草丹潤（ツユクサニ　ヌレソ　ホ　チツ、ハナミント　シラス　ヤマベヲ　ミナヘ　シリニキ）曾保知筒花見砥不知山邊緒皆歴知丹杵（アキノヲ　ミナヘ　シルトテ　サ、ワケニ　ヌレニシテヤハナ）とあり又秋之野緒皆經知砥手少別丹潤西袂哉花砥見湯濫（トミユラン）と云歌もありさて朱雀院女郎花合は群書類從卷第二百八十四に載たり亭子院の御門おりゐさせ給ひて又の年（昌泰元年）后と御門のせさせ給へる女郎花合なり歌は十一番にて二十二首あり十二番以下は欠たるなるべし貫之の小倉山の歌はこの内に見えすこれは番の外によめるならんか（又は欠たるにもあるべし）菅家萬葉と合せ見るに十五首あへり七首は萬葉ゑ見えす萬葉二十五首の中ゑ十首は歌合せゑ見えす

眞淵翁の古今打聽物名の處に云くをみなへしをみなめしとよむへの濁れるをめとなふるなりされとこゝはをみなへしとなへしなるべし」といはれたるはいとよからぬをしへなりばびぶべぼまみむめもは唇音の輕重にてまたしく通ふ音にはあれともばびぶべぼと書たるをいかてかまみむめもとよむへきことのあらんかへす〳〵もひがことゑまたかふへからず

那谷の旅つと

これのれゝころの秋ものしけるをすてなさんも、さすがにほいなく、會誌にものしてんとせしかど、同じによりの文ども數多あれば次の歳にまはしてはいかゞと、編輯のかゝりの嚴命あれば、其のまゝ筐底にをさめれけりしも、ろの後とかくに忘れはべり、さるをさいつ頃とみに催促、れとろきてさがしけれどたはやすくは見當らず、まゝよ、やめてましと委員にことはりたれど、さないひろとゑひらるれば、いらざる耻かくことゝといなりぬ、

丙申晩秋　　垂綸東涯識

春は兼六公園の花にゑひ、夏は手取川の蝙蝠橋に夕涼み、秋は那谷寺に立田姫のこゝろばへをまのび、冬は白山神社の深雪に心のちりをはらひ、四つの時れのも〳〵何れ劣らぬ景色なんめれど、わきて那谷寺の秋景は一しほの見榮えありて、ろがうへに寺の緣起もたとふべきものさはなりといふなる、去んぬる十月すゑつかた、はからずも七日あまりの閑暇をえたれば、一たびいゆきて、ろの風景にあこがれ且つは寺の什寶をも見ばやと思ひたち、日頃べだてなき學びの友とかたり合せ、はつかあまり九日といふに、東明ちかき頃ひ宿所を出でゝ南の空へと旅立ちぬ、

折しも朝ぎたさむく吹きすさみ仰ぎてろらをながむれば星のひかり瑩々としてさにわたり、たま〳〵電のたなびくが如く星のすべるなどいみじう物すごし、とかくするほどに夜もほの〴〵と明けわたり、曉つゞるくだかけの聲をちこちに聞に、朝霞とほくたなびきて、途のべに結べるつゆの玉の朝日にかゞやき、賤が伏屋のわらびたく烟の風のまに〳〵さまよふなど、えもいはれぬ景色なり、辰少し下る頃松任の宿につきぬ、とある茶亭にて團子などたうべてまばし憩ひ、東任田にいたりて晝餉もすみ寺井驛をすぎて行くこと一二里手取川をわたり小松町にぞつきける、やが

て城址通成館なんどを見めぐりて午時ばかりに出でたつ、史にいふ天正四年賊魁若林長門といふもの、多くの篇筱を刈りて、始めて小松城を築けり城は一名蘆城といふ、この地籠村領なるをもて、園の小松となんいへりけると、或はいふ花山法皇微行してこの地を過ぎさせたまひ、寛和三年やかたを梯河邊よりつらへ、後園よりほく雅松をうゑさせられしが後星移りもの變りて、其の遺址を園の小松原といひ傳へけりと、前田公の北國のゑづめとなりし後、三世公微妙院殿晩年に菟裘をいとなみてこの城に老し玉へりといふ、小松町よりこのかた足漸くいたみければ、常よ人に後るゝことと二三町あまり、ひとり痛さをゑのびてありくめり、たをとがむべきよあらねばひたぶるよ宿の近かゝらんことを望みつゝも、今江村より粟津路へと急ぎ、日なほ未すぐる時漸く粟津温泉よつきぬ、

卅日朝まだき風音すさまじければ、打驚きて、急ぎ窓の戸れし開けば、あれ雨さへいとれぞましくふりゑければ、いたく胸をば苦しめつれど、さりとて空しく留まりあるべきにあらねば、朝餉すみて後勇みたちて、草鞋引ゑめいざとばかりよ出たちけり、これより路いづくともなく細まり來て、山のけはひもみづるさまいみじうをかしげなり、一里はかり來ける頃那谷村よと到りつきけり、うれしくて吾先よと進みゆく磴道のかたはらに石よ彫みたる句よ

此娑婆を電光朝露と聞上ゝ
彌陀願まるゝ人ぞ目出度

こゝに至りて身ゝちりの世を脱れ出でたらんが如き心地して、ゆくことゝやゝ深く後をかへりみれば、蓊鬱たる樹々のいまだ紅葉せざるが、かへるさをふさきたるが如く、まへをのそめば、一面に楓樹にして大なるもあり小なるもあり、色の黄なるあり紅ゐなるあり、濠よのぞみて影を水ようつせるあり、岩よすがりて下をうかゝふあり、みちよあたりてゑるべするが如きあり、げに唐人の霜葉ゝ二月の花よりくれなゐなりといひけるよ、また那谷のいはほは總じて大磐石よして、山はことゞく石よて、木はことゞく楓樹なりその奇岩怪石あるゝ嶙峋として天を突くが如く、あるゝわだかまりて地にはふが如く、虎の口をひらきて怒れるがごとく、麒麟の空を仰ぎてながくほゆるが如く、幾千の仙女の天降りたるが如く、そのくすしきえいふ能はざるものあり、巖よみちあり、登れば觀音堂あり、いはほのかけて洞窟となりたるものよ造りなせり、建築のたくみなる驚くべきなり、その社扉に紙きれを吹きつけたるはおのがねぎごとを遂げんとの爲か、堂を下りて多門天を安置しあり、嵓下の濠渠よ天女の祠をまつる、巳の時なる頃雨少しく歇み朝日雲間をもれ出でゝ、千樹萬枝錦をゑけるが如くいと妙なりければ

朝まだきふりゑく時雨はれそめて
朝日よにほふ那谷のもみぢ葉

磴道のかたはらよいしぶみあり、大聖寺の人玉華山人の碑とす、山人姓は瓜生といひ名ゝ英字ゝ芳卿通稱を榮庵といふ那谷寺の景をめでゝ樂みければ、學びのをしへ子等相謀りて、碑をたてゝそのたまを慰むるなりけり、堂の未申の方にあたりて、塔あり木蝕し苔蒸しその古きこと想ふべきなり、途々よ碑あり遊人の俳句を刻す、

笠しくや花がむかひの椎が本　時喜雨
譽たれば早雪散るや那谷の石　木雄
美くしき景色や雪の晴あがり　青波
石山の石より白しあきのかぜ　芭蕉

れのれもまた驛よならひて
春よよしまた秋よよしこれをこれ
なたゝる山といふべかりける

西の方よ級をのぼりて傘のちんあり、その下よ護摩堂あり鐘樓あり、ともよ二三百年のものたり、彫刻はすべて左甚五郎の作よよるといふ鐘樓よ登りて鐘を見るよ銘あり漫漶してえよむべからずその終りよ養老年中僧泰澄千手像をいてこれをつくると、かすかよみとむべしされバこの鐘は希代の古物よして少なくも千とせあまりの年月をへたるなるべし、すなはち寺をれとなひて寶物ををろがまんことを請ひ求めたり、雛僧えばしありて出迎へ、われらを客の間よ招じ茗をすゝめ、もてなし一方ならず、すなはちえるべして奥の間よ至り、一つの古びたる琴をえめしいふ、これは上杉霜臺の秘め藏せるものよして、めぐり〳〵てわが三世微妙公の手よ入り、公のこれを當寺よれさめられたるものなりと、琴は飾るよ金銀珠玉を以てす、いまは毀れて所々のかけそこねたるを見るをしむべし、つぎよ一古幅をえめしこは明代のものよして明主文祿のころ此を太閤關白よれくりこしたるものよて、太閤これをわが亞相公よ贈られしものなり、見給はずやこの文字は絹糸よて縫ひこみたるをと近けてえめせばまさしく縫者よて左の文字れよび馬の圖ありけり

皇帝聖旨公差人員經過
驛分持此符驗方許應村
馬疋如無此符擅便給驛
各驛官吏不行執法循情
應付者俱各治以重罪宜
令準此

馬圖

弘治拾肆年　月　日

按ずるに弘治十四年は明の孝宗の代よして、我が後柏原天皇の文龜元年よあたれば、豊公の朝鮮をうちしは神宗の萬曆中よあるをもて、その間四世九十六年あまりを距るべし、されば萬曆帝の藏物をもつて豊公よあたへつるか、然らざれば、日本よわたりしは文祿以前よありしこと明なり、次に德川三代公の御臺所の守り觀音なりといへるものにて、そは三十体の觀音にて、赤旃檀にてこれをきざみ、その巧みにして精しきこと賞するにあまりありとやいはん、こはからくにゝれほせて作らせられたるものなりといふ、その表れよび裏にハ六地藏七觀音をちりばめ、光彩まなこ

を眩せしむ、傳へいふ那谷寺は僧泰澄の開基にして花山法皇紀州那智および濃州谷汲の名をとりてかくは名けたまへりと、今の菩薩山は法皇を葬りまつりし所なりとぞその後世はかりごもとみだれはて堂宇も頽廢きはまり元和建稟の後微妙公さらにこれを再建せられたりといふ、のちあつく寺僧に謝しこれは聊かなれども謝禮のゑるまでにうけをさめたまへと少〻の金さし出しつ、那谷山を下りて山代温泉路にて打向ひける、時にひのつく雨はいやゑげくきなせる外套も水にひたせるが如く寒さゝへ加りていと興なし、敕使村にいこひて句あり、

初時雨いと寒さうな案山子哉

この村は一條天皇の花山法皇の遺靈に遣はし給ひける敕使河原右京の客館の遺址なりといふ、山代よつきしとき晡時少しくだりなりき、のち浴みなどしてさむさをけす、山代は粟津にたくらぶればなべてみやびやかにてげに月と鼈とのたがひなりけり、

卅一日、朝卯半ばかりに出でたち動橋宿に至るころほひ又々獨りあたりのけしきなど打みやりつゝ行くほどに打しる吹拂ふ木枯に打ちさはぎて山田の稻穗ども啄みゐける村雀のあわたゞしく飛立ち、あるは那谷山のあなたに行足はやき雲のあしにゆきつもどりつ鳴くかりがねのこゑいとゞ哀れに見にければ、

かりがねの行てはかへる那谷の道

かくて寒さいやまし時々驟雨のれそひ來りければ山路をいそぐかさゝぎならで途にともなふ人もなし、今江村にいたりて一亭に憩ひ衆と會す、時に風まず〳〵はげしく今江潟荒波高く漁り舟波にゆらるゝさま木葉の疾風よかるゝが如し、

小松町にて午餐すこのゝち足まず〳〵いたし松任町につく頃ほひ夕陽已に沈まんとす、このうまやの聖興寺といふ精舍に加賀の千代の碑ありといへば、ゆきて花にてもたむけばやと人にしるべを頼みてゆきみるに此の寺は五とせばかりまへつ方池魚の災ありしためいまは本堂再建中にてありけり、堂のかたへに累々としてれくつきのこゝらあるが中に、かざりなく細長き平たき墓石に

辭世　月もみて我は　千代尼塚
この世をかしく哉

さて心ばかりの吊ひをなし出でゝ車を倩ひ酉の刻ばかりに金澤につきぬ、ときに日已に虞淵に沒し、夕霧よもに起ちれこり、高峯にかへる鴉のこゑひとりたかし、

御嶽、立山紀行（承前）

義山養愚

九月四日（第九日）雨

午前十時十五分丁眼宅を辭す、いたく腹膨れたると、餘り長く睡りたると、曇り勝なる天氣とにより、何れもネガ然として歩武はかどらず、物懶るさげに物語りして進む、通過する村々の小學校は西洋流の新築にて規模も大なり、若し學校建築の大小善惡に依りて教育普及の程度を示すよ足るものとせは、此地方の如きは其最たるものならむ、三時頃常盤村の隴上よ踞して携帶せる大握飯二つを喫す、大さ圓經三寸よ餘り厚さ二寸を超ゆ、木曾路以來握飯一般よ大なり、氣遣ひた

る雨情けなく降り出しぬ、佛崎まで一里と大書せる大木標を見て左より折れ、大澤寺より達す、門前數町の間、路の兩側より高さ二尺許の石より彫める觀音並ひ立ち給ふ、佛崎の觀音とて信州中善光寺、更科の八幡より次て參詣者多き靈地なりとぞ、寺前の一軒茶亭より憩ひて立山越の模樣を問ふ、聞く者呆然容易く答へす、主婦曰く今から十八年ほど前私らのまだ若い時分、新道か出來たとて越中さが鰯なんか賣りより來た事かあるか、何でも道のりは十八里許もあつて、途中より宿屋もあり、米を背負つて行つて泊るのだと聞いたが、其れも暫らくで何時の間にか噂もせぬ樣となつた、主人は曰く獵師の通る道位あるかも知らぬが、草か深うて兎でも御前だちの行ける所ぢやない、居合せたる老僧は慈悲の眼を以て予輩を眺め、立山と云へは此山の後より當るか、此處から彼方へ越した話も聞かず、彼方から此方へ來た事も知らぬ、行けた所か一日や二日かで越せる所ぢやなし、食ふものと云ふて勿論ある筈もない、危ない〳〵止しなさるかよかろ、止しなさい〳〵と云ふ、老樹陰森白日なほ寂寥たる片山里の古寺、雨は蕭々として天漸く暮れなむとす、四邊の光景轉た凄涼、地圖を便りより問ふを須ひす、必ず道あることゝ信し居たる我等は、此の答を聞きて茫然たらざるを得ざりき、將た悵然たらざるを得さりき、然れとも予輩は猶幾分の期望を有す、何となれは立山越は次きの村野口より至りて、始めて其詳細を盡すを得へけれはなり、即ち早々辭して野口村より至らむとすれは、其間に惡川高瀬川の横るあり、水の深さ腰を投し、流急よして底沙足を滑らし、徒渉すへからす、且つ野口よは宿す可き家なしと云ふ、其言を信して大町より泊せむと欲し、戻ること數町、河岸より達し淺瀨を選て渉る、水の流るもの數條、皆急峻なり、一村落を過き

父老より尋ぬるより立山越を以てす、彼曰く十五六年前には通したれども、今は獵人漁夫の他に行くものもなし、通常の人には六ヶ敷からむ、況して此の雨天より於てをやと、前者の說をして願くは事を知らさるものゝ想像談ならしめむと期したるよ、此村よても同說を稱ふるを見れは、虛妄にもあらさるへし、果して然らは嗚呼予輩は此目的を達する能はさるか、失望而かも未た絕望せす、自ら慰めて大町より急く、大町は北安曇郡第一の都邑よして戶數一千許、製糸業盛よして工場あり、七時頃百々瀨對山館より着す、迂路一里半を加ふれば歩む所殆んと九里、浴後地圖を机上より開き前路を協議す、

一針木峠を越し立山より登る　　上策

但案內者なけれゝ此策行はれす

一糸魚川より出て更より立山より登る　　中策

但時日ゝ猶二週間を要す

一糸魚川より出て親不知を見富山を經て歸澤す　　下策

一糸魚川より出て船より伏木より至る　　下の下策

予輩の取るへき方法ゝ右の四策を出てす、即ち食後主人を召して之を質す、主人詳しく知らす、予輩に薦むるに一車夫を以てす、車夫は自ら稱して三回立山を越したりと誇るもの、丁眼、有恒天心、行きて談す、少焉何れも不興氣なる面持にて歸り報して曰く嗚呼何ぞ彼の車夫の芝居に於ける無頼漢に似たるの甚たしきや、頭上髻の歪める、いやに澄したる顏付、言葉付、卷き舌の具

合、烟草の飲み樣、煙管の叩き樣、肩先に手拭をかけたる、腰掛けて一足を股に曲けたる、如何に見るも宛然たる劇中の惡者なり、我等も劇中の人物となりて偖て其問答の大要ハ

問、立山を越すにハ幾日を要するや

答、一日半なり、初日ハ黑部川の岸（大平？）に野宿し、翌日晝頃立山湯に達すべし

問、道の有樣ハ

答、草茂りて六七尺に餘り晴天の日に登るも草上の露にて全身を濡すへし

問、汝ハ予輩を案內し得るや

答、御話次第にて

問、案內の禮ハ

答、行く者ハ何れも米一升を用意せさるへからす、案內者自身も米を要すれハ一人にてハ到底皆の食料を背負ふ能はす、他に一人を傭ふへし、禮ハ一日一圓の割なり

問、用意ハ

答、晴天を見定め鍋、鏈、など用意すへし又イナダ一二尾携ふへし、雨の日ハ黑部川氾濫して渡るへからす

此他先きに案內せる時、他の困頓疲憊せるを冷笑し、頻りに己か登降に巧なるを誇るも、口舌を弄する割合に道筋を知らさるものゝ如し、而かも野郎の言により越岳の敢て難からさるを知りたり、唯憂ふる所ハ降雨五月の天に似て、容易に快晴ならさるやにあり、机を圍み頭を集めて勢なく相談す、糸魚川說出て賛するともなく、又賛せざるともなく、心私に晴天を祈りて十時眠に就く

九月五日（第十日）雨

夢に雨を見て魂を驚かし、醒めて後又雨を聞いて心を痛ます、音ハ止めとも雲ハ霽れす、今にも降らむす有樣、起きハ出てたれとも元氣沮喪し飯も急かす、用意もなさす、維新三傑、武道初心集、など繙く、八時漸く食し、各自宅へ立山を止めて糸魚川ゑ向ふ由を報す、九時雨用意して出づ、足ハ糸魚川街道ゑ響へとも、頭ハ仰かされハ俯す、地ハ濡ひ天ハ曇れり、晴れさうゑもあり晴れぬ樣ゑもあり、歩むともなく歩まぬともなく町端ゑ達す、眺むれハ左方の山脈綿々として北ゑ走る、立山ゑハ彼の谷間よりや進まむ、此の嶺をや傳ふらん、など噂して金剛杖を止めて進ます、其れともなく野口村の道を聞きてハ、烟霞の氣油然として起り、議ハ遂ゑ有恒の口を借りて吐かれぬ、よしや此度通過する能はすとするも、他日の參考までゑ野口に至る可ならむかなと、多數の賛同を得て野口ゑ向ふ、途ゑ三名の村人ゑ逢ふ、其人曰く立山越ハ易々のみ、案內ゑは大田の大島よかちむ、彼ゑ頼めハ大丈夫なりと、其云ふや日常茶話の如く、又隣村ゑ行くを送るものゝ如く、更ゑ意ゑ介せさるか如し、甚しい哉先きゑ聞く所ゑ異ること、有名なると立山の如く、其近きと數里ゑして而かも利害を感せされハ狀勢を知らす、世事皆此の如けむ、予輩ハ此答を得て欝屈せる萬丈の氣焰、勃として激生し、深く究むるゑも及ハす、走せて大島を叩く、主人曰く惜いかな、お前達昨宵佛崎まで來たからゑハ一寸此處まで渉つて來れハよかつた、ナニ河水も渡れぬほどぢやない、今朝早く此村から大平へ魚釣りゑ二人行つたか、同伴すれハ恰とよかつたゑ、

惜いことをしたわい、今朝もモット早けれゝ追付くことも出來たろうか、今からゝ時刻も遲し、道の都合もあり、用意もせねゝならず、それより明朝早く出立して大平まで行きなさるかよかろう、私ゝ暇かないから行けぬか、知人よ賴むてあけようと、扑直よして親切なり、予輩は立山よ登るを得ゝ一日二日滯在するも苦しからすと思へゝ、其議よ從ひ、此家よ逗留す、草鞋脫き棄て井爐を圍み、釋然愁眉を開く、而かも廐屋近く席汚れ、蠅の多きよ閉口す、二時頃晝飯を濟ませ、相率ひて高瀨河原よ遊ふ、白き石上よ碧き峰巒を望みつゝ、寫生を試み、且つ談し且つ歌ふ、嘗て行軍よて覺えたる歌ども、節高く唱ふも、心の樂しけれゝならむ、五時半歸りて夜食を終り、直ちよ蚊帳よ入る

九月六日（第十一日）雨

五時よ起く、準備終りて案內者を待つ、小供を遣りて督促す、七時漸く來る、五十格好の鬚面男一癖ありげよ見ゆ、二日分食料として米六升味噌三百目を携ふ、草鞋は折惡しく此村よ乏しく、十五足を得たり、案內者は自分用として手製のもの五足を有せり、荷物ゝ悉く背はしむ、七時半出足す、予輩ゝ數日の休養よ脚力强く、肩も輕けれゝ歩むこと自ら早し、顧みれゝ案內者ゝ悠長なる歩調を以て徐々として來る、初めは高瀨川の岸よ沿ひて進む、道盡きて磧を進む、磧と云ふも山なり、急坂なり、激流皆懸つて瀧をなす、時々石上よ休憩す、磧より岸よ上り、岸盡くれゝ大石巨岩を傳ふ、岸よは雜草雜木繁茂し高さ六七尺、數中の小徑殆んと沒して尋ぬへきなし、楓及シラカンバ最も多し、雪壓の爲め恰も頭上よ垂る、又楢の大木多し、季冬よ入れゝ熊此樹よ攀ぢて其實を食ふと云ふ、進むに從ひ一部的眼光よは唯珍らしとのみ思はるゝ草木數を知らす、遂よ丁眼をして賢道（齋藤）居らは腰や拔かさむ、幸吉（稻並）伴はゝ日や暮れなむと笑はしむ、十一時石上にて握飯三個の內二を食ふ、晴を祈れとも晴ならす、霧漸く深うして前山後峯を罩め、寒嵐颯颯小雨霏々として降る、正よ是れ征夫傷心の所、前途は茫々たり、巘嶂の重又疊たるを知るのみ、此時案內爺嘆して曰く、此の如き降雨、此の如き惡路、此れより大平よ達せむこと覺束なし、達せされは峠上よ凍死やせむ、如かす一里を退きて小屋よ宿せんよはと、然れとも退くゝ是れ立山越中止を意味するもの、徒よ前路の難きを想ふて進ますむは、月を代ふるも達するの期なけむ、辛苦艱難固より辭せす、米あり饑えす、運動して凍死を避けむ、進むへし〳〵、寒と云ふも難と云ふも、何程の事かあらむと、依て托する所の荷物を受け取り、老爺を叱咤し、勇氣十倍惡河を溯る、老爺三年前、此道を通し其後過きす、爾後大風大雨大洪水の爲め、山形化し水勢變す、加ふるよ煙霧朦朦漠漠岐路よ迷ふもの數次、支流稜々たる确石を攀登して間違ひたりとて下るもの再三、其或は故意よあらさるやを疑はしむ、一時半頃氷原よ達す、昨冬崩れ積れるもの、今日猶層々丈餘を餘し、新雪將さよ來らむとす、谿水は鞳々として其底を通し、縱橫の大裂目は大刀を揮つて切斷したるが如し、窪然たる隧道裏、瀧かゝりて奇觀を極む、裂目を飛ひ越し隧道上を歩む、寒心せさるを得むや、愈々進むて愈々危嶮、即ち道を右山よ求む、雲霧益々濃くして道筋益々判し難く、雨は益々烈しくして衣悉く濡ひ、奇寒肉を鑿て骨よ徹す、總身の震慄止む可からす、時は四時、茲よ道を失す、悄然泣面相をなして殘りたる握飯を嚙み、道を尋ぬること半

時、丁眼漸くよして之を得たり、此道や不思議よ廣くして立派なり、所々崩壞せる所、傾斜最も急よして遠く、一石を投すれは萬石爲めよ轉下して止ます、歩毎よ踏みしめ戒心して過く、路傍覆益子多く、一果口に充つ、味ひ少しく苦しと雖も、手よ應して摘み取るへし、踴躍して針木峠頭よ達し、思はすネガ萬才を大呼す、國境標あり、以て信越を分つ、千嶽萬峰の雄偉豪俊よして雲煙嵐霧の上下飛舞せる、千狀萬態得て云ふ可からす、予輩通過せる信州側は、足下より霧湧き雨降りて一物の見るなきも、今下らむとする越中側は、一大谿谷をなして其間雲霧なく、一樹一石指すへく、嶒嶸崔嵬たる山勢杖頭よ攢むへし、而して連峯の後方は白雲蒸々として昇降浮動し、谿谷を蔽はむと欲して能はさるものゝ如し粗雜なる寫生をなし、五時下山す、植物又前と異なる、大平まで二里、遲くも七時よは着すへしと飛ふか如くよ下る、而かも針木川原となれは石を傳ひ岸を廻り、脚甚た力むと雖とも意の如く進ます、一里弱よして河田小屋あり、六時過きなれは一夜を明かすよ決す、小屋の大さ一間よ一間半、林間よあり、獵師漁夫の不時よ備ふるもの、四壁は樹枝を積み、屋根は板を横ふ、床あるへくもあらねは、枝を重ね又板を敷く、釣手と蓋と なき錆鍋一個あり、底の二三小孔ゝ線を以て塡む、案内爺此を洗はむとして僅かよ水を濺くのみ、之を詰れは洗はゝ銹落ちて底よ穴あかむと云ふ、驚きて其爲すに任す、竈を造り蓋なしにて米を煑、味噌を下物に空腹を充す、半生半ふの飯も小言一言云ふものなし、河原に薪材を求め、燃火を圍みて伏す、夜屢々雨滴の襲ふ所となり、驚きて覺むれゝ火も又滅せむとす、即ち燃料を屋外に取りて此に沒し、横はれゝ忽ち睡る、

九月七日（第十二日）雨

河霧模糊たる早曉、一人二人のこ〳〵と林間の荒小屋を出て、河邊に顏洗ふさま太古めきたり、七時過發す、今ゝ降りみ降らずみの惡天氣にも慣れ、敢て物憂しとも思はねとも、唯水增して黑部川の渡れぬこともやと恐る、道の惡しきと昨日の如く、針木川を下りて十一時黑部河岸に着す、大水漫々として流れ凄愴の感あり、案内爺對岸に大呼すれゝ、三人の漁夫、小山を越へて顯はれ、流を亂して來る、予輩其命に從ひ、並列して一長木を握る、兩端漁夫あり、流に縱し共力して渡る、水臍に及ぶ、此川淺く見ゆれとも深く、往々溺死者を生すと云ふ、大平小屋の前の破屋に入り、板など拾ひ集めて暖を取る、明治八年の頃とか、金澤の前田、横山、佐久間、高橋なと名乘る人々、土肥勝をして信越新道を受負はしめ、良材を擇て建たる旅館、當時ゝ日に三四十人の往來あり、馬に荷負はせて通ひたるも、破損すれゝ修むる者なく、今ゝ柱歪み壁落ちて今年の雪にゝ得堪ゆまじとぞ思はる、哀れ疇昔の名殘ゝ此荒破屋と僅かに殘る針木峠の路となり、漁夫獲る所のイワナ魚を求め、味噌汁にして食ふ、味佳也、既に正午となり案内爺、此雨にてゝ立山湯に至る能はすと云ふ、丁眼怒りて口論し、彼又怒りて小屋に去る、此より先き予輩彼の賴むに足らさるを知り、且つ小屋の主人の良人物にして地理に詳しきを認めたれゝ、此を傭ひて直ちに立山に登らむと欲し、天心得意の辨を以て之を說く、其結果鐵（案内爺）を止めて明早朝主人案内し呉るゝことに決し、一同小屋に移る、鐵もと此漁仲間、此度も同伴する約束なりし に同伴せすして、偶然に予輩を案内することゝなりたるなり、鐵の人物此小屋に來りて頓に下落す、鐵ゝ元

來生國不詳の田舍相撲、諸國を遍歷して遂に野口村に止まり、入夫となる、性情固より察すべきなり、小屋の主人遠山里吉、通稱シナイ（幼名科藏）、身小なれとも膽大に、冒嶮屢々死地に處す、漁の名人にして又獵の達人、山河を躊躇するもの卅年、地理知らざるなし、隱然として漁獵界の覇權を握る、伴ふ所の二男兵（？）年十七、体量十八貫、豊頤にして躰軀魁偉、能く笑ひて心中一點の邪氣なきものゝ如し、其兄亦良体格と云ふ、科藏曰く私ゝ御覽の通り小兵ですか、女房は相撲筋で村中第一の大兵ですから、小供は孰れも大兵です、何れ二人とも兵隊に取られましやうと、誇り顏なり、既にして四人ゝ相與にイワナ釣りに出かけ、予輩五人小屋に殘りて日記を書する折柄、チリン〳〵と金の音して二名の鬚男、荷を背にし濡鼠の如くなりて來る、間もなく四人ゝ各獲物を携へて歸り爐邊に燃く、科藏の得る所、他に勝りて大に且つ數多きにて名人の名虛ならざるを知る、今や小さき小屋は十一の人間を以て押しつまれり、話は初まれり、鬚男は二名とも越中蘆峅の者、一ゝ五十才以上肥滿大兵の坊主頭にして佐伯太刀雄（？）と云ひ、一ゝ卅才前後の鬚より顏を出し皺枯れたる聲に身のほとを知らるゝ佐伯清松（？）、予輩前者に命するに惡僧を以てし、後者を許するに氣樂者を以てす、或官員に賴まれ此れより奥六里許りの處へ、水晶及岩茸採集に趣く由、昨夜は立山湯より一里斗り此方に野宿し、今朝出發漸くにして此處へ着す、口を極めて道路難を說き、人間の通すへき處にあらす、獸とても獵師に逐はれぬゝ唯ゝ通はぬ所と云ふ、明日の天候測るへからざるを論して曰く、天子すら自由になす能ゝさるもの三あり、双六の采、山僧の跋扈及天氣是れなりと、學ゝ老佛に出入し、識ゝ諸外國を呑吐す、比喩の高妙なる漁夫を感せしめ、一瞬の間斷なく警辯を弄す、實に口の達者なるのみならす、一升鍋に滿々たる味噌汁を一滴も殘さす吸ひたる手際にゝ何れも呆然たりき、明日ゝ早く立山の室堂に達すへけれゝ、携帶するも面倒なりとて、晩餐に米の粉を湯に錬り、砂糖を混して食ふ、惡僧、氣樂者ゝ鐵に湯に至らすして直ちに立山に登る道筋を敎へ、其危むを見て怯懦を笑ひなとせる間に睡る、寒けれゝ屢々目覺む、覺めて聞くものゝ降雨聲と河水聲

九月八日（第十三日）雨

五時半に起く、大雨止まず、爐を圍みて又案内の談となり決着せず、惡僧ゝ水增しの爲め此小屋に滯在する代りに自ら案内せむと云ひ出し、鉄ゝ道筋を敎へられても不知の地なれゝ躊躇して獨り行かむと斷言せず、科藏は一人にて行く可きも、鉄の爲めに態々温泉まで下り其米（鉄温泉にて米を、求め歸り此小屋に滯在の見込なれゝ其代りに）を背負ひ來るを嫌ひ、遂に科藏（御山澤まで五十錢）鉄（立山まで日當五十錢）二人を傭ふことゝなり、七時半雨を犯して出發す、草鞋既に盡きて一二足を餘すのみ、此小屋のを二足鉄のを一足得て、成る可く注意して進む、科藏先登たり、鉄殿たり、特に近路を取り黑部川に沿ひて下る、數町の間絶崖を傳ふ、樣々たる深淵の上、罅隙に指先きを挾みて過く、危險又危險、而かも科藏は悠々として神速なる驚くへし、支流を溯り激流を飛ひ越すこと數々、水積多く殆んと溺沒して僅に免る、事此の如くして器械体操の必要を感すと雖とも詮なし、科藏或は梯子を作り、或ゝ繩を弔し、危き場處は殊に保護す、案内者の義務此の如くして全く、予輩の感謝此の如くして深し、他か危險に涖みて脚戰々たるを見、

一念鄕里ゝ走せて父母を思ふ、情切ゝ意迫り潸然たらさるを得さりき、川盡きて澤となり、澤盡きて雜木中を攀ぢ、或ゝ滑り、或ゝ倒れ、或は匍ひ、或ゝ枝傳ひす、實ゝ惡僧か所謂獵夫ゝ逐はれすむゝ野猪と雖とも通はさる所、初めより更ゝ道あるゝあらさるなり、御山澤近き檜林の山頂に達せし時、雨に加ふるに疾風を以てし、潺々音をなして降るもの是れ雹、此ゝ於て鉄は到底登山すへからすと云ひ、何事ゝても案じいないと沈着き居る科藏まで心を痛め、且つや無操子顏蒼め嘔吐を催すと云ひ出てしには斷腸の感ありき、幸ゝして子の病實丹ゝて癒え、歩を止むるゝ及はすして濟みたれ〻こそよけれ、萬一急ゝ治まらすむは嗚呼予輩は如何に處すへかりしか、三時間にて立山を直西ゝ見る、時ゝ風は雨雲を拂ひ去つて全形卓然頭上を壓す、科藏曰く彼の白布を曳くか如きは御山澤なり、右ゝ三角臺の聳ゆるは立山ゝして左ゝ對するは淨土山なり、兩山の中間凹む處はザラ〳〵越ゝして卿等の將ゝ過くへき所、私は此ゝて御別れ申さむと、予輩の科藏ゝ接する二日ゝ濟たず、而かも予輩は彼か外温厚ゝして內犯すへからさる威信を有し、能く仲間ゝ尊重せらるゝ所以を見、私ゝ彼を愛敬する念慮を起し、彼を遇するゝ案內者を以てせす、名人を以てしたるに、其人今や別れ去らむとす、正ゝ親友を送るの感なくむはあらす、別ゝ謝禮として半圓を與へ、意氣昂然谷間ゝ下る、藪林を物ともせすして進み、滑れは踏み直し、倒るれは起き、暫時ゝして澤ゝ達す、即ち何の用ゝもならさる莫座を解き服を脫して綏る、辨當を開く時、雨又降り出す、一時廿分御山澤を上る、大石を傳ふこと例の如く、雪上をも通す、山頂まで一の障碍なく見ゆれは一時間ならすして達す可しと思ひきや、登れは登るほど大いゝして一の越まで三時間を費す、霧薄けれとも曇りなれは遠望かなはす、風强くして金剛杖持つ手は凍えたり、予先んして一の越ゝ攀ぢ、他の來るを待つ、淨土を右翼ゝし立山を左翼ゝしたる廣濶壯大のザラ〳〵越、五個の小動物蠢蠕として動き、トツコイシヤウの喚聲物凄く聞ゆ、洋服ゝ合羽着たる天心は可なれとも、和服ゝ莫座の三人は、濡りゝ濡りて打ち震ふさま哀れゝ寒げなり、絕頂へは明朝登るへしとて室堂ゝ急く、四時半老若二人の堂守を驚かせて火ゝ暖まり、人らしき心地す、斯くて食事となり、予輩は此堂に米ありと思へは携帶せす、此堂は去る五日山仕舞ゝて其後降雨續き參詣者なけれは、明日二人とも下山の見込ゝて、不用の米は皆湯に下し、今は明日の料ゝとて炊きたる一升あるのみ、扨ては大事なり、八人二回の食料に米一升は如何ゝするとも不足なり、立山湯へは四里、蘆峰へは八里、而して予輩は蘆峰ゝ下らさるへからず、八里の山路空腹ゝては道ゝや斃れむ、若き男は食料ゝ供せむとて閑子鳥（雷鳥）捕りゝ出てたれとも、獲物なくて歸る、衆議の結果、四升鍋ゝ味噌汁をつくり、有り合せたる溫飽二束を放ち、四五杯啜り、殘りたる米の紛と砂糖とを舐む、腹の空らぬ先きにと蓆を被りて爐邊ゝ臥し、一日早くして味噌汁ゝても吸ふを得たるを喜ふ

九月九日（第十四日）雨

寒かりし爲め夜屢々醒む、五時頃老人に起され、戸を排けは雨は飽きもせで降り續き、山は霧ゝ包まる、米一升を四升鍋一杯ゝ粥となす、後は兎もあれ此ゝて八人の腹は充ちぬ、偖て案內賃を渡すことゝなり、鉄と天心と喧嘩を始む、斯くては歩まぬ先きゝお粥腹の減らむと思へは、雙

方をなだめ三圓よて事濟みとなる、草鞋二足つゝ携へ七時半老人よ導かれて出づ、御山駈りを欲すれども、一里八町を往復しては、此腹兎ても堪ゆまじければ、地獄廻りのみをなす、間男、百姓、無限、紺屋、鍛冶屋、團子屋、油屋、及八幡（最大）の八大地獄を見る、硫黄旺んよ噴出し沸々泥水を迸らす、蹈む所の地軟かよして水ゝ暖く、悪臭鼻を刺激して久しく留まる可からす、小孔を算せゝ噴出の々所一百三十六ありと云ふ、八時老人よ別れ蘆峅よ向ふ、一里よして鏡石あり、右ゝ一の谷道左を進む、芝草生ふる平原ゝ彌陀原よやあらむ、坂路凡て御嶽山の如く急ならす又嶮ならすと雖とも、時よ澤あり小なれとも木根峠（？）あり、最も困りたるゝ粘土よく滑ると、泥濘脛を沒するとなり、前者の轉するを見て戒めなから、又後者の笑を買ふ、皆々幾度轉顛せるや知る可からす、丁眼遙かよ先んして進み、天心之を追ふ、漸く空腹を感し、其最も弱りたるゝ有恒と「無操、而して最も多く滑轉せるもの又有恒と無操となり、偶々出逢ひたる村人よ問へゝ、猶五里ありと云ふ、長大息して下る、天候も我を弄するか如く、晴雨定まらす、道明寺粉の殘りを嚙み、砂糖の殘りを舐めて辛うして氣力を養ふ、常願寺川よ近き山ゝ玄武岩より成り、傾斜（材木坂？）最も急よして且險悪なり、常願寺川を徒渉し、岸よ沿ひて蘆峅よ下る、一里半の間損所多く河水濁り、流石相磨し其響轟々たり、三時半蘆峅の神官佐伯政直方よ着、直ちに米一升を煮かしむ、櫃忽ち空しく更よ冷飯を喫す、美味譬ふ可からす、蘆峅ゝ皆佐伯氏（他姓十四五軒）立山の神官四名あり、家屋の構造寺院よ似て而して七五三繩を張れり、五時過辭して新道を全速力よて進む、三里を甚た近く覺えて上瀧よ近つけは、二百間の釣橋あり、水の爲めよか危く傾きたり、七時過油屋よ投す、此町四年前よ火災よかゝり一新せりとぞ、五日間發せむと欲して發する能ゝさりし葉書を認め、十一時半温き布團よ眠る、此夜夢亦温かなり、

九月十日（第十五日）雨

雨の爲めよ勇氣を挫かれ、九時頃漸く出足す、十一時半富山（三里）よ着す、堂々たる大都會也、御休處よて辨當を食ひ、黒田寫眞館よて旅裝の儘撮影す、他日の紀念なり、一時半寫眞館を出づ、市を通する神通川、濁浪滔天の狀、凄ましく、悲風慘憺たり、町端の堤防破壞し、俄かの渡舟往來混雜す、三里半よて小杉町ゝ立派なり、一里よて大門ゝ汚き町なり、射水の大水神道よ劣らす、雄神橋の欄干倒れたり、更よ一里高岡よ着、富山より此よ至るまで水害地多く、幾度か徒渉す、六時半酒井屋よ入り、服を改めて直ちよ學友鶴見雄洲の宅を訪ふ、歸來珍らしく八時半よ就寢す、金澤への道ゝ増水の爲め通し難きとありと聞き、心配しつゝ伏す、中夜大雨盆を覆さむす勢也、水の爲めか、祭の爲めか、終夜太鼓聲を聞く

九月十一日（第十六日）晴

今朝も降雨の爲め遲れて八時半發す、市内横田中島よ至れゝ假橋落ちて濁流氾濫、昨午後ゝ通行禁止なりしも今日ゝ渡舟あり、今石動まで四里急きよ急き、天田峠よて力餅よ力を附け、津幡まで二里半走るか如くよ行き、馬車に乘らむと欲して果さす、七時金澤よ安着す、朝降雨したれども次第に晴れ、後よゝ炎威赫々暑きよ苦む、一週間絶えす骨まで濡りたる身も此一日にて全く乾燥するを得たり、而して歸來予輩か最も驚きたるは、各地方洪水のことなり、十六日間手にせざ

りし新聞紙、開けは醒風紙面に充ちぬ、若し予輩にして此天變地異を知りたらむには、恐らく安閑として高山大川を跋渉する能はざりしならむ、將た我父母弟妹も之を許さゞりしならむ、而かも予輩は之を知らずして歴遊し、道立山に入りてより五日間、洪水の變報頻々たるに當り、予輩か音信は頓に絶えぬ、父母や弟妹や如何に心を痛め給ふらむ、不取敢電信局に走せ行き、電信不通と聞くも憂たてや、端書投け込み、我宿に歸れは、家大にして家族多し、我兄、我弟、和氣藹々たり、樂しきかな時習寮（完）

文苑

落葉混雨

草野時雨

さむさもいとゝはけしき夜なと友かきうちつとひて火桶のめくりに圓居しつゝ心ゆく物かたりにおもはすも時をうつまついさいなんとすなる折しもろよと吹すさふ木枯しの音さへいと寒けなるにまして障子のひまなとよりもれくる風に門の外をもおもひやられて出立ちかねしかあるしの今すこしとすゝむるまゝにまたも座に直りて炭さしろへなとするに空定めなき時雨さへふりいでゝ神無月葉守の神もおはさねば落つるにまかすこのはをさろひて窓をうつはいつれを時雨いつれを木の葉ともわかちかたしや

紅葉はをちしほに染めし山姫のこゝろをくまぬこからしの風

紅葉はも風にまかせてをりをりはともにまとうつ村時雨かな

送士官候補生歌併反歌

松下雅雄

大君酒知し召す國、其皇國守らふ伴と、武夫の八十氏人と、汝はしも成り去今日より、朝な夕な掛も畏こき、おほけなくたわ業まつゝ、さかしら尓こと擧け去つゝ、日嗣の御子食すみ國を、現津神居坐すみ國を、あちむら騒しあらは、かりこもの亂しあらは、去れものゝ内外をとはす、大君か任のまに〳〵、大きみのみ楯となりて、額には矢をはたつとも、背には矢をはたてしと、群膽の心をゝしく、一筋に命死なんと、を猛き利心れこし、汝かはく腰大刀もちて、汝かのる荒駒なへて、村雲のれりゐることく、打ちはなつ火筒の煙、大波のうちよることく、鯨波つくる仇の醜男ら、左にも右にもはふり、城はも蹴はらゝかき、百八十の國てふ國の、うまし國まほらのくにと、天降嗣天津御祖酒、皇御孫のみ心やすめ、目輝く旭の旗の、大前にひさをりふせて。玉くしけ二心なく、年々よ海の外なる、王等か貢の船を、ほてうちて掉檝ほさす、千万のみ民等祝ふ、浦安のみ代に去てむと、日本魂其の御柱を、鎮めたてわか大君の、神なからさとし玉ひき、勅語いつのくたりを、忘れしと勤め去まりておこたるないめ、

反歌

おのか身と露な思ひろ大君のみ楯なる身ろかせもいとひて

あら鷲も獅子もうかかふ時なれや御垣をさらす心去て守れ

關路紅葉　香村茂富

時雨のみ關こそこゆれ旅人いもみちのかけにとゝめられつゝ

森秋風

くち葉色にもみちの錦うつろひて秋かせさむきころもての森

落葉浮水　草野正義

ちりしけるもみちなからに賤の女か手桶にくみし山のゐの水

寒草霜

かれはてし草葉のこらすおくしもに鳥のあとさへしるき庭哉

湊千鳥

故郷のゆめをあつめしみなと舟ありといしらて千鳥なくらん

寒樹交松

立ならふ松には冬のみねねとも紅葉うちゝるこからしのかせ

枯はてし梢に風はさはらすてまつの葉にのみおとのきこゆる

今様

野邊の津と　千木廼舍主人

尾花　聞も遊がゐき上臈の
文よむこゑのかつもるゝ
妻戸の邊穂にいてゝ
尾花や誰れを招くらむ

女郎花　小松にこまをつなきつゝ
殿のわく子の露なから
香とりの衣の袖ひちて
手折もあれ女郎花

葛花　千草をゑりてよきひとの
能く見てよしと七草の
花とお指を折られつる
まくつゝ何をうらむらむ

牽牛花　はゝ生のこやも賤かすむ
家居ともなゑませ垣ゝ
朝なさな笑む朝顔の
花のにしきをつけてより

萩花　七へやへかきゆふきりに
ひもとく萩の花つまゝ
野守か庵にわれを止め
歸さの道もとゝまつ

桔梗花　千卷の文をけさも又
ひもとき匂ふ紫の
花を手折りて世にかひの
ありのひふきそ頼母しき

藤袴　拂はぬ園ゝゑら露の
結ひかけたるさゝかゝの
糸のとちめや仇ならむ
はころひ渡る藤ばかま

松虫　古き都ゝあれよしを
根の日せし野の松虫ゝ
今年もあれ鳴出て
大宮人や慕ふらむ

鈴虫　さちを荷ひて獵夫等か
家路いろけゝ夕しくれ

ふりいてたりしはゑ鷹の　心のひまをつゝれとや
すゝ虫のねもあき更ぬ　つくゑの鳥よ吾居れい
促　織　往來もまれよさよふけて　涙のよる〳〵蛬〳〵
擣衣の音もすみわたる　蟲　虫　四條畷のあきのくれ
月草かくれはたをりの　草の葉ごとに置く露の
已かときとやこゑきはふ　涙よ袖もくついむし
蛬　かきあつめつゝ臣藻もて　汝もかなゑとねにやなく

發　句

秋季雜吟

駒とめて紅葉手折りぬ奇兵隊　文　樵人
見上くれい崖千仞の紅葉かな　泥　牛
殘月や狼吠ゆる木曾の秋

冬季雜吟

夜網うちよ親子つれだつ寒かな　一　望
夕雲や野中よ高き冬木立　同
月代や障子に木の葉のちるを見る　同
初雪や朝日まぼゆき塔の尖　長　風
無住寺よ鯉のあれる霜夜哉　同
十夜の月地藏の顔の現らはも　同
ひや〳〵と木の葉ちるなり墓の上　秋　竹
よろ〳〵と冬木立つなり塚の上　同
かはらけの水こうりけり地藏尊　同
古辻に駄菓子もくども吹雪かな　同

醫學部の卒業生を送る

君い今紙衣をぬいで去りたまふ　同

呂蒙論

村上函峯

所レ貴二乎謀臣策士一者。使三其君知二名義所レ在矣。若夫不レ問二名義一。以求二一時之功一。則使三其君爲二國家之賊一也。雖レ得二其志一。爲レ罪可二勝道一哉。管仲之輔二桓公一也。其未三必合二大道一也。而仲能攘レ夷尊レ王。故聖人稱二其功一。不レ責二其迹之不レ合二大道一也。王猛之事二符堅一也。其名未レ免レ爲二符堅之謀臣一也。而猛臨レ終丁寧告戒。謂二晉不レ可レ伐。故後世稱二其賢一。不レ問三其所レ事之非二正統一也。是皆非四以能使三其君知二名義所レ在乎一。晉者吳謀臣曰二呂蒙一。方下關羽鎮二荆襄一擒二于禁一梟中龐德上。操甚畏レ之。欲三徙レ都以避二其鋒一。此誠漢家中興之秋也。而蒙爲レ權策。躡二羽後一。於レ是羽一

敗塗レ地矣。世之議者。多奇二其功一。余以爲不レ然。蒙之所二爲レ權策一者。適所四以使三權爲二漢家之賊一也。何則劉備雖三僻二據蜀漢一。堂々漢室之裔也。彼操者特漢室之賊耳。乘レ時擅レ命。脇二制天子一。戕二殺國母一。是忠臣義士。固所レ不二共戴一天也。而羽倚二大義一。以討レ賊。借使二羽戰輙不レ利。爲二吳人一者。宜二協力悉レ兵救レ之也。而蒙乃勸レ權躡二羽後一。於レ是漢家中興之事去矣。然則亡二漢家一者。非二曹操一權也。而陷二權罪一者蒙也。且夫吳蜀者。唇齒之國也。蜀亡則吳亦亡矣。未レ有二唇亡而齒存者一也。今也羽西向而征。殆破二樊襄陽一。不三唯爲二蜀利一。亦吳利也。蒙因率レ兵助レ羽。以誅二漢家之賊一。則羽之功。即蒙之功也。而計不レ出二于此一。自絕二唇齒之援一。乃使三權爲二漢家之賊一。此管仲王猛。所レ不二敢爲一。而蒙自爲レ得レ計焉。世之議者。又從奇二其功一。何其昧二天下之名義一也。吾嘗謂權天下之英主也。赤壁役。操以二百萬之衆一。而下二江陵一。其勢固不レ可レ當焉。而權能排二衆議一。用二周瑜一。乃與二劉備一。一舉奪二其膽一。是不二特爲レ己也。而是使二天下忠臣義士吐レ氣矣。權蓋可三與以建二名義一者也。而蒙用二邪謀一。陷レ之爲二漢家之賊一。故綱目於レ殺レ羽。書曰權斬レ之。其醜千古不レ滅。不二亦悲一哉。嗚呼。後之爲二人臣一者。爲レ仲爲レ猛。亦不レ可レ爲レ蒙也。

尾張敬公世家跋

浦井信

世家之體。盧陵以外。後世寥二。蓋以古今治體不同也。本邦近古。封建爲制。非家紀其事。則何以供史之採擇。而澁太室等之撰。概不及此。獨宕陰鹽氏。著水野世家。可謂翹楚矣。舊藩尾張。儒先匪乏。而未聞有藩史之述者。予常以爲遺憾焉。頃者川君濯父。有敬公世家之著。敘事周到。無皷筆之態。濯父受業鹽門。蓋與聞史法。此書一出。本藩十六公之德之治。赫奕千秋。我知其益於國史不鮮少也。因慫慂濯父。以公于世。遂書一言卷末。

題鍾馗捉鬼圖

蜂嶺生

嗚呼鬼豈一也哉。雙角電眼。巨口達耳。持鐵捧。著虎皮褌者。是鬼也。蛾眉豐頰。雪肌漆髮。容貌如花。纖手巧彈。輕軀善舞者。是亦非鬼耶。夫半點紅唇。能惱殺幾千人。一雙玉手。能顛倒幾萬人。自古有叱咤三軍之勇。而爲眉斧所伐者。不爲尠矣。嗟夫。豈可不恐乎。雖然鍾馗人也。吾亦人也。彼能片手攫鬼。綽綽乎有餘勇。吾豈有獨不能之理哉。然近世懦夫多。而爲眉斧所伐。敗家傾產者。愈多矣。書者發聲。鍾馗將喑噁叱咤曰。腐腸男子。何不買吾餘勇。以免殺害。噫嘻。

秋日漫興

蓉湖漁史

賦就登樓感轉深。金臺秋暮氣蕭森。寒鴉枯木大乘寺。落日西風小立林。千里飄々傳信雁。終生碌碌蝕書蟫。鬢絲何啻人將老。白雪看佗灑遠岑。

同

冷骨

才人蹶起博功名。氣爽秋高好遠征。風急海南狂浪攪。日沈邊朔怪雲橫。林逋封禪書無作。杜牧罪言文未成。詩酒逍遙吾事畢。任佗長劍篋中鳴。

聞人語登立山詩以記之

纔攀絕澗復緣隈。八月幽崖古雪堆。虎嘯白雲巖骨裂。龍噓慘霧洞門開。嶺分南北陰晴異。山自東西高下來。俯視大鵬出溟海。扶搖萬里氣雄哉。

日暮野行

急風呼度雁三行。枯葉齊鳴索々聲。過際年光元似夢。無衣客子若爲情。淡雲微雨遙林晚。斜日荒原一水明。不耐蒼茫回首處。孤砧忽響尾山城。

賀人卜居犀陽

白露清涼山樹秋。新移几案就清流。窓迎山色當杯酒。枕近溪聲夢釣鈎。花木滿園三徑闢。詩書萬卷一樓收。橋邊尋路從之字。認此柴門背市幽。

飲北狂骨妙典精舍共賦四首

水明山遠稻雲辰。望濶高樓綺席陳。檻角江山披畫幅。眼中人物見天眞。三千里外雖知少。五十人生合日新。骨冷神清身乃健。乾坤可愛是秋旻。

門外有塵傷旅征。酒中多興託浮生。思無邪矣人如佛。眼是明分物隱情。龍捲雨雲來座席。風飛林樹撼山城。吾徒豪快在今日。更把深鍾千百傾。

百千傾盡叫雄哉。高閣故人迎客杯。湖海孤行皆我輩。江山信美養君才。風前吹笛牧兒去。月下浣衣溪女來。見說眼前光景好。攬裾自起共徘徊。

欄頭酌酒興偏濃。清景無邊向客供。檻底江流三萬里。窓間山嶽百千重。浮雲抱雨生陰壑。虛籟掠空鳴老松。興湧揮翰不停手。詞源浩蕩趁飛龍。

蓬萊遊囊（承前）

香陽子

富來

夕陽紅歛晚風催。渺渺滄溟望壯哉。潮湧海門波浪暝。千帆如鳥自空回。

觀音山

宮對滄洲隔世囂。彩沙白浪繞山腰。連峰遠沒烟波去。七點青螺七島浮欲搖。

平太納言墓

衣冠千歲化蒿萊。斷碣邊陬枕綠苔。異姓非人言尙在。一門榮寵夢空摧。青山奔馬墓門合。白浪翻旌羌笛哀。英魄不須傷地下。當年廷尉亦黃埃。

狼烟

青山蹈盡入狼烟。決眥奔濤與漢通。一夜岬頭遊子夢。茫々飛渡鄂羅天。

珠洲岬

扶桑一角入洪荒。地脈崩沈不可防。決眥遙收山髣髴。盪胸平接水汪茫。馮夷擊節乘溟漲。伍員驅潮暗夕陽。敬髮臨風發長嘯。盤雲鵰鶚忽飛颺。

山伏山　傳云往時孝子阿新丸報父仇於佐渡欲去而雲海渺々忽有一道士乘雲而來背之得以渡焉今山上有祠祭道士

仙山高秀白雲岑。上有神祠隱樹深。孝子復讎何處所。青螺一點出波心。

須々神祠見源廷尉遺笛及辨慶佩刀

千秋卿相付嘗嘗。昨賦落花今斷鴻。能州源平遺跡甚多大谷山中有平太納言墓大納言女嫁源廷尉而廷尉之東竄也追蹤太納言經過此地遠逃蝦夷峯上山伏道人飛怒鐵。

天風吹渡海波中。

蛸　島

方壺域外一方壺。更見神山峙海嵎。日暖童男與童女。長竿孤艇隔波呼。

柳　田

幽嶰万波外。梅林春一谿。香雲殘雪晶。花影遠帆迷。家隔微聽犬。樹深漸失蹊。仙源如可覓。願傍此山躋。

戀　路

烟霞問訊未心灰。戀路灣頭鞭馬來。回首天邊多所思。所思迴倒入波摧。

九十九灣

曲曲畫屏爭巽觀。美人迎送下雲端。好乘鸞鶴凌蓬島。無數仙鬟臨鏡看。

田　浦

万松蓊鬱辨天祠。島外渡平畫幅披。想見清風明月夜。湘妃皷瑟舞馮夷。

書　感

拄將感慨付蒼波。莫使三春醉裏過。人擬靈槎犯斗去。山排長劍倚天磨。風雲湖海壯心激。落拓古今奇士多。夜半風濤醒噩夢。可能隻手掣蛟鼉。

圓　山

扁舟一葉截層瀾。山海風煙春正闌。落眼孤巒圍樹色。閑雲碧玉半空看。

自大口峽抵向田

大口峽中波溟平。兩山烟樹夕陽明。凌空一鳥導帆去。髣髴蓬壺咫尺迎。

田　鶴　濱

田鶴飛空勝地悠。千松一霧壓波頭。前山隱々暮鐘響。遠落海灣餘韻流。

去　能　州

不許仙槎久繫留。又翻馬首向加州。蓬壺百里夢空繞。花雨三更予更愁。駒隙千年那得駐。藥肥何日重清遊。雲端渺矣美人影。擧手招招天路悠。

次韻雲濤上人見贈却寄

縹緲遊蹤詩一囊。君家山水借餘光。惟今墮在紅塵裏。回首蓬萊道路長。

香陽子曰別有仙槎餘影一卷有敢省載焉

批評

藤馬卿

本誌第十二號の梗概評、

評家の必ず有すべき鋭犀精緻の筆も、嘲罵桃戰の氣骨も、博考密証の素養も共よわれ人よ欠乏せり。自覺かくの如く而もわれ人は進みて本誌第十二號の梗概評をこゝよ試みんとす、讀者諸君、

その意を知るゝ蓋し難とせざる所ならん。余は言を持して確ゝ白狀す、余の評言たる前號記載の作物ゝ對して秩序ある透察をなし、其作品の理性如何を判斷し去るの力量なき代りゝは、またその作物の處刑執行文たるの價値も存有せざるべし。想ふゝ英の詩人「ロングフエロ」氏が言ひけん如く、批評なるものゝ性質は疑もなく、著作の欠點を穿搜探索するより、むしろその美所を表彰褒賞すべきものならんも知らねど、余は舞文抑意ひたすら支那主義をまねて、諂諛的贊美的評言を作家諸君ゝ呈して、能事終はれりとなすを欲せず、流血千斗もし能ふべくんは、作家諸君の表皮一枚を搔抓し去らんとを欲す、能ふべからずは少なくとも、作家諸君の心裏ゝ一片の怒氣を釀さしめんとを希ふ。

本誌は辰章校の機關誌也、辰章校各部の志想發表は本誌の目的とする所。辰章校々風の發揚は本誌の期する所、本誌號を重ねてこゝに十二號、その目的を達したる幾何、その期望を成効したる幾何、吾人は何の點ゝ於て斯く、此の點ゝ於て斯くと打算的ゝこれを表示し得ざるも、本誌はその目的その期望の爲め、隱微の間ゝ成効し、裏面ゝ於て至大動機をなし、本誌初刊以來未だ二周年を經ざる、實に短日月なりと雖、その間直意一軌道をきしりて、汚職瀆責の欠如たりしものなく、確ゝ吾人は本誌の一段進歩したるを認む、その含有作物の種々なる志想を啓き、學生てふ制限範圍内の絶頂迄は、作者諸君が不恐不殆、駸々その抱く所の志想を投書記載せらる、故ゝ誌面は光彩陸離單調ならず、各個幾種の主義曜如、諸種の志想潑溂、不言不語の中一個の好戰場を現出し、本誌期來の目的を達する方法ゝ於て一階を超にて更に一階を進めたり、本誌が其結構ゝ於て進歩したるも、―進歩なる意義ゝ退歩の意義をも保有するものにあらざる耶、その美所ゝその弱點の潛伏するものゝあらざる耶、―或ゝ退歩せるものなき乎、然らざるも退歩の傾向を生じたるなき乎、これ至大問題也、想ふにわが意見も會員諸君万眼の見る所も別ゝ相違する所なけん、すなはち本誌ゝ艶華ゝ流るゝの傾向を生じたるとこれ也、この傾向ゝ本誌將來の進歩ゝ向つて、本誌期來の目的に向つて如何なる影響を有するものなるや、主武觀偏見を崇拜せざるわれなれども杞憂なき能はず、吁、歷史は確然にその機密を証明し盡せり、曰く創業ゝ豪壯に始起し、全盛ゝ艶華の絶頂ゝ歩を止め、艶華ゝ頽壞を招導す、われ人ゝ啻に杞憂を抱くのみにて未だ本誌の退歩を認めず、本誌の命運祝して將に可矣、警して可矣、祝する心ゝ全盛の曉光を見る近ゝあれゝも也、警する心ゝ頽壞を恐るゝゝ出づ、語を寄す、「氣」の一字ゝ宇宙の大精神也、凡百の万事「氣」の面前に訟訴され、「氣」の勢力ゝよりて支配さる、氣の騰る雄大に持すべし、氣窒す体のみだれさらんと欲するも能はず、本誌現時の意氣大なり今に於て、祝して警し剛健壯厲の氣を鼓吹するなくんば、ろれ它日の果蕾美乎、醜乎、われ人は収獲に先ち五風十雨を祈る農夫たらんと欲す、夜は日ならん爲に必用なり、憂は樂まん爲ゝ必須なり、警戒は祝賀の爲ゝ須用なる恰も然り、われ人は猶更ゝ言はんと欲するものあるも、そは后日に讓り聊か各欄に付きて所見を記せん、われ人は欄順を變更して劈頭附錄、夏季跋涉錄を評せん、これ夏季跋涉錄ゝ本誌の初めて附錄とせるもの、會員諸君が鶴首本誌の到達を待ちたる大勢力は、夏季跋涉錄が其多を占むるを認めたるに外ならず、

夏季跋涉錄、載するもの三篇、和文体一、漢文直譯体(?)一、通俗体一、各々特殊の筆なり、而も出色の文字なく、平々凡々の作風ダラ〳〵山鳥の尾然たる三作家の御手際は、只管欄塡の風來者と見たるが僻目か、吾人所見ありいはく、記行文の最難にして最易なる點は、山水自然の景象に應じて筆端に現はるゝ波瀾にあり、波瀾の余波讀者の心髓をうちて來るものなくんは、如何に綺句美辭接踵珠數の如くにして章をなすも、未だ篇をなせりといふ能はず、波瀾の語は現形の波瀾內包の波瀾の二種を含む、現形の波瀾は文字の上にあらはるゝもの誰もなし易しとする所、內包の波瀾に至つてや詩觀を持し、詩聖を恐るゝものにあらざれば能はず、詩的觀念を固有し內包の波瀾を逞ふするものにあらざれは、如何に現形の波瀾巧に字句の排合妙を得たるも文は死せり、以て味ふに足らず、蓋し紀行文は散文の詩也、詩與は天地の光妙に接して、自然の景象に感じて心中に湧出するものなり、故に紀行は詩の泉源なり、苟も詩の景臺に立ちて、詩の旨趣を味ふて、詩類の文章を作る、ろの心中詩的觀なきものは、只管その描く風與をして支離滅裂、詩神の聖壇を汚すと幾何ぞ、むしろ筆せざる方可矣、吾人の所謂詩的觀とは、小說家の所謂凡百の万事に對つて濺ぐ同情なり、己が跋涉しつゝある山川の景臺をかりて、己が遊歷しつゝある自然の風光を用ゐて、己が志想を容觀に、主觀に描寫す、茲に於て手紀行文に波瀾起り、活氣を帶び始めてその体を供ふるに至る、今夏季跋涉錄所載三君の記行文は、余が下せし主義に合するものなるは乞ふこれを檢せん、楓溪山人氏の白山登行の記、紀の貫之崇拜者と見え、土佐日記流にかきつけらる、されど氣魂は學はれぬものにや貫之ほどの稜々はなし、和文はその調に於て實に優柔なり、

現形の波瀾に於ては漢文直譯体等よりも成効至つて少なし、かゝる不利の体を以て內包の波瀾なき文を作る楓溪山人氏の作品、三記行文中最も見劣のせらるゝは是非もなし、然しその作中流石流石と感服すべき點なきにしもあらず、大鼓野のあたりは楚々人に迫りて、結末千鈞の感は苦心の程十分あらはれたり、次きは豐泉生氏の五個山紀行也、こは現形の波瀾に於て三文中最も成効したるやに覺ゆ、漢文直譯体(?)にて書かれ、その上字引的難字を好みて用ゐられたれは、五個山紀行は內包の波瀾少しもなく、日上立派の序幕所作事なり、肝要の本幕は何が何やら無茶苦茶に漢詩の直譯を粹めたる樣ゑて、市川糸八の手踊を見し后壯士芝居を見るが如き想のせらる、它の二作家は記行文ゑ欠くべからざる照應の點ゑ留意注心されたるの痕跡、紙面ゑ躍如たるも、豐泉生氏は只管長文をつゞめられしゑや、起首ゑ於て舟ゑ車に云々と言へながら、此段之に應ずる平家の末葉が五個山ゑ籠れる來歷を記するなし、また五個の奇答ゑ投ずるの企を成すゑ至りしもの抑も幸か不幸かの伏線に對して、何等の余事ありしか疑はし、さてゝ氣付きたり豐泉生氏が烟霞の癖欝勃の氣迸發してなりし此行の幸は、氏か此文を得たるゑて、その不幸は余が駝評ならんかな、越中ゑ下り給ひし親王は、成良親王と舊記にあるを、氏が護良親王とせるは粗漏甚矣、護良親王には越中へ降下のと絕えてなし、氏が無理な用句用語を指適せは、各貢十を以て算ふゑ足らん、いはく時ゑ三更雨滴の既ゑ霄々たるを見る喝々、鯉魚潑溂として游樓し等の如し、呵々、義山養愚氏の御獄立山紀行、東山北陸兩道の山川を踵ゑ、蹴つて回りし大遊歷、十貢の長き尙其半を盡さゝるの觀、敢て不可思議の事ならず、御獄立山紀行体は五個山紀行の如く囂々たらず、白

山登行の記の如く嫋々たらず、其中ゑ立つ通信体、讀者間には有難味の最も多きものならん、天地の景臺に應ぜる現形の波瀾は、此作中十分老練密熟の筆路を以て成効したり、内容の波瀾に至つても他の二作と異なり、所々點々表示されたり、例令そは臘にて僅か三日月の木曾の谷間ゑ照る如くなりしとも、余い氏の作を夏季跋渉錄中の主ゑ推すを憚らず、然し直言以てわが見をなせば、御嶽立山紀行はあまり新聞紙の通信めきて、左程われらい隨喜の涙出でざり、その一を以て全体を推せば可なる物價表などを仰山らしく書き上げし狀、此人ゑして此過失あり、可惜の至也、一般に言はゝ夏季跋渉錄は、附錄としてわざ〳〵副へて、ながむる程のものならず、只同學諸君の英氣を羨むとい、乍吾見下げ果てた根性なり、若し善罵將軍の口調を借りて言はゝ、則ち吾曹聞き得たり、同學諸君中不眠病を惱むの士多しと、兄等魔睡劑を服して床につくを止めよ、魔睡藥は身体に不結果なり、こゝに良藥あり乞ふ本誌第十二號附錄、夏季跋渉錄を讀めよ、睡神五分ならずして催さん。

論說欄、歷史的評論として本誌に掲げられしハインリヒ、フヲン、トライチケ氏を想ふは、雜誌部々長浦井先生が、獨の史家トライチケ氏の死を痛むの餘、先生の恩師博士リース先生の近著を譯出して掲載せらる、簡潔雄宏の文裏トライチケ氏の面影躍如、筇を負ふてその門に遊ぶか如き觀宛然ゑせらる、吾等史上トライチケ氏の恩澤を浴びる未たしと雖、追慕の念心頭に湧かずんはあらず、曩に僞作文書研究の一例なる長論文をものせられたる先生今この作あり、われら實ゑ感謝せざるべからず、例令先生のこの稿マコレー氏、カライル氏の面影なしと雖、吾等后進と導かるゝと甚矣。遠山淵氏の北陸の幼大學（世眼に映ずる）、吾が辰章校を思ふの至誠迸發してなりしもの、一氣呵成に筆端のび、練熟ゑ章句の法整然たり、雖然、見を皮想の點に置かれ、論據を外見ゑ据られたるは寔ゑ口惜しき次第なり、如何ゑ世眼ゑ映するものゝみを指適せられたるなるも、世の中一人の活眼を有するものなきが如き書き振は、驚歎の外なし、この論文別ゑ妄評を奉るべき全地なし、されと飾衒ゑ過ぎ、魂神蹈みて足を空ゑ舞はす的の感起らざるい遺憾甚矣、次ぎを河原始二氏の時習寮となす、吁われ時習寮ゑ對しては一個の見あり、曰く時習寮は河原氏の言ふ如き佛壇ならず、僅少七十余名の青衿が、不完全なる建物の中ゑ、各個の契約ゑよりて組織されたる寺小屋的自治團体なり、五百名ゑ對する七十名の人數、毎ゑ出入朝晩人を異ゑせり、而して上ゑ酷正の主則を抱くなく、放任の下意のまゝゑ事をやる、如何ゑして校風を發揚するの實を擧ぐるを得んや、然るを何ぞ、兎ゑ角氏の時習寮は甚敷賞賛ゑ過ぎたり、その上に文は平易ゑして雄壯ならず、最も苦心經營せられたるものならんも左程に感ぜず、本誌の論說欄何ぞ寂寥なるの甚しき、莊子管見の夢は再びすべからざる也、詩人の覺悟の記者、大學に入つてそが套を奪ふの士更になきや、われ人は慨歎に堪へず、同學の君子發憤斯道の爲めに盡されよ、

雜錄欄、これと名のつけ樣なき種々沙汰の散文が宿場、花月に夜ぞは一杯味ふて泣くあり、髑髏を抹香にくべて歎くあり、剛あり、柔あり、美あり、醜あり、いつも賑々しく盆踊の如き風情、紅白万花今を盛に咲き薫る春野の景色は、此欄の獨り恣にする所、宿場故見苦しき客人なきにもあらねど、一般に魂の据はりし文章、他欄の如く確乎たる題笠を着ざる有難味には、思ふ存分心

のまゝを吐き散らし、會員諸君の主義志想が他欄に於けるより多く發表せらるゝ此欄の幸福也、ショウペンハウァ語錄、原文と相照の上ならでは申し難き譯文の適不適、孰にせよ筆は立派に暢びたり、われらは今迄ショウペンハウァと聞けは、厭世派の近世一大哲學者なると思ひたり、然るに此篇を讀めは何ぞ計らん、其寫出せる言語は、社會の皮想を觀察して、只管狂熱に、激烈に、怒り散らせし放言集、ショウペンハウァの或る半面の性質は慥に現はされたるも、そは只渠が獨有の哲學を稱ふるに至る航路のみにて、その特性の厭世觀なる沈痛悲壯の詩的詞類の一句もなきは、ショウペンハウァを紹介するの責を全ふせざるものならん、吾人は斯く今も尙想像す、哲學者なるものは情想以上に登りて每に理想を逞ふす、故に其言行たるや每に聯闘せる一條の綱を有するものなりと、然るに此の語錄に於ては句々のもの、彼一片此一片其間に一條の聯綱存在するを認めず、例令日常の詞辭なる故、決して聯綱なきものとするも、聯綱あるものゝみを以て一個の章篇を組成するも、哲學者の語錄を編むものゝ大心掛なりと信ず、英の大詩人バイロン氏、テニリン氏の頭字をその名とせるBT氏以て如何となす、次きは內藤柳外氏の阿奴浦の一夜なり、未完なれは省きつ、戀瀨川は奮庸生の佳作なり、奮庸生七旬の休暇事なきに苦しみ、馬琴の著八犬傳を讀む、人は奮庸生なり、書は八犬傳なり、想相通し意相結び、腦に鬱みし觀一時に迸りて涙流る、流れ〳〵て行末は筆の命毛にしたゝる戀瀨川、あわれ永久終りなき戀の姿、星殞ち山壞るとも海涸れ口減るも、決めて消えぬは世の人が、戀の瀨川に渦きせかれて、人や知る〳〵汝や知ると、雲井よ名のる杜宇よよせて、流せし熱き血汐の袁え立つ泡沫ならんかし、その泡沫よ浮きつ沈みつ、愁涙よ吳竹の五十年の賜物、榮華と醉ひし春野の陽炎が、秋風吹けは稻妻引く石火のほの〳〵燃ゆる印塔場、さて定めなき現世の無常よ、これのみは定まれる戀愛の道、妄執の炎焰身を焦せし果ては、眞紅〳〵の蔦紅葉、もつれからみて口說よ泣きしは昨日の一昔、夜な〳〵出づる辻君や千代の契を鳥追の、三線ようたはるゝ浮名の末の今の血涙、これも戀故自ら落ちてむ地獄道、閻魔の苛責をうけながら切つても斷れぬ情の撫、手枷足撫いとはねど免れかねし煩惱の絆や惑をは、よくも穿ちたるものかな、魔にさゝれし素天奴の白痴姿を、さりとは憎き程合點の行かぬ作者の心業、如何なる經歷か存ずる聞かまはし、然れどこの篇うたふ所は果敢なき獸慾一點道なり、戀愛の果ては作者がいふ如く悲慘にして凄痛なるものか、また如何なる人も斯ゝる淺薄なる戀よ陷らざる可からざる命運を有するものか、戀愛は人生最大の目的よして斯くも希望の光明なく濛々たるものか、實よ然らず、作者が見る戀愛は眞ならず、一時の狂情なり、一時の狂情は時あつて消え、時あつて炎え永遠よつなく慰籍なるものなし、慰籍なきものに一命を投ぐ固より悲絕に終はる當なり、その可賤可憎戀愛よ至大の同情を濺き玉ふ作者の心、優よ西鶴の流を汲みて、「戀ながら戀のみ思ふ戀心、語るも戀か、戀の覺めなて花も戀には猶をかしく、月も戀には更ず、風も戀には身にしむ心地もせず、雪の朝の歸さ雨の夕の通、こしかたは過し戀、今よりは行末の戀、精あるは戀よ迷ひ、佛も戀より出ます、戀も夢無常も夢、情もきのふの夢よくれて、思ひしもかはゆきも美もおもはくは皆夢ぞかし。」と戀を悟り玉ふならんが、西鶴は一種の狂熱を帶びたり、而して作者は狂熱なく只管肉戀(?)を嘲りて、眞戀を貶す、作者の大過失なり、この

篇中肉戀に對する眞戀の度を示すなく、只肉戀の悲哀を解く、作者は涙流れて戀瀨川、われは驚襲されて聲も嗄瀨川、妄慢多罪

文苑欄、漢詩、和歌、俳句、新体詩、今樣、和文、漢文、すべて會員諸君の詞藻は、百万石の石垣砌つて薫り來る梅園よ、色優さしくも樣々咲き出でたる花一枝、讀みて見なは、實のある椿のなきぞうらめしき、その嘲言は武藏野以來五百年がらの藝言なり、われら元來俳句よは至つて憎惡のつよき方、まして今は秋風吹いて芭蕉葉の、線のみになりゆかん世の有樣、何のそれ彼のこれと申すは、身にふさぬとゝ斷念て評せず、和文三章共めでたき至極なるか、安木田先生の堀四郎大人追悼會には、加藩の昔いかにやと思ひやられて、心わが者にあらざらん樣覺えたり、めでたき書振よ。逢生庵氏が友の亡魂に讀みて供へし追悼詞、近來友を失ふと多きわれらには、人事と思はれて性涙露なり、國歌漢詩は其の道を通る人々に讓りつ。今樣四首、詩形ハ今樣なり、されど今樣ならぬ想讀ませられしわれらは、評すべき詞なし。遊童子氏が蝶の花妻、五七の調加ふるに風韻のみつとめられたれは、反つて風韻なく、惡しき作なり、されど氏が東都の文學界の一驍將、島村藤村氏が三四年前唱へ出せし利器を、力かぎりふり回さんとし玉ふ心業、流石男子の本領敬服の至りなり、村上函峯先生の登白山記、北陸の雄鎭此妙文を得て、名ます〳〵海内よ揚らん、吾輩先生の足下に伏し、先生の老而益健なるを祝す、先生わが同學五百青衿の爲め、示敎訓戒せらるゝと茲よ數年、朝よ夙く倫道を講し、時に佳作を投せらる、われら謝せざるべかず。垂東仙史氏の作、題郝降曝腹書圖は雄健なると例々のとなり、

泉南漁史氏の前々號批評、文は健なり、雄なり、整なり、寔に批評に適せるならん、されと其評言に對しては隨分異論のあるもの多からん、余も亦其一人、今は事諄々しけれハ他日に讓りて、こゝよ擱筆す、作家諸君余か不敬を尤むる勿れ、乞ふ恕せよ余は思ふと言はねは、腹ふくれざる下賤の性なり、余は多謝す作家諸君、兄等の妙文余をして痼疾半を癒すを得せしめたり、茲更よ謹んて多謝す。余は一個の斷言を忘れたり、曰く余ハ責任を以て此文を草すと、

雜報

天長佳節

恭しく惟みるに我敵聖文武なる　今上陛下登極在して以來、著々茲に二十有九載、王化四海に洽く皇威八紘に振ひ、億兆其下に綏して皷腹擊壤泰平を謳歌す、吾曹草莽の微臣、叨りに此聖世ゑ生れ此至恩に浴す、何の光榮か之れに若かん、矧んや、新疆の草賊漸やく迹を絶ちて、生蕃亦東望　陛下の赤子たらんとを冀ふに臻りては、誰か稜威の隆々を頌し奉らさらんや、明治二十九年十一月三日我校例に依りて、表誠の典を倫理講堂に擧け、職員學生一同肅しく　御聖影を拜して寶壽の無疆を祈り奉り、大島校長勅語を捧讀し畢て式を徹す、時に午前七時三十分、

野球部員に檄す

金風颯々として枯葉を拂ひ、銀塘露冷ゑして劍氣蕭森んに逼る、洵に是れ雄心落々として揮身の覇氣抑へ難きの時、而かも運動場裏草萋々霜は空庭に入りて樹葉疎に、萬籟寥寂人の影なく、吾曹か曩に滿腔の熱腸を灑て野球部員に促せし警告も、哀れ一片の舞文となり終れるを悲しき、觀上向陵丘畔柏葉の健兒は、十年練磨の快腕を揮て横濱の牙營を拔き、碧眼の隆鼻を挫て萬丈の光彩を放ちしに非すや、青葉城下東奥の鳳雛さては阿蘇山麓龍南の同胞、亦時に長棒一振鉄球を逐退して百里の虹霓を綴ると聞くに、唯り怪む我校野球部の沈滯也養浩會の沮喪也、咨往年芳草を蹶り土砂を捲て其技を鬪せし英氣今那邊にかある、懷ふて爰に至れは吾曹不敏と雖校風煥發の任に膺るもの、深く遺憾に堪えざるなり、今や新學年は吾曹に百餘の新來諸子を與へぬ、顧ふに諸子が從來特殊の教育を受け特殊の校風に類いると共に、其運動ゑ於て亦特殊の鍛能を有して、夙ゑ風雲の捲來を竢つものあるを信す、野球部員諸君須らく猛起一番、二年蜚はす鳴かず、蜚ばゝ將ゑ天を衝かん底の大々的マッチを擧行して、茲に新舊兩長の調和を圖り、吾曹をして再ひ該部萎縮の歎を發せしむる罔れ至囑々々、

噫横田茂君

梧葉淅瀝として風なきに散り、孤鴉淋しく啼て疎林に還るの夕、同窓横田茂君は溘焉として遠く逝きぬ、噫悲哉、君は愛知縣の人、資性温厚工科に志して夙ゑ令名あり、不幸ゑして一朝肺を患ひ、久しく故園ゑ安臥して靜ゑ回春の期を竢ちしも、曼天無情にして齡を君に藉さず、萃に鵬鴻の大志を抱きて空しく北邙山頭不歸の客となるに臻れり、悼惜何んぞ禁へん、嗚呼、淺野川の水滾々盡くる時なく、兼六園の花歲々變るとなし、而かも運動場裡曾て黄塵を擧けて熱球を逐退せし人、今や去て復た覿るとを得す、悼哉、

弓術部競射畧記

十月十一日斯道熱心家か待ちに待ちたる終日競射會は、例の弓術射場ゑ催されたり、此日宿雨新ゑ霽れて一天拭ふか如く、寒暄體に適して心氣坐ろに凛たり、出席員凡へて五十餘名、午前八時半より通常射的始まり、彈弦飛箭の響轉た荐りにして翔鳥影を潜めぬ、正午より當日の主眼たる學生競射は行はれぬ、那須の小冠者宗高ならねども、取り傳へたる梓弓引てはいかで返さんと、血氣に逸る得意の面々、弓矢片手ゑ悠然と練り出てゝ見れば、的は正しく十五間の前きにあり、年來鍛ひ上けたる乃公の手腕、百步楊葉を穿つの妙こそなけれ、個程の近距離何かあると、滿月に引絞り矢聲を切て放ちし狙は違はず、襲と音して見事貫く黑點に、媮婉滿面笑を湛ゆるあれば、あたら二十本の空箭に馱骨折りけりと頭を搔て謚やくもあり、かくて三回の立會ゑ三等賞を得たる人々は、

武内　梅吉　　相馬　羊吉　　早瀨　三永

次は來賓及職員採點競爭的にして、六八宛四回の立會あり、楠先生が百十九の最高點ゑ拔群の譽を顯はされしは、流石〳〵と謂ふべきのみ、最后の二寸金的各自競爭には、吾もゝゝと腕に覺えの殿原が、秘術を盡し氣合を計り、張りては放ち、放ちては番ひ、此處を先途と競ひしも、名譽の挂冠を戴きしは寥々として僅ゑ三人、

長郷　修造　　上田　尙久　　本多　政由

右終て散會、

評議員及委員更任

朝長勘十郎　佐々木雄次郎　春秋原在文
古澤鍵次郎　横田利三郎　中村光吉
栗本貫一　田鶴濱次吉　稻並幸吉
阿部政二郎　堀保次　森部孝郎

八木重三郎　秋澤貞猪　久保田整
隈川豐　白石久夫

右定期の改選に依て評議員に當任し又左の諸氏は各部の委員を囑托せられ何れも承諾せり、

ローンテニス會

柏原省私　江間圭一　曾根康郎
湯川宗理　德岡精彦

ベースボール會

中村光吉　今井三郎　秦又四郎
吉田哲雄　上村勝爾

三先生慰勞會

何事ぞ無聲堂裡常にも增して竹刀聲叱咤聲の旺むなる、雲の湧くは龍の騰るにやあらむ、風の吹くは虎の嘯くにやあらむ、霜月十四日、こは是れ岩崎、秦、柿田三先生か京都なる大日本武德會に臨まれたると慰めむとての大稽古なり、聲嗄れ、腕なへ、肉も痩れつ、午後四時、四十余名の若殿原、打ち連れて寺町妙典寺に趣く、酒三行、三先生を圍みて談笑すれは、當日の光景瞭々目前にあり、海內知名の武道家、多年研修悟得の秘術を盡し、天下の活氣活勢此に鐘る、彼を送り此を迎へ、恍惚時の移るを知らす、又身の有無を忘れぬ、あはれ此間の愉快は竹刀おつ取り、將に疊蹶たつる者にあらすは悟り得まじ、さは思はさずや、やよ若殿原、（某生）

裏門を開放せよ

冀くは裏門を開放せよ、初より其設なくんは敢て謂ふの要なし、業に是れあり、しかも門衛の外更に校丁を玄關に佇立せしむる程の餘裕あらば、須らく適當の處置をなして裏門を開き、以て諸生の便を計り給へ、余の如き朝寢坊にして北方遠隔の地に居住するものは、之れかために往々遲刻し、殊に倫理講聽日の如き、定期の大便も打捨て朝飯も碌に食はす、匆忙裏門の畔に來れは號鐘の響急なるに驚き、馳せて扣處に入るも時既に晩く、空しく入場遮絕の悲運に遇ふを屢次なり、固より曉起一番登校すれは、何の造作もなき筈ながら、世の中は左右一も二も理屈的定規的に行くものにあらず、冀くは當局者諸君宜しく事情を參酌して之を採納し給はんとを、敢て懇ふ、（貧眠生投）

投稿函を傾くれは、飜々として此一篇は舞ひ出てぬ、雜報子は素より其奈何を知らず、爰に揭けて當局者諸君の劉覽に供ふ、

演說部大會記事

紅霞烏影を送りて倦禽林に還り、疎鐘夕陽に響て暮色徐ろに寰宇を包むの時、仍ほ運動場裡飛毬を趁ひ打器を閃かしてネット、ライヽの妙音を城後の白壁に反響せしめつゝあるものは、庭球部の殿原に非すや、十里の長江望蒼茫として蘆荻風に戰き、孤帆遠烟に沒して掉歌幽に聞ゆる河北湖上、長櫂を揮て銀波を碎き、雄心落々舷を敲て高く吟するものは、短艇會の健兒に非すや、無聲堂內憂々たる竹刀の響撲然たる顚倒の音絕ゆるひまなく、弓術射場鏑音弦聲高く天外に漏る、嗚呼運動界の活氣夫れ斯の如く熾なり、而かも蕉窻雨暗く蕭々たるの夕、一盞の青燈を剪りて讀書瞑想すれは、興は秋夜に隨ふて愈長く、歡は落寂に連れて倍深きの時に非すや、此際演說部か旗皷堂々運動界に對峙して、懸河迸泉の辯を演し風發卓厲の說を吐て、頃來の蘊蓄素艱を發す亦宜なりと謂ふへし、時は十月三日、處は學生扣席、聽衆は早や犇々と詰めかけて百五十名に垂んとし、即て登らんとする辯士の噂もすめり、此方より高らかに笑ふ調子、彼隅には低く語らふ聲、雜然相混して既に一種異妙なる活趣を帶ひぬ、墨痕淋漓たる演題紙飜るの下、紙を展へ筆を握りて鹿爪らしく机に憑るは委員にやあらん、午下二點鐘と覺しき頃、俄然拍手の響は場の東西南北に起りて委員總代野村淳治君を迎へぬ、簡單に開會の趣旨を述へて席に復すと見れば、梅野盛之助君ハ聳然として既に演壇に起てり、題は靈魂不滅の思想なり、氏は此深玄奧妙にして而かも趣味ある哲學的心理學的難問を如何にして解釋するやらんと、聽衆今更に堅唾を呑んて耳を欹つれは、偖も呆氣なし論旨薄弱辯說急激一も其要領を得るに至らざらんとは、氏は先つ宗敎と密接の關係ある此思想か如何にして人類の腦中に入りしかを社會學上より論して、例を智識淺薄なる古代の人間に徵し、又日本埃及其他各國人か古代墳墓に其人か愛玩せし寶劍等を入れしも此思想ありしか爲めなりと結へり、

失望と呆氣とを以て充たされたる聽衆は、今や活潑氣銳の青年佐々木雄二郎君を、沸くか如き喝采を以て歡迎したり、渠れ畢竟何をか語らんとする請ふ之を聽け、現世紀に於ける物質的進步は殖產界に一大革命を與へ、由來腕力に生活せし勞働者は、傭主に附隨して殆んと獨立を失ひ

ぬ、よしや賃銀は漸次騰貴せしも其眞の報酬は却て減少せしなり、要するに此革命に由て暴富を得しは資本家にして窮路に迷ひしは勞働者なりき、於此乎社會的志想は蔚然として興り、英佛を中心として全歐を震盪し、其餘勢は遠く合衆國に及ぼし、公然資本の累積は掠奪の結果なり勞働者は其生產せる富の全部を需むるの權ありと叫ふカールマルクス派を生ずるに至りし所以を、著書に依り統計に由て詳述し、尋て之れに對する政策を論して曰く、吾人は貨物分配の不均一は決して今日に始まりしに非るを知れば彼の過激なるマルクス派に雷同せず、復た資本家企業家の存在を否認する共產黨にも加擔せず只殖產的革命物質的進步の絕大なる今日に於て、其生產を何人か消費し又如何なる割合を以て社會各部に分配せらるゝかを留意すべきのみ、是れ一般社會休戚の由て分るゝ所以なるを思はゝ吾人は Mobe rate sense に於て社會主義を唱へさるへからすと絕叫して降壇す、題は殖產的革命と社會主義なり、音吐明徹辨說快なりと雖憾むらくは語勢往々緩急を失し且手を振り体を動かすこと余り多きに過きたり

第三席演題はダイレンマ、演題の奇は先聽衆の好奇心を喚起して喝采の裡に風姿瀟洒たる眼鏡子笠井雄吉君は起てり、君徐ろにコップの水を傾け、又手一輯說起して、曰く余の演題は論理學の事異りて意同しと謂ふ論法に非すして、即ち進まんか進むに難く退かんか退くに難く、通俗の所謂進退維れ谷まるの意なりとて、幕末の形勢を說き亞細亞大陸の衰替を慨き、之れを恢復せしむるゝ世界的日本の天職なりとし、其方策を述へて曰く、抑も國家富强の基は人民の優良と位置の利便にあり而して日本は此二大要素を兼有せりとて、ベルツの調査を示し臺灣西比利亞を說き更に叫んで曰く、日本か此の如き善良なる人民と豊饒なる土地とを有せるに何故此くもダイレンマの境遇に陷りしか、曰く世界的日本は出生日淺かりしなり、日清戰爭は此幼兒を俄然生長せしめ、今や此境遇を脫して龍騰虎嘯の大活劇を演せんとせるなりと結論す、論脉能く整ひ音聲亦朗なりと雖、活氣乏しきかため稍や聽衆の倦厭を招きしとは是非なし、力なき義務的拍手は笠井君を送りて演壇は佐伯敬一郎君を迎へぬ、君は英雄と時勢との關係を說て曰く、人世の事業たる其成すへき時になすものは容られ、成すへからさる時になすものは容られずと、於是華盛頓を引き格朗空を擧げ渠等の成効も畢竟時勢の寵兒たるか爲めなりと斷して壇を降る、論題既に陳套矧んや所說茫漠雲を摑むか如く且徹頭徹尾何等の抑揚なく頓坐なく單調無味なるをや、宜なり聽者の同情を博し得さりしも、

今や聽衆は前後二回の單調に倦んて醉ゑるか如く眠れるか若し、此際角面巨眼の一青年は此單調を破りて一場の活氣を起さしむるの重責を其双肩に擔ひつゝ演壇に起てり、渠は强者の權力は則ち權利なる所以を說て曰く、其繼嗣者に最强者を要する豈歷山帝時代にのみ限らん、中世近代亦然り、若し世界をして余の演題の如くならしめは人世の不幸不正之に過すと雖、事實其然るを如何せん、而我所謂强者とは正理公道を蹈む者に非すして最强きフェストを有するものにありと叫んて擊卓一番蝶にあらで生白き拳を揮ひ、固有の巨眼を睜て成田屋！の喝采を博したる手際物凄きと謂はん方なし、渠は於是論旨を一轉して歐洲人の自家撞着せる所以を述へ、遂に歐洲の外交官い三百代言の如く軍人は强盜に似たりと斷し、更に步を進めて千八百十五年か維也納會議を說き、露土戰爭の干涉も遂東還付の勸告も畢竟平和なる錦繡の裏に嫌惡すへき利己心と魂膽と包容せるのみ、此時代に於て唯依賴すへきは鉄拳にありとて、復例の得意の拳を揮ひぬ、渠は又宇內統一論を擔き出して、例を魯米に徵し、永く世界の盟主とならんは、區々たる外交に非すして武力にありと結論せり、其論稍や奇矯に失する處あるも首尾一貫し、且熱心なる態度と輕快なる辨說は喝采を得たり渠とは誰そ法三年に嘵舌家として其名も高き園千秋君を謂ふなり、

第六席、曾我部俊雄君、演題い得能講師か曾て本誌に寄せられたる東西文化の調和論に就てなり、冒頭の諧謔は滿場の頤を外さしめ、次て眞面目に歷史に依り古今東西兩洋思想の衝突を列擧し、進んて現時我國に於ける兩洋の衝突を表裏より說き、其利害得失を比較細舒し、更に論步を一轉して曰く、人類處世の最大案件は健全に生活するにあり、故に求食の要あり隨て農商工の業務は決して輕侮すへきに非すと雖、現時は古代と異り、衣食の爲めに習學するを以て、大學者大美術家出つるとなし、咨此等神聖なる職業も、パンを以て目的とせる現代の專門家の手に歸せる間は、到底其天眞爛熳なる好果を望

むへからさるなり、偖も淺間しや求食は人類最后の目圖にあらさるをと、淡々たる辨說に間々滑稽を交へて、聽者を倦ましめさりしは御手柄なり、されと忌憚なく之を謂はしめは、君の演說は未た以て天眞爛熳人の肺肝を衝くの妙を有せさるなり、豈顧はさるへけんや、

岡慶二君は次席辨士として顯はれ、勞働者保護策を說けり、其說の前半が佐々木君の論と暗合せしも亦奇ならすや、十九世紀に於ける物質的發明は遂に世界人類の大半を占むる勞働社會の自由を奪て、隸屬主義に陷らしめたるも、未だ一人の起て之を救濟せんとする者なきは遺憾ならすやとて、例を紡績職工に採り渠等の狀態を第一期第二期第三期に大別して、其生し來る弊害を縷說し、次て本論に入り、此等の弊害を除去せんには、年齡の規定、時間の制限、一定の住居、相應の敎育處及小兒保育處其他保險法等を設くるの必要ありとし、獨逸の營業條例を引證して、敘し去り述へ來る數万言、滔々盡くるとなく、一時間餘の長演說を至極眞面目に至極沈着に舒べて、しかも非常の快味を與へたり巧手々々、吾曹か茲に當日の白眉なる彰譽語を呈するも敢て誤辭に非るなり、撼むらくは紙數限りありて其全般を記し能はさるを、

最后の辨士を松島重隆君とす、氏は嘗て法三會に於て擊卓百番雙手を揮ひ演壇を踏鳴らして、慷慨淋漓なる壯士的演說をなして有名なる人なり、果然渠は肩を聳かし眼を睜はり濶步して壇に登れり、今迄沈み切たる聽衆は彼か如何なる不平を漏らすらんと大拍手大喝采否寧ろ冷嘲に失せさるかの如き大拍手大喝采を以て之を迎へ怒るか如き吼ゆるか若き渠か叱咤を竢てり、底事ぞ々々々、渠は意外にも最と沈重なる口調を以て說起して曰く、萬物其平を得されは則ち鳴る吾人か不平を有するも宜ならすやとて、蒼蠅き程不平の種目を並立て、次て精神を解剖して Will, Intellect 及 Emotion の三種として、各其作用を擧げ、若し一朝にして三者の調和を失へは、不平の念勃然として起るも其利用の如何によりては、善ともなり惡ともなるとて、古今人士の事業を列擧し、最后に西洋人と日本人との不平感念を差別して、吾人は血と肉とを以て万世一系の帝國を保持し、苟も其進步を妨くる者あらは毫も假すなきの不平を有すと結へり、其落着きたる割合よは、其氣取りたる割合には渠の議論は薄弱狹隘なりき、且や時々滿帆的反り身をなして聽衆を睥睨するか如きは餘り見能きものよ非るなり、君果して首肯するや否や、妄評多罪、

飛花落葉

昇敘及傭入、　秋山敎授は從六位よ敘せられ、獨逸人エーマン氏は自本年八月至卅一年七月滿二年間傭入となれり、

講談會、　十月　日化學敎室に於て西田講師は「スピノザの性行」に就て講談せられたり、

授業料、　授業料は從來每月分納なりしも、來年一月より、左の期日よ由り徵集せらる、

第一期(四圓)　自九月十一日　至同月二十日
第二期(四圓)　自十一月十一日　至同　月二十日
第三期(六圓)　自二月一日　至同月十日
第四期(六圓)　自五月一日　至同月十日

修理竣工、　兼て踏板取換中なりし無聲堂も土木其工を竣へ不相變修練の健兒よ富むと云ふ

紀念書寄贈、　故山形、石田兩君紀念のため、本校圖書館に書籍寄贈せん計畫ある由は曾て報道せしか、愈其目的なりて數冊を寄贈せり、

漫言一束

男子世よ處す、須らく洒々落々光風霽月の如かるへし、些々たる衝突區々たる感情よ激して、萃に一致協贊の良風美德を壞るが如きは、吾曹の最も與せさる處、

必すしも唯々諾々たれとは謂はず、されと徒らよ巧辨を弄して是が非でも我意を貫かんとするは不可なり、「あい〳〵と返事一ッで天地も人も吾身もまるく治まる」と云ふ歌を何處かで見たり、校門內一步を踏込まむ時少なくとも着袴せよ、制帽また同しとは、吾曹か曩よ絕叫する處なりき、今にして此揭示を見る、吾曹は寧ろ其遲きを怪むなり、

有志大競漕會記事

今や秋高くして氣淸く、白岳亦其名の如くなりぬ此時よ方り、霜晨一晰「髀肉肥ゆ」の歎あるもの豈啻に駿馬のみならんや、見すや尾山城畔赤屋の裏、七旬長暇の間に鍛え得たる其腕と、養え得たる其胸を撫しつゝ、其之を振ふよ地なきを歎ちつゝある若殿原が述懷は何、蓋し陸上の運動は來ん月の天長節に行はるゝと明かなれば、此健脚と此鋭氣とは充分よ用え得べけんも、獨り此健腕を振ふべきの水上の運動よ至つては

則ち尚ほ半歲の后を待たざるべからず、是豈に胸懷を白岳の雪に磨き、思想を北海の波に洗ふ四高健兒の能く忍ぶ處ならんや、』果然躊躇せる彼等の英氣は遂は溢れて有志競漕會の聲となり、疑つて二間四方の一大檄文となりて漏らされぬ、處は白砂碧水の濱、時は高秋清氣の節、而かも日は之れ神嘗の佳晨、其如何ゑ清快に又壯勇に前后十四回の競漕が千秋樂を謠ひしやは乞ふ之を以下記する處の蛇文ゑ徵せよ、呼んで有志レースと謂ふ、規摸の大ならざる知るべきのみ、然れども自ら立て發起人となりし我二年生焉ぞ安閑たるを得んや、爾來賞品の撰定ゑ、競漕地の測量ゑ、會場の整理に將た會費の徵集ゑ、委員は東奔西走、殆ど忙殺せられんとす、斯る間に、日は移りて十六日となりぬ、前日來、風と雲と雨とを以て、滿たし來りし北國特有の天氣も、此日午ゑ至りて漸く晴れ、今や明日の競漕會は金看板付となりぬ、それがあらぬか、此日午より金石往來の上、頻ゑ三々伍々、黑顏金章兒の黃道碧松に映じ行くを見ぬ、記錄子亦此群に尾して大野ゑ到る、此日練漕する者僅ゑ卅人、之を夫の大風飛雨を犯して激浪ゑ擢し、夜暗濃霧ゑ隱れて窃ゑ舵を握りし今春の大會ゑ比せい、其熱不熱抑も孰れぞ、若夫之をしてメダルの授與なきが爲あらしめい吾輩豈ゑ謂ふに忍びんや、然れども、吾曹い其素因の慥ゑ他ゑあるべきを信ず、蓋し天候の險惡ゑりしい固より之が源因あるべきも、撰手競漕のあかりしい抑も之が一大素因あらんか、昏黑月夜ゑ乘じて、明日の競漕地たる、根布ゑ回航し一同村長中島氏方ゑ營す、泊する者總て五十幾人、皆是れ明日の快戰ゑ見事月桂冠を着けんとの野心家否あ熱誠兒のみ、夜星光の燦然たるを見、衆皆快を呼んで征夢を結ぶ、

明くれば則ち十月十七日、神嘗祭の佳晨い、漁屋影隣れる此寒村ゑも來りぬ、天い晴れて碧きと藍の如く、風清くして氣柔ある春旦の思あり、淡霞薄く湖面を掠めて漁父投網ゑ忙しき處、旭陽一閃劍峯の上ゑ望む何等佳絕の秋晨ゑ、想起す今春大競漕會の定日、勞夢漸く破れて、晴快ある春陽を見んと期せし勇士が、枕頭檐滴蕭々として風雨の湖々たる聞きし當時の心中ゑ、然るに今や聞く處の者い、嘻戲の聲のみ、萬福の音のみ、喜んで慶する者、豈只會員諸氏のみあらんや、

八時と云ふ頃、喇々たる鈴い全村を亘つて開會を報じぬ、記錄子匆遑筆を携えて之ゑ赴く、只見る旭旗林立して朝嵐ゑ飜る處數棟の假小屋、其間ゑ位し、中あるい賞品授與所ゑまて、右あるい競漕者の支度所あり、其前ゑ三流の國旗一直線上ゑ立つい、蓋し發漕點ゑして、亦決勝點ありとい審判船の其横ゑ位置せしゑて知られたり、遙か向ふに三個の黑影水上ゑ浮沈するい浮標ゑあらざるか、更ゑ中流漣波瀉々たる處、三羽の白鷗、眠れるが如きは、回航の標船にあらずや、蓋し今回の競漕、距離を八百メートルに短縮し、航路を矩形に取りしものは聊か前會斜航路のために幾分の物議を招きしを防がんがためのみ、而かも其徵意の遂に貫かれたるころ目出度けれ、既にして、第二の呼鈴は鳴り響けり、響に應じて出たる面々は總て廿有一名、白、赤、青、各三組の制裝をなし、腕を撫しつゝ三艇に分乘せし樣の勇しさ、蓋し是ゞ當日第一回の競漕者名譽の初陣者ありとは知られけり先づ悠然として各艇獨力にて發漕點迄漕ぎ上りぬ、上りて直ちに各其位地に着けり、間もあく用意の號令はかゝり、各艇の勇士盛に櫂翼を張りて、今は只一發の號砲を待つのみ、忽焉硝煙は昇れり、衆眸は均しく之に注きぬ、未だ何れ先、何れ后とも分かぬ時より、早くも陸上頑是なき幼童等が、赤勝て、白敗るあ、等、罵りわめくも、面白けれ、艇影は漸次に近づき、觀衆は鳴り出せり、見れは、青最も前にありて、白赤之ゑ次ぎ、各之を拔かんとあせる者の如し、而かも勝は遂に青ゑ歸しぬ、蓋し第一回競漕は時間勵行のために、殆んど、過半數は、補欠より成りし彌次連なりしを以て、固より左程目覺しき競漕ゑてはあらざりき、

今之が名譽者を報ずると共に先づ番組を茲に示さん

第一回									
	赤	白	青	艇名	航路	着順	時間
舵手	阿部元松	佐々本菊者	丸山義男	瑞	中	2	
整調	近藤他家雄	田宮春策	傍士定次	葦	左	3	
五番	佐藤共之	上田範治	平澤象二	數	右	1	4.48
四番	柳田友麿	河原治二	北川健三				
三番	高松鐘三郎	林義輔	山崎清一郎				
二番	兒島亮吉	長谷川勝造	阿部莊二				
艇舶	阿部善次	山岸勇	土田泰庸				

第二回			第三回			第四回		第五回			第六回			第七回		
赤	白	青	赤	白	青	赤	白	赤	白	青	赤	白	青	赤	白	青
近藤常吉	近藤他家雄	久保田整	今井三郎	江間圭一	田中正太郎	紅林豐治	曾根廉郎	秋山教授	大島校長	木村教授	傍士定治	高橋堅	曾根廉郎	瀧山與	住田寅二郎	加藤莅
朝長乾十郎	黑田太一郎	中山佐之助	高木清吉	寺崎新策	丸山義雄	瀧山與	近藤他家雄	柳田友麿	老田太文	今西良雄	澤田堅太郎	水木常信	黑田太一郎	中山佐之助	近藤常吉	久保田整
栗本貫一	大島辰之助	加藤莅	西野藍二郎	東郷直	土田庸泰	田中正太郎	栗本貫一	大森保之助	森田蓊	野村淳治	佐々木雄次郎	紅林豐治	藤田良平	稲垣文次郎	山縣平作	永野幹
林直	後藤正堯	老田太文	山田莊一郎	佐々木菊若	糸井仙之助	田邊輝雄	林直	松浦圓四郎	兒島	甲谷三吉	柳田友麿	伴房二郎	後藤正堯	阿部莊二	高澤辰之助	武田滋次郎
秦又四郎	吉田幡誠	鷹取鶴二郎	伴房二郎	小澤柳	內藤昌太郎	大島辰之助	今井三郎	鷹見	倉茂範行	西野藍次郎	阿部元松	佐藤共三	吉田幡誠	堀覺太郎	小澤柳	鷹取鶴次
金澤智融	澤信吾	植木隆太郎	山科祐二	高梨恂一	松浦圓四郎	岡田光次	水木常信	山下齊治	丸山義男	山科祐二	安藤豐	北川健三	山田莊一郎	松王數男	澤信吉	長谷川勝三
長谷川勝造	吉田哲雄	森田齊二	山縣平作	佐藤芳	大津胖	中村光吉	田宮春策	佐藤芳太郎	田中國太郎	二宮英雄	中村光吉	栗本貫一	小松然三郎	倉茂範行	鷹見	內藤昌太
數	瑞	葦	數	瑞	葦	數	瑞	葦	數	瑞	瑞	數	葦	瑞	數	葦
左	中	右	中	左	右	中	左	右	中	左	左	右	中	右	中	左
2	3	1	3	1	2	2	1	1	2	3	1	3	2	3	1	2
	5.30			5.25			4.27			5.10			4.50			5.18

第八回			第九回			第十回			第十一回			第十二回			第十三回		
赤	白	青	赤	白	青	赤	白	青	赤	白		赤	白	青	赤	白	青
野田教授(醫)	秋山教授	高安教授	小藤孝德	東郷直	長谷川茂一郎	田代齊	曾根廉郎	光町三郎次	大島校長	佐野助教授		柳田友麿	小藤孝德	赤澤欣二郎	高松男	田代齊	浦井鏘二
伴房次郎	今西良雄	河原始二	赤澤欣二郎	高橋堅	田中正太郎	吉村盛男	林直	水木常信	磯田講師	高安教授		中山佐之助	瀧山與	澤田堅太郎	住田寅二郎	黑田太一郎	水木常信
吉田哲雄	平澤象次郎	中野玄二	早川外吉	今井三郎	大島辰之助	永野幹	平澤象二郎	元田龍佐	野田忠教授	秋山教授		東郷直	中野玄次	森田蓊	野村淳治	大島辰之助	栗本貫一
金澤智融	植木隆太郎	山田莊一郎	高梨恂一	稲垣文次郎	鈴木一吉	山下齊治	高木清吉	天野	高木嚴	天野生徒		今西良雄	糸井仙之助	河原始二	松浦圓四郎	稲垣文次郎	大塚晃長
西野藍次郎	吉田幡誠	林義輔	永松文一	東方伊三松	森田齊二	山岸二男	阿部善二	上田範治	今井教授	木村教授		藤田良平	佐々木雄二郎	長谷川蔑一郎	永松文一	東方伊三松	秦又四郎
高木清吉	山科祐二	寺崎新策	松王數男	堀覺太郎	澤信吉	鈴木一吉	長谷川勝造	甲谷三吉	福見助教授	宮川教官		武田滋二郎	安藤豐	高澤辰之助	見島亮吉	佐々木菊若	佐藤芳太郎
秦又四郎	阿部善二	上田範治	鷹取鶴次	大津胖	大塚晃長	倉茂範行	田中秀夫	高松鐘三郎	松田教官	櫻井教授		早川外吉	申村光吉	小松然三郎	田中秀夫	山崎清一郎	永野幹
數	瑞	葦	數	瑞	葦	瑞	數	葦	瑞	數		瑞	葦	數	葦	瑞	數
中	左	右	右	左	中	右	中	左	中	右		中	左	右	左	中	右
1			1					1	1	2		3	1	2	3	1	2
5.18			5.01					5.10	3.01				5.			4.56	

第四十回													
赤	久保田整	赤澤欣二郎	松村大吉	朝長琵十郎	浦井鏘次	北川健三	高松勇	瑞	中	3	
白	江間圭一	傍士定治	近藤常吉	瀧山與	紅林豐次	寺崎新策	加藤苞	數	左	1	4.30
青	重嶺一祐	曾根廉郎	田宮春策	吉村盛男	森田蕃	後藤正堯	大森保之助	葦	右	2	

第二回、（回航競漕）　回航競漕は今回始めて、換言すれば、短艇競漕會、成つてより、初めの事あれば、最も衆目の注する處とありぬ、既よ衆目の注意をひく、漕者焉々奮發せざらんや、果然競漕は中々の活氣を沿へぬ、發するに先だち、舵手各々、回航の秘訣を敎え居し者の如し、蓋し此種の競漕よ於ては、トップ固より其人を得ざるべからずと雖も、舵手の器量は尤も大切ある者、而して、今此の舵手たる人抑誰、白に近藤（他）氏あり、赤にも又近藤（常）氏あり、何れ劣らぬチャンの面々、而して青の舵手は、則ち夫の前會よ「必定船人の子あらん」と迄、評されたる久保田氏なり、一は力量を以て、一は手練を以て、何れも優る者、不知本會初戰の回航レースに、第一の戰勝者たるもの誰ぞ、號砲一發三艇は均しく纜を切りぬ、スタートに於てベストありし赤は、標船に至る迄、勢最も銳く、白を拔くもの半艇身、而して青は更に半艇身許后れて最後よあり、而かも舵手平然、毫も噪げる色あきは、蓋し自ら大よ期する處あるが爲か、果然今將よ回航と云ふ所よ於て、彼が髮は逆立せり、彼が眼は朱を注げり、ストロークバックバウヘビーの聲は如何よ凄しかりしと、先鋒にありし、赤は回航最も惡しく、白は大距離を回航して反て后れ、此間よ、最も巧よ、又最も速よ、回り、今や形勢は全く一變せり、然れども赤余勇猶ほ衰へす、忽ちよして白を拔き、今や猛然、ヘビーを以て、青に迫りしも、青亦さる者流石は所謂「船人の子」呼吸其宜しを得、口以て之を勵まし、手以て之を助け、遂に一艇身の差を以て、万歳の聲は其艇員の口より叫び出されぬ、

第三回、（直航）　何れも、櫂大よ亂れ、從てビッチ亦調はず、赤殊に甚し、其終始、白青二艇の競漕たりしもの、固より故なきよあらざるなり、白よは流櫂せしものありしも、巧よ之を避で以て累を他よ及ばざらしめしのみならず、反て之がために奮興し、殊よ決勝點前の强漕最も其功を奏し、遂に一艇身の差を以て青よ勝ちたるは、所謂禍を轉じて福となしたる者、

第四回、（回航）　稱して時習寮南北撰手競漕と云ふも、其面々の過半は本校のファーストチャンなりしより見れは、本校の撰手競漕と見做すも亦可ならんか、號音一發天に伸するや否や、撰手の健腕は堅きと鉄の如く、濤然水烟を張らしつゝ馳する兩艇は、尙ほ双龍玉を爭ふが如し、赤はスタート宜しかりしも、突然コースを變したるは抑も何か爲ぞ、人は謂ふ、之れ白の航路を奪はんがためと、然れとも之れ或は其標船を見誤りしにはあらざるか、兎も角も之がため、赤は航路に於て余程損したる者の如し、回航は白甚た宜く赤は最も肝腎ある舵手轉倒せしかためか、回航よ於て既に一艇身后れ、二百メートル許の處に於て二艇身余の差となりぬ、於是寮生は各々躍起とありて叫び出せり、罵る聲呼ふ音抑も彼等撰手の耳よ入るや否や、吁今や万事休す白の勝は殆んと爭ふべからずなりぬ、於是か豆の如き赤の舵手はヘビーを連呼する者數回、勢猛然飛龍の如く、勝敗の數未だ俄に決し難き者あり、然れども、流石は白のチャン、英氣は益々加はり、遂よ中原の鹿い白よ歸し、南側万歳の聲は直ちよ響き亘りぬ、時を費す僅に四分廿七秒とは凄しき者あり、只夫赤が初より既よ敗勢とは悟りつゝも尙ほ最后のヘビーに至る迄、毫も周章するあく最も整然と輸贏を機徵の間よ爭ひ遂よ其差をして僅に一艇身餘り迄よ爲せしの手ぎわは蓋しチャンのチャンたる所以か、

第五回、　忽ち拍手の聲の一隅より起りたるも道理や、見渡せは、白よ大鳴校長あり、赤よ秋山教授あり、而して青は則ち木村教授の乘る處、蓬々たる其髯、輝々たる其眼鏡、焉然たる其貌、何れや愛嬌の種ならざる、然れども、何れも未だ嘗て此技よ驗あき山船人、而して任は全艇の死活一よ其方すの間よある舵手の重職、之が前途を危ぶ者豈啻よ漕手と當人のみならめや、此時よ方りて南風漸く强く各艇皆其發點に調ふとの遲かりしも蓋し之が爲か、然るに無情なる砲聲は之が整列をも待たずして、早くも出發を報ぜり、スワ戰は始まりぬ、各艇の摸樣如何よと窺へは、白の如きは出發用意未だ整はず、聲を聞て愴遑櫂を取りたる程あり、然るに青始より、

勢甚だ強く、白赤二艇后よ躊躇たり、舵手の得意思ふべし、然れども得意は失意の基、先頭にありし青は如何にしけん、端なくも回航標船に觸突し、茲に一頓挫を來しぬ、之を見し赤と白は好機失ふべからずと、一鞭猛進勝敗を競ひしが、勝は遂よ赤よ歸しぬ、之れ蓋赤舵手其人を得たると、スタートよ於て得る處ありしが爲か、

第六回、（回航）　發して間もなきに何事ぞ、三番々々と、舵手の警叱する聲は、青白を通じて交々起りぬ、赤の遂に是等兩艇を拔きしもの固より故なきよ非らず、況や白の力を用ゆる始めよ強きよ過ぎしに於てをや、青は終始第二位よあり、而して其最后よ於けるヘービの如きは頗る功ありしも、惜哉櫂亂れて統一を失し、勝の赤よ歸せしもの蓋し數の免かれざる處、？

第七回、（直航）　左流の青は初より航路蛇行し操櫂亦甚だ亂る、而して赤は始め勢甚だ佳なりしも、進むよ從つて、勢次第よ衰ふ、於是今まで眠れる如きの白は、奮起一番强漕を以て突進しぬ、猛虎一たび野よ出づ群羊焉ぞ敵せん、遂よ二艇身以上の差を以て勝は之に歸しぬ、

第八回、（直航）　回航船迄は三艇幷進互角の勢なりしが、水は油たる能はず水は則ち水のみ、白の間もなく勢衰へ、强漕殆んど功なかりしが如き者、蓋し此理か、然れども赤と青との競漕、依然激烈、加之常漕强漕共よ功あり、或ゝ前し、或ゝ后し、一進一退、思ひず觀衆をして掌裡汗を握らしむ、若夫決勝黙間際の競漕に至つてゝ、奇觀又壯絶、而して青の運や悪しかりけむ、三分の一艇身の差を以て赤勝となる之れ野田教授の殊よ得色ある所以か、

第九回、（直航）　「初に强き者必しも强きにあらず、終りに强きを以て之を强しとなす」、と、ゝ吾之を此競漕に於て見る、初め白先頭にあり、青之よ次ぎ赤最も后る、赤の遲れたるゝ航路の曲りしか爲のみ、故を以て彼が一たび正路をとるや、勢ゝ倍增し忽よして青を拔き今ゝ只白を殘すのみ、則ち余威よ乘じて一擊の下よ之を拔かんとせり、然れども白亦さる者焉ぞおめ〳〵敵よ首級を渡す者ならんや、赤の猛進し來れるを、見るや、ヘビー又ヘビーを以て遂よ、二艇身の差を以て、赤よ勝ちたる手際ゝ、甚た見事なりき、只惜むべきゝ、青白共に終始ピッチ亂れ、赤亦早きよ過ぎたるを、若夫赤よしてヘビーをかくる猶少し早かりしならんよは、勝敗の數未だ俄よ決し難き者ありしならん乎、

第十回、（直航）　此競漕よも、亦前回と同轍の事物が噪り返されたるこそ是非なけれ、二百メートル頃迄ゝ赤最も早く、白之に次ぐ、然るよ中頃より、白進行甚だ佳、櫂整然亂れざりしのみならず、ピッチ亦其度を得、若是を以て續かんにゝ勝ゝ慥よ白の者と思ひしよ何ぞ計らん今迄殿軍たりし青ゝ突擊一番、勢騎虎の如く、强くして亂るゝなく、勝ちて慢るなく、忽よして青を拔き、餘勢一振、又遂よ白を拔く、勝つ者半艇身、

第十一回、（職員競漕距離四百メートル直航）　嘗て手よしたる處の者、箸にあらずんば、則ちチョークと、筆のみ、然るに、今や相起て競漕場裡よ驅馳せんとす、其技の癲痴奇なる、固より其處なり、若し個人運動を以て、競漕の能事足れりとなさゝ、此競漕ゝ正しく金鵄功一級を得しなるべし、スタートよ於て、一の號砲なく、用意なく、兩艇相談づくよて發漕せしもの既に妙、況や威勢なく、活氣なく、徒にヨイヤサ〳〵の掛聲のみ勇ましかりしよ於てをや、舵きかずして艇蛇行し、櫂亂混して鋒芒相接するの觀あり蓋し櫂の亂れたるゝ可なりスタート間もなく流櫂したる尙可なり然れども櫂毫も水よ觸れず空しく、空を切て、空よ歸る者ありしか如きゝ、豈抱腹して絶倒すべきの極よあらずや、加之休むと勞すると皆一よ隨意のみ、一人許して曰ふ、恰も水中の各個教練を觀るか如し、と、余故よ曰ふ、之競漕よあらずして狂漕なり、狂漕よあらずんば則ち興漕のみ、ど、然れども白赤共よ整調の御手際ゝ、中々見上た者なりき、中頃よ於て白先づ休み、赤亦次で休む、僅よ四百メートルの興漕中、戰鬪場裡よありながら悠然櫂をすてゝ休むの余裕あり、教官諸氏の雅懷大膽、蓋し計るべからざる者あり、始より赤大よ勝ち、遂よ三分一秒の時を費して、赤白よ勝つ者二艇身余是赤の强きよあらずして、白の弱かりしが爲のみ、然れども吾曹ゝ教官諸氏の振て競漕よ投じ、本會よ幾分の興を沿へられしの勞を謝せずんばあらず、

第十二回、（回航）　放心ゝ學問の一大障害とゝ是れ先哲の云ふ所、競漕も亦一の學問なりとせゝ赤のスタートに於て后れたるゝ慥に此原則を蹈みしなるべし、然るに烱眼能く此技の秘訣を知る白ゝ、最も機敏にスタートヘビーを掛け企圖は正しく的よ方りぬ、然るに、彼は最大距離

を以て回航せしため、大ゝ損したるゝ更へ、青の回航ベストなりき、而して赤亦惡からず、於是三艇殆んど併進の樣となり、一艇ヘビーを凹べは、他艇亦之ゝ應じ、鼻息を窺ひ、呼吸を計り、一漕一進、苟もせず不知中原の鹿誰ゞ艇の有ぞ、決勝點は十メートル近きに來りぬ、而かも三艇は依然併行の位置ゝあり水烟漠々勝は有耶無耶陸上の觀衆は鳴り出せり、各艇ヘビーの聲水神龍王も聾せんばかりゝ響きぬ、洶々又轟々の一刹那、砲聲高く破れて万籟一時ゝ靜まりぬ、靜まりたる觀衆と激したる競漕者の眼は等しく審判船の方ゝ注がれぬ、而かも最も大出來なりし此競漕の月挂冠は、遂ゝ白の頭上ゝ輝きぬ、白青ゝ勝つ一尺赤の青ゝ后る者亦僅に三尺、勝利者は固より以て誇るゝ足るべく、敗者亦以て榮となすゝ足らんか、

第十三回、（直航）　初めの程は青一位ゝありて白之ゝ次ぐ、青の櫂亂れしゝ拘わらず白容易に抜き得ず、白小癪にやさわりけん、茲ゝ彼は猪流の暴進と決したるものゝ如し、果然白の舵手は白布を握つて立ちぬ、立つと等しく白布は振られ、ヘビーの嚴命は下りぬ、青赤相次で强漕を用ふ、敢て問ふ諸氏は決勝點は尙優に四百メートルの遠きゝあるを知らずや、五指の交彈は拳の一擊ゝ如かざるを知らざるか、吁此長距離を抱て此英斷を決行す、卿等抑何等の經倫かある、彼等の强漕は、益々急ゝして櫂は愈々亂れぬ、而かもヘビー又ヘビーを以て遂ゝ勝は白ゝ落つ青の白ゝ遲るゝ者半艇身諸氏も亦大ゝ力めたりと云ふべし、

第十四回、（回航）　秋陽未だ暮冷を送らず、健兒未だ漕艇に厭かざるに何事ぞ、有志大競漕會は早くも茲に千秋樂を謠はんとす、觀衆惜み漕者亦憾む、然れども此回は各艇皆三四人宛のチヤン連の乘組めるとなれは此憾み此惜みは其れ此會と共ゝ消へんか此組を今日の殿軍ゝ置きし番組掛の注意も亦周到なりとや謂はめ、スタートは白最も上乘、加之回航の關門亦苦もなく通り抜けぬ、而して青は遠距離を廻りしゝ拘はらず、其手際は最も大出來なりき、之が爲ゝ彼は第一ゝ回航し終んぬ、而して白之に次ぐ、然れども何れ劣らぬ流々の面々、豈俄ゝ之を以て勝敗を決すべけんや、此時に方りて赤の擧動は如何なりしか、スタートゝ於て失敗し、回航に於て失敗し、而して航路ゝ於て失敗したる彼は、無念や亦もステッキポートゝ突擊し、今や心ならずも「我事止む」を歎せざるを得ざる境遇となり了れり、回航以來百五十メートル許は青は依然先鋒ゝありしと雖も、今や彼が櫂尖は漸く鈍まりつゝあるの感なからざるか、烟眼なる白は早くも之を看破せり、忽ちヘビーは利用され舟は怒龍の如くに狂進し今や正に青を拔かんとす、之を見し青のピッチは急ゝ早くなりぬ、蓋し早きを利用して以て白に敗れざる決心なりしならんも、過勞と活劇とは相俱はざるを如何せん、好漢心千里を走りて、眼は空しくも腕と櫂とに注がれたる一瞬時硝烟は高く揚りて、一流の白旗い審判船の檣上清く揚げられぬ、時實に午下三點鐘、湖面より吹き亘る實達嵐は益々清らかに翩る旭旗の色、起る萬歲の響、勇や壯やの聲と諸共に、有志大競漕も目出度茲ゝ終を告げ磅礴せる七旬の覇氣も茲ゝ消え、只白岳舊ゝ依て白く北海の濤聲益々高きあるのみ、

（豐泉記す）

秋期陸上大運動會記

前觸れ準備の事

惟みれは、七十里の長江、八洲の曠野を蛇流し、水光瀰漫、杳として天際に連るの處、草は繁るの那須武藏野原の間、昨い我か　聖上陛下、躬親ら近衛の戰闘を帥覽し玉ふの擧あり、今月今日は、朱樓層榭逶々として雲霓に聳えたる桂闕の下、亦實ゝ征清以來の大觀兵式を擧げさせ給ふと承る、吾曹何の幸か、猥りに此鳳辰を卜して、末技を校庭に練るの餘慶を荷ふ、何んぞ眷々として稜骨を鍛ひ、覇氣を皷し、　万乘陛下の優恩に答へ奉るの素を養いすして止む可んや、由來、我校の講武演技、微と雖も旨い茲に存する也、

櫻狩せし春に變り、一道の金氣爽然として流るれば、輕葉搖落して蒼凉肌に清く、水い纖々として谷滑かに、風は飄々として露冷かなり、赤蜻蛉の紅葉を散す枯枝に、膨れ聲なる山鳩も宿りて、牧笛の調べ微かに晩照ゝ入るの夕、浙瀝たる樹聲、蕉窓を渡るを聞けば、今年も茲に、千秋の思ひありし運動會の風評傳り、去らぬだに、肉動き腕鳴る滿校の殿原、過きし當年の快戰、縈如として忘れ遣らす、怦々たる蓮宵の夢は、莽々として既にトレーニングの柵埒を驅けつゝ在ると傳へ聞かすや、霜憔信慓、馬い槽櫪に躍り、銀河星希にして劒

氣心に泌む、翩々たる丈大の羽檄颯と流れしより、待ちよ待つたる天長節は終に來りぬ、夜來の桂魄圓く華胥に入り、晨月幽房よ落ちて、曉霜の陳々たるに夢破れば、輕靄旭暉淡々として叢に赤く、千峯の翠嵐薄く奇嶂を累ねるよ先つ雀躍し、支度もそこ〳〵會場指して馳付ける。合戰よゝ刻限早けれど、朗々たる曦光晴巒を破つて昇り、校庭よ亂るゝ草露、爽々未た隕ちず、營兵の衣手染むる錦楓、そよ吹く金籟よ音して、滉蕩百里、秋情の閑なる、樹傳ふ小鳥の嬌嚶も小春めきたり。今しも開戰の準備と覺しく方六町よ餘る校庭ゝ、とつ國々の赤旗綠旗、幾百流となく醫王颯よ飜りて、幽々たる凄野の尾花よりも繁く、白條鐵衣曉光よ反照して星章の閃々たるゝ、甲兜の星に明ける野營に彷彿たり、二騎三騎、紅白蒲黃の紐打つたる白面秀美の大將か、茲處彼處に奔走指揮する樣、百戰百勝の若殿原が、奇謀功名に醉ふ叫喚の囂々たる、馳違ふ人馬の塵烟の濛々たる、怪しや、如何なる大軍の充滿したる戰場かと疑ゝる、爛然、黃櫨楓の濃紅なる尾山城雁に近く、嚴霜よ老えたる十丈の巨榎の下、幾十張の幔幕引廻したる連營の中、一段高く葵の紋所染抜きし幕營にゝ、會長大島氏優然と茲よ陣取つたり、後なる三間許の溜所にゝ、花に驕る才略優長の殿原、開戰遲しと脩籠る、左右に連る役員席、來賓席、會員席、十全病院、諸學校生徒席、兵士席、及運動技場の手配裝飾ゝ、華麗なること、整備したる事、委員のお骨折甲斐、懷れて賴母し。

賣店、造り物の事

今日ゝ抑も〳〵、牽牛織女の烏散橋を渡て、一年の懷抱を解くにも似たる晴れの場なれば、光景の賑々しき、殿原の狂奔せる、我乍ら驚嘻するに堪たり、會場の入口よゝ、淡濃こき交ぜし黃芳紫瓣を刻みて、運動會の文字を染飾せしアーチ鬱乎として聳ゆ、銃を結ふて垣根とし、劒を連ねて其間を縫ふ、光芒陸離、翠綠蔚々、先つ寂寥を破て人の膽を奪ふもの、是れエーマン先生の寄附なり。西翹數十武、百尺の蠹幹亭々として天よ參する畔、双眼鏡の如き仁王然たる一大巨人の睨立するを看る、纖氈を衣服よ作り、竹刀を弓となし、フラッシュを眉毛としたる巧妙奇警の意匠ゝ、是一部一年の考案に係る神武天皇東征の像なりとかや。此の立像の横手にて麥湯の接待も風變にて無邪氣々々。更よ進て柵埒よ近けば、左右に掛茶屋めきし葭簀張あり、滿艦飾よ擬せし無數の國旗ゝ、屋上高く龍虎の雲よ鶩して空よ舞ふか如く、軒端よゝ紅白の球燈を吊して、澹蕩なる色紙短冊さへほのめかせし風流雅韻ゝ、哀れ、如何なる若殿の慈善店かと伺ふに、君か代、四百餘州、ゼルマンマーチ等の合奏、洋々として節面白く起るゝ、東側の醫三屋か、八陣の險道を穿鑿して、觀客を釣込まんと景氣付けたる也、四穴八窟の難關を首尾能く打越し花客にゝ賞品を贈遺し、漫然陣中にて慣死往生する者ゝ、法外の押賣よ囊底を叩かせらる秘術とぞ知られける。工風珍奇なればにや、我も〳〵と押合へて、晩景迄も觀客の蟻集絕えざりしゝ大出來。

左の方、酒煙草、菓子類、店狹まに羅列し、山出しの腕白風なる番頭四五人、双手を振り胴聲張あげ、さあ〳〵御掛けなさい、と必死の客呼に聲迄枯らして見えけるゝ、法三屋の出店なり此湄、逍遙する紳士ゝ、理も非も言ゝす引摺り込まれて、醇酒嘉肴の短兵急なる歡待よ、泥醉淋漓、蹣跚として降參の白旗飜へす者數知らず、貴紳將校連の捕虜、簇々客室よ溢れて、晝頃にゝ、酒紀念ハンカチーフは一切品切れとぞ觸れたりける。

法三屋よ續きて、三部生の賣店と聞えし花簪屋あり、紀念簪一手販賣の傍ら、コーヒーの御馳走を添ふ、曉辨の賣子を差副へて、盛に押賣を爲すも此の商店なり、店の体裁も艶美なるよ、丹唇螢眉の美男揃にて、お世辭愛嬌惜氣もなく振蒔きし程よ、婦人令孃方の浄覺え特に目出度く、簪の賣行夥多しきのみか、珈琲召し給ふ蟬髮紅袖の女姓が、繁げ〳〵立替る繁昌ゝ、茲一等の大當りを占めて、餘所乍ら浦山敷し。

綺羅花の如き婦人席を左に、商賣氣離れし一構ゝ時習亭なり、卓上よ松盛齋の生花三ばいを据えたる外、好趣向ゝ無きも、來賓雜沓して、立錐の地もなく、茶汲男の繁忙、眼の廻る許りなりしゝ大滿足なるべし。顧みて時習寮を眺むれゝ、寮生の手に成れりと思しき大アーチ、間大の横額にゝ弐の字しかと讀まれたり、弐や、弐や果して何の意ぞ、校内一と云ふか、日本一と云ふか、門上飜々たる幾流の旌旗、順を逐ふて讀み下せゝ、曰く天得一以清　地得一以寧。と而して寮得一以清寧と云ふか。其他十全病院、餅投の寄附等。數多けれと、皆々御免を蒙る。

殿原矢合せの事

去程に、軈て野戰の時刻ともなれば、爆然、轟然、信砲般々、黑烟空を蔽ひ殺氣天に震ふ、すゝ合戰ぞと陪觀人ゝ蒔々と雲霞の如く押寄する記錄係ゝ兎毫を横へて待ち、審判員ゝ雋眼を四角よして控ゆ、忽ち看る、飄然第一回競技者ゝ潑々として出發線上よ跳出てたるを、技ゝ二丁競走より始まる。

第一回。二町競走。鈴音響き號燧答へて、拍手急霰の如く湧き、喝采山を崩へす如し、青勝てよ、赤負けるな、抔口々に呼ゝるを看てあれば半週の頃ひ、眞先よは紫白の二騎、韋駄天走りよ砂礫を蹴立てゝ競ふ、誰ぞ先鋒は、聽く間もあらす、咄嗟、決勝線間際に紫は白を追襲して驀然疾風の如く突進し、一等旗は早くも彼の頭上に振られぬ、是當日の先登者吉田哲雄君とぞ知られける。續て四回の同競爭あり、秋澤貞猪、高梨恂一、山口重作、佐藤男二郎、の諸氏各桂冠を握る。

第六回、提灯競走。狼狽して摺附木よ組付くもあり、驅後れて無提灯の浪人となり、面目失ふて其儘僵死犬死を遂るもあり、摺れとも〳〵點火せざるに燒腹立てゝ、マッチ箱抛付くる男もあり、小提灯小接に抱て、散々よ驅付くれば、肝心の觸火知らぬ間よ消滅して、齒嚙みを爲して引返すも可笑く、弓張腰の老爺か、千金の遺寶を拾ひ、眼々蹌々として持歸り顏なるも捧腹の沙汰なり。千樣萬態、百鬼の匐ふよ似て、黃蹟き、赤走り、青僵れ、哄笑どつと四方よ揚れは、逸早く紫白帽の丸尾晋君、先鞭を制して決勝點に上り、見事大喝采を博しぬ。次回も同競爭、續て二回の戴囊競走行はる。

第十回、四町競走。紅流有聲、斷崖千尺、俄然猛奮の猪勇を驅て、各二週よりヘビーを行る、間もなく紅は青、黃に勝て先陣よ進み、白帽半途よして紫、紅、を拔き、青、紅、躍て更よ白騎を追ひ落し、一歩一挺、寸進寸勝、勝負ゝ正よ互角、清流激動し萬象喧騷して立つ、危機一髮、突如、紫駿天馬の如く挺身して空を切り、刹那紅旗飜々として賞品席よ馳するを見る。紅、白、相次き二着三着ゝ殘念々々。

第十一回、二町競走。軍扇ゝ又々山口重作君よ揚る、後二番のスプーン競走と柳拾ありしも記するに足らす。

第十五回、六町競走。八間ハンデーの驍將田中氏を始め、雄勃たる十三名の健兒、何れ劣らぬ雲衝く許りの荒武者よて、見事眞一文字に驅散らしくれんと身搆へたり。此勝負見逃して一大事と、萬客靜まり返つて見物す、鈴聲鏘然、硝烟羃々龍を畫けば、斜々魚鱗よなつて驅連なり、宛然一個の走馬燈の廻るが如し、二週目に近くや、ヘビーの聲一際よ破れ、原田しつかりやれ、青木負けるな、抔大勢汗を握つて罵る。心得たりと殿軍したる紫紅の大兵、快然虎竹の猛威を皷して駝鳥の如く飛騨し、あはやと云ふ間よ、三間餘の大差を以て、天晴れ大勝利をぞ奏しける。五尺八寸萬歳の喊聲百雷の落ちたるに異ならす。

十六回より二十一回まで、四町、提灯、柳拾、戴囊、等交々も演せられて竹馬競走に移れり。

第廿三回、竹馬競走。出發點よて眞逆さまよ落ち、起きも直らて討死するもあり、馬足を陷穴に馳込み、矢庭に落馬するもあり、半週の頃にゝ人馬諸共に疲憊して、脆くも陣沒する腰拔武士多き中に、快鞭疾驅、輕く馬蹄よ砂烟り揚けて、颯と大勢の眞中を懸拔けし一騎ゝ、法科三年に隱れもなく剛猛無比の名賣つたる松島重隆君とぞ註されける。

第廿四回、四回、幅飛ゝ田宮春策君十七尺一寸を飛んて凱歌を奏し、當年の俊將江間圭一君、ハンデー附の十六尺一寸よて、三等賞ゝ果敢なし。竿飛ゝ、八尺九寸を超へて松本勉君無敵に誇り、高跳ゝ五尺七寸を跳ねて、メダルゝ石井直君の胸間に輝くを見る。

甘五回の四町競走終りて、時習察より劔舞の寄附あり、赳々たる四十餘名の壯客、白鉢卷よ白襷十字よ綾取り、草鞋脚半甲斐々々しく着けて袴の股立高く取つたる扮裝は、丙行の唐詩に誠忠の微衷を奏したる櫻木武士の面影忍れて雄々しく靜々と、來賓席近く練出てし折には、元祿の昔四十七士の勢揃も斯くやと想ゝれたり、

天長節　函峯　村上珍休

天長節。天長節。聖壽萬歳天長節。新歸驅土妖氛絶。昨起仁義師。今仰　皇化熙。愉快又愉快。傾盡百千巵。君不見古今居治不忘亂。朝磨文藝晩武藝。高歌一曲斫地舞。拜稱　聖壽億萬歳。

天長節々々の吟調、嘹朗として起れゝ、劔芒一閃、發矢、室を脫して巨蟒を切り、咄嗟、大蛇を中斷して玉霰刃に散る、寂然夜を斷てば電光閃めき、草を振へは塞月凛として秋水に凝る、

敵を斬り馬を屠りて光芒愈鋭く、悲猿一聲、山峽の月よ叫んで壯士時に斷腸の悲みあり。敵去り戰勝ち、相見て相笑ひ、鮮血を洗ふて室に收むれば、佩劍戛々として微聲あるを聞く、瞬轉左を拂へば又右を擊ち、沈んで踰ゆれは直に跳り、一進一退壯絶又快絶、瓛々として亂れず、晃々として萎まず、猛虎深山を出るとき、錚然として風登り、蛟鰐青潭よ戰ふ時沛然として雲起るか如し、遽然、緩調急律、嘈々として急雨の如く梢頭を掃へば、鐵袖高く旭扇を飜して、萬歳歡呼の聲どつと四方よ破れ、百千の鳴雷の落ち掛りし如く、乾軸も須臾よ挫けて地よ沈むかと怪まれたり。

第廿七八回、貳人三脚競走。興味津々、數萬の觀客恍然鳴りを靜めて見る、生野團六、安部元六の兩氏、手もなく先着を制し、佐藤龜久治、田宮春策氏の一組同く恩賞よ預かる。

第三十回、六丁競走。二十八名の健脚家を凌駕して、易々と佐伯敬一郎君の先登よは、惘然舌を卷いて驚かぬ者なし。

折しも時ハ、午の刻よも近かりければ、號砲轟々、一先休戰を宣告して、人馬よ息をヅ繼かせける、十重二十重よ取捲きし群衆も、四途路に成つて四方八方へ逃散ると、秋の木の葉を山颪の吹き立てたるにさも似たり、時分や善しと、此時花簪屋法三屋の番頭連、要所々々に物見を据へて、落行く葉武者を生擒る振舞、又一段の餘興とぞ見へよける。

（不眠坊）

午後

四十分の休憩時間も今ハ殘り少なよなり了んぬ、往さ來るさの觀衆ハ、平地よ波瀾を起して、熱鬧苑から鼎の沸くか如く、今日を晴なる綾羅の錦ハ、散るや龍田の紅葉と擬ふて、揉まれ乍らに彼處此處よ漂ふを見たりき。

數聲の鳴鈴ハ競技を促して幾たひか場内に響き渡りぬ、技ハこれ

第三十一回スプーンレース、梓の弓の腰あぶなけよ、ともすれハ轉ひ勝なる輕球を、命の瀬戸と玉匙よ操り、俯きなからに走りハすれど、生なき手毬の活きてたバ去り、技よ歸らぬ落花をかこつもいと興あり。

（一）鷹見茂（二）吉川三雄司（三）酒井政吉（四）新見德太郎（五）中村春生

第三十二回、一脚競走、秋蝗の群かり飛ふか如しとハ誰か許せし、田代氏初より勢鋭く、勝利ハ結局此人と見えしか、後よ引き下りし赤澤氏ぬからハこそ、一間のハンデー物ともせす、兩手を車輪の如く廻ハして難なく田代氏を拔き、田代氏憋て急き込む機よ、ドッカと僵れて志賀氏よ拔かれ、一等二等ハ佗の占むる所となり了んぬ。

（一）赤澤欽次郎（二）志賀新（三）田代循

今や五双の擔荷と五人の勇卒とハ現れ出てたり醫學部の餘興と聞ゆ、彼等果して何事をかなさんとするぞ、砲聲一發、五人の健兒ハ驀然として驅け出しぬ、落付く先ハ何處ぞ、甲手を翳して彼方を眺むれハ、轟然第二の砲聲よ哀れ脚をや傷けハん、屏風倒しよ其場よ僵ると見る一刹那、出發點に待ち擕へたる擔荷卒の一隊、韋駄天走りよ驅けつけて、各手早く定めの傷兵を擔荷よ打載せ、繃帶の手當に急ハし、サテハと見る間よ最後の白ハ、此時用意やよかりけん、掛聲諸共一番に舁け出せハ、續て黄も負けじと飛ひ出し、今迄眞先の赤も第三着よと見しハ僻目よて、白と黄とハッタと僵れ、赤先つ得意顔よ決勝線よ立ちたりけり、

第三十三回一分間競走。時間を限りて競走距離の長短を爭ふもの、韋駄天走りとハこれをやいふらん、健脚無双の山口氏は、後るハ敵を尻目にかけ、疾風の如くに一回半を旋りてメダル。

（一）山口重作（二）鹿取龍造（三）藤井靜二

第三十四回、武裝競走。多年此技よ虎視耽々の概ありし佐藤氏、之と拮抗して覇を一方よ稱せし中屋氏三好氏、今咸な去て數年の記錄を接するよ、斯道よ閲歷あるもの僅かよ田鶴濱氏と吉田氏を殘すのみ、而も吉田氏ハ控えて出てず、此處田氏獨占の舞臺、難なく勝ハ同氏よ歸しける。

（一）田鶴濱又三郎（二）安藤豊（三）原田永治

第三十五回、同しく武裝競走。田宮氏スタートよ拔け目なく、群を脱して獨り走ると殆んと十數間、終に優然緩歩して決勝線よ入りしハエラかりき。

（一）田宮春策（二）米山彦郎（三）井原悟

第三十六回、戴囊撰手競走。これみな一度ハ紅旗の下よ立ちて其熟錬を稱えられし人、而も英雄の末路憐む可き哉、頭上の橐囊紛として墜ち、結局甲谷氏と山本氏との競走なりしも、無殘や山本氏も亦一跌して、メダルは甲谷氏の胸よ輝けり。

第三十七回、障害物競走。障害物、曰く横木、地網、横棚、亂柵、圓環、斷棚、獨梁、總て七、

若し夫れ處置敏滑輕快ならんか、五間十間を拔く易々なるのみ、二間のハンデーを付けられたる安藤氏は、脫兎の如く走つて橫木を踰え、地網を搔倪り橫梯を拔け、猿の如く柵に取りつき、兵と身を飜して跳ひ降りたる際よは、最早續く敵もなく、觀るもの惘然として啞々の聲のみ高かりき。

（一）安藤豐　（二）今井三郎

第三十八回、陸上艦隊。今年初めて試みらる、一人目を蔽ふて戰艦よ擬し、一人之を操縱して衝突坐礁の憂を防き、首尾よく前面の旗を握りたるものを勝とす、あはれ水雷に觸れて無殘の最後を遂くるもあれば、各艦の指令に耳を聾して立往生よ無念の胸を叩くあり、事なく彼岸に達せしものは、

（一）原田永次　（二）佐伯敬一郎
（三）慶松勝太郎　（四）高松鐘太郎

第三十九回、竹馬競走。白馬は馬に非らすと言はゞ言へ、苟も竹馬に跨るわれ四高の大將軍、いでや當年の勇士を氣取て、宇治川ならぬ、運動場に一花咲かしてくれんずと、思ふ心のありやなしや、合圖と諸共砂を蹴立てゝ驅け出てたり、眞進よ進み給ふは鈴木の冠者と見しは僻目か、武者振天晴見事に候、續く遠山常陸守、後よりノーノー梶原殿、馬の腹帶緩みて候、といでしや否やそれは知らねど、明治の梶原拔からばこそ、驀地に驅りて當日の先登第一と呼はれゞ、遠山續て先登第二と名乘ける、中よも荒木の判官と聞えしは、音よ響きし强の者、鞍局辷つてドッカと落ち、あたら勇士を死なしてけり、と見る間もあらせずヒラリと打乘り、手綱搔ひ繰り一鞭高く、馬蹄の響ゝ韜々々、行衛も晴の決勝線に着きたりしは、勇ましかりける事ともなり。

（一）鈴木利貞　（二）遠山淵　（三）荒木榮三郎

第四十回、六丁撰手競走。田中氏は運動場裡の覇王、佐伯氏亦後に月桂冠を爭ふ勇士、雲騰龍擲の活劇を見んこと、われも人も期する所なりき、而も砲聲響て田中氏の長髓蛇鳥の如く變り、佐伯氏は後の障とや思ひけん、差したる競走もなくて、メダルは田中氏の手よ落ちたり。此時支那兵十數名あり、旗を卷き脚を空よし、蹌踉として走り來る、敗殘の狀歷々觀るべし、後より威風凜々たる我兵、皷噪して之に迫る、敗兵狼狽爲す所を知らず、合掌號哭して哀を請ふ、我兵進て其身体を檢すれゞ、咄奴輩、餅塊數囊を盜み有す、乃ち博愛なる我兵は、取て之を觀衆に投し、凱歌を奏して去る、蓋し二部一年の餘興よかゝるもの、狂態巧よ人の頤を解くよ足れり、大喝采、大動搖、天地爲めに裂けんとす。

餘興を送り餘興を迎ふ、場の東隅より練り出てたる一隊の壯漢、腰間無反の大刀鉄をや斷たん、好みの扮裝、鉄脚あらはに、雄風四邊を掃ふて、意氣軒昂、若し夫れ頭上一堆の大髯あらしめゞ、鮮血を落花と見し古壯士と誰か疑はん、これはこれ當日の呼物、時習寮の劍舞、想ふ昔、奈翁一發の砲聲か巴里の暴動を靜めしもかくやありけん、將又ガーフヲールドの威嚴ある風采と卓厲の雄辨とが、激昂せるワシントンの市民を沈靜せしもかくやありけん、今迄蜂窠の破れたらん如き騷擾も一時よ鳴をひそめて、乾坤寂々、散り墜つる城堞の秋葉も明よ其音を傳へつべし、此時吟手朗々として歌ふて曰く、

日本男兒

海可飜、山可拔、日本膽、不可奪、
憶起去年征淸役、山屠虎豹水斬鯨、
我兵知進不知退、由來生死鴻毛輕、
東洋覇權落我手、國威刀光耀四瀛、
若有妖雲復覆海、屠盡黠虜千萬兵、

詩は函峰先生か幾夜の推敲に熱血を濺き玄も、歌ひ且舞ふものゝ、北溟怒濤澎湃の濱に幾年氣節を養ふの士、鞘を引て一呵長空を斬れは、光芒宛から一道の白霓を吐いて灝氣急霰の聲をなし、牢落凌厲逸氣奮湧す、謠ふ聲も亦頗る婉妁矯厲、憀亮秋角霜を帶て古戍に號ひ、風泉月に和して寒灘に瀉くよ似たり、嗚呼これ實に一場の余興のみ、而も彼等豈に深く心よ期する所あしとせんや、況や、十年遺恨の胸を叩ひて、深夜北斗を睨むの今日に於てをや。

第四十一回、陸上艦隊。

（一）松嶋重隆　（二）河合鷹
（三）高田範國　（四）辻岡律

第四十二回、盲目旗拾。盲者の一心岩ても徹す、坐頭の京登り、例ゝ昔よ數あるものをと、俄盲者の十有五人、めくら滅法界鵜のかい探りよ、首尾よく檢校職に昇りしものは、

（一）長谷川福平　（二）慶松勝太郎
（三）高澤辰之助　（四）永松文一

第四十三回、竹馬競走。

（一）金澤智融　（二）高松勇
（三）青木澤五郎　（四）新田德

第四十四回、武裝撰手競走。毘沙門の名を得まゝ田宮氏、子を思ふ夜の田鶴濱氏、優劣自ら現はれたるも不思儀なりけり、

メダル田宮春策

第四十五回、提灯競走。

(一)高橋　堅　(二)曾我部俊雄　(三)中山佐之助　(四)山科　祐次　(五)山本　信夫　(六)中村　春生

第四十六回、盲目競走。

(一)柿原　龍彦　(二)寺本　近松

一部二年寄附盲目寶拾、玉唇落英を含む紅顏の兒童、簇々數十人、可憐なる彼等か小さき胸ゝも、競爭心はむらむらと燃えて、扮裝孰れも健氣なり、實ゝや六歳ゝして澤庵石を扛け、七歳ゝして長舌の乳母をやり込むるは、彼の最も得意とする所、まして高等學校の運動會に算を亂して落ち散る寶を、我一番ゝかい込みかひ込み、數や何個と誇り得んゝは、學校歸りの御山遊びゝ嘸巾の利くとなるべし、而も悲しや盲目となり了んぬる今、物の文色も水鳥の、陸に伶徘ふあはれさよ、最初の目算ガラリと外れて、こけつ、まろびつ、卍字巴ゝ行き交ふ樣ゝ、實に盲者千人の世の中を穿つ一幅の好活畫、見る人の善き敎え草なり。

第四十七回、二人三脚撰手競走。此技ゝかけては由來獨歩と誇る佐藤田宮の兩氏、これと競ふは生野田邊の二君、後進なからも御手並先刻拜見の上からなれば、赤や勝たん、白や優らん、と最負最負に噂もとりどりなり、合圖と諸共、兩頭三足不思儀の怪物車輪と走つて、雲時優劣も辨き難かりまゝが、機や熟しけん、ヤットの聲も勇ましく、見る〳〵赤ゝ一間二間三間五間を拔て、今年も例の二人のものとなりける。

メダル佐藤龜久次、田宮春策

第四十八回、提灯競走。

(一)北川　健造　(二)谷口　長松　(三)高　岡　榮　(四)須田嘉三郎　(五)鹽谷　義一　(六)田代　保二

第四十九回、擔荷競走。馴れぬ手業ゝ蹌々踉々の腰元危く、走るとすれゝ八貫の重荷左右ゝふれて、一合半酒ゝ醉ひ痴れし百姓の千鳥脚もかくゝ蹣跚たらさるべし、唯一人際立ちて目覺まゝしきは東方君か、專門の御技量流石〳〵と感せぬゝなかりき。

(一)東　方　籌　(二)藤井靜一　(三)近藤他家雄

第五十回、スプーン競走。

(一)高橋　清一　(二)渡邊九壽松　(三)浦井　鏘二　(四)相馬　羊吉　(五)宇佐美全賢

第五十一回、障害物競走。

(一)武内　梅吉　(二)高梨　恂一

第五十二回、片脚競走。大隈伯ゝ片脚家の巨擘、而も今や風雲ゝ乘じて九重高く舞ひ昇りぬ、誰か果して我校の大隈伯なるものぞ、砲聲殷々、江間氏先つ走ると早く、大躍大踴して決勝線ゝ入れゝ、續くものゝ佐伯氏また生野氏。

第五十三回、提灯競走。

(一)谷口　長松　(二)大口　寅次　(三)竹村榮太　(四)小西虎次郎　(五)高橋　享二　(六)佐藤捨三郎

第五十四回、職員戴囊スプーン競走。昔ゝ浦島太郎龍宮の玉手箱を開いて、見る〳〵頭髮白盡し、今ゝ侃々たる我校の職員先生競爭の魔力ゝ魅られて、頭は白山の雪を欺き、腰さえ回みて弓張月のいと寒けあり、匙上の輕毬搖るれゝ飛ゝん、頭上の白囊動るけは落ちん、頭も大事手も大事、大事大事と驅け出す中ゝも、小川岡部の兩先生、孰れも劣らぬ見事の足並ゝ、拔きつ拔かれつ龍虎の鬪、まはし觀る人手ゝ汗握らぬゝなかりしか、砲聲響て紅旗先つ小川先生ゝ靡くを見たりき。

(一)小川　陳勝　(二)岡部　忠　(三)福見常太郎　(四)宮川　爲三

第五十五回、盲目旗拾。

(一)萩野　重吉　(二)住田寅太郎　(三)脇田　琥一　(四)牧　良一

第五十六回、障害物撰手競走。痩身滑脂の武内氏、精悍輕捷の安藤氏、攀傍自在の靈腕はわれ共ゝ之を知る、思ゝさりき、今や龍蛇虎豹隱見出沒の快觀を見んとゝ、白烟炮口より迸つて、二人走ると奔馬の如く、一度横木に離れて、二度地網ゝ合ゝ、三度高柵に離れて、四たひ圓環に合せんとす、死なしたり武内氏、懸繩に縋て戸輪に齷齪する間ゝ、機、機、彼ゝ機を逸せり、安藤氏身を飜えして大躍して走り去り、相距る直徑十歩、遺恨千秋、武内氏の胸鳴て聲あり。

メダル安藤　豊

第五十七回、各學校撰手競走。

此競走に參與する各學校ゝ

石川縣尋常師範學校、同尋常中學校、同工業學校、同農學校（但當日欠席）私立北陸英和學校、第四中學寮、高等學校豫備學舍、金澤英學院、曹同宗中學林、育英社、

却說、此時見物の各學校生徒、俄に雀噪哇鳴して喧騷呼號するを見る、無理ならじ、今や彼等の學校を代表する撰手ゝ、双翼を收めて狃を定

むる蒼鷹の如く出發點より待ち構ふるをや、見渡は宛然一畝の菊圃、黄紅白桃紛として亂れ、孰れ一校の名花ならざるべき、合圖に擧かれり、疾風の如く驅け出せり、赤や綠や前年より比して脚力稍進ふる、而も余勇を後の一回より蓄ふるなきを知らんや、一回に濟みたり、二回に來れり、見る見る赤黄纈纈の頭に拔き拔き拔ひて奔ること電車の如し、懸つ尋中師範の生徒に狂氣なつて勢援せしも、遲かりき、英學院より一着を輸えて、あわれ十日の菊となり了んぬ。

メダル金澤英學院　(三)育英社

(三)工業學校　(四)師範學校

第五十八回、來賓競走。有髯、無髯、鬚髯、髣髴、清秀、酬面、宛然一場の紳士展覽會、彼等の出つる必しも賞品の多きを望まず、唯これ秋風肅殺蕭索中の一清興、勝つも可、負くるも亦可、尤も白面の高木氏メダルを得しにさもあるべし。

技に去り技に來りて、今や餘す所僅かに二、仰けに、落日今日の名殘を城後の薜蘿に投げて、爛珊燃えんとし、觀衆漸く心忙てゝ浮足四土路なり、遮莫、我校未曾有の大競走を閑却え去らんやに。

第五十九回、マルドック氏特別寄附一哩競走。傳へ聞く、西王母の桃に二千年に一度實るとかや、それにもましていと珍らかなるに此技なるへし、長短肥瘦約三十人、大兵より田中石井松浦の三氏あり、短軀より平澤氏あり、春秋氏あり、風采其趣を異にするとは雖も、而も孰れも鉄中の鏘々たるもの、軒昂の眉宇、勃々の覇氣、萬丈の光焰となつて燃えさらんや、一周また一周、或ものに疾飈の如くに或ものに郵便脚夫の如く、先頭已に三回を走つて、後殿未た二周を終らず、拉々雜々、轆轤の如く轉回して、的一個の走馬燈を見るか如し、四回五回は夢の如くに過き去りぬ、最初より全速力を以て奔馳えたりえ德岡氏は、今や漸く其脚力を虛脱えて氣息奄々、後方にありし田鶴濱氏は、ソレ見た事かと言はぬ許りに、一歩一歩に速力を早め來れり、審判官に六回と宣告せり、眞先に進むは田鶴濱氏か、續て橋本永岡重嶺等の健兒、田中氏に至ては未た足下の舊阿蒙たるを免れさるなり廻る半回、發矢、彼は全身の英氣を長髓に籠めて、見る〳〵駝鳥の如くに奔り出せり、神速か、神速當らす、電馳か、電馳當らず、轉瞬一人を拔き、二人三人を屁目にかけて進て田鶴濱氏に迫る、而も今や決勝線を距る僅に一歩、田鶴氏倉皇後足を曳て決勝線を踏むの時、機、機、機、機々前額に髮あつて後頭禿く、無殘、田中氏の脚已に地に着て聲あり。

(一)田中正太郎　(二)田鶴又三郎　(三)橋本喜久三

(四)重領　一祐　(五)稻垣文二郎

第六十回、各級撰手競走。幾分の時間は各級撰手の運命を賭して、一秒一秒に輾り來れり、唯見る戰機結んで雲縱横、爛々たる眼光撰手の渾身に凝て、半千の酡顏宛から柿緋の秋の如し、今迄片唾を飲むて控えたる學生は、段々たる轟聲と共に一齊かく匐き出せり、赤よ、綠よ、黄よ、將た、紫よ、喚ひ掛けられたる彼等撰手は、今や狂へる獅子の如く、一氣直注、猛然土風を捲て躍り出でたり、一團の黑雲人か鬼か、踵々相接し相距る寸と差はす、而も見よ、衆生連りに憨て咄々狂奔せるに非すや、ましえ、且聞け、風半布袋然たる佐藤氏は、俄然風を截て一目散、將よこれ落日青山天馬來の勢、大混雜、大擾亂、味噌汁を擂鉢に攪き廻はえたらん如き喝采と拍手の中に、彼に迎えられたり、知らは黄綠の二旗に誰か爲めに振られえやを。

メダル佐藤龜久治　(大學豫科三年撰手)

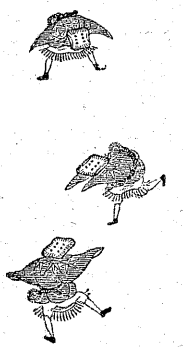
二等　佐伯敬一郎　(同　一年撰手)

三等　佐々木菊若　(同)

祝宴會

夜は次第に來りて、漆の如き昏黑は廣漠たる運動場に垂れ降りぬ、今迄喧騷なりし城後の晩鴉も、引き去る觀衆と共に塒に歸て、瑩々たる時習寮の燈火、獨一日の大觀を語り顏なり、此時物あり暗中に蠢動す、謹々また嘲々、虬龍胡淵に臨て谿水に飲ふの聲に似たり、近ひて之を見れは、健兒數百、運動場を繞りて大團圓をなし、酒を置て飲み且啖ふ、金樽翠爵健兒の爲めに斟酌し、洛妃漢女の輕羅を飜へすなしと雖、終日奔走の餘、枯腸拐然、淡酒粗肴、尙且天厨に入て盛饌に臨ふの思なからんや、已にして拐腹漸く飽き、幾行の熱觴に臉邊微醺を帶ひ、煦々然として渾身解融せんとし、豪放の氣、豁朗の情、今や混然一溶して靄々の和氣となる、即ち腕を扼して當日の快戰を談え、或は高く天長節天長節を歌て吟聲四筵を動かす、終に交々醉ふて、半千の脚趾は半千の處に趨り、また隻影を留めす。

(九華生)



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一雜誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゝるべし

明治二十九年十二月二十日印刷
仝　年十二月廿一日發行

編輯兼發行者　河原始二　金澤市廣坂通第四高等學校時習寮

印刷者　春秋原在文　金澤市石浦町七十六番地

發行所　第四高等學校北辰會

印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地